中等西洋歷史

中學校用

文學博士
瀨川秀雄著

東京・神田
冨山房

43208
教科書文庫
4
230
41-1938
20000
81602

資料室

教科書文庫
4
230
41-1938
2000081602

昭和十三年二月十二日　中學校歴史科
文部省檢定濟

文學博士　瀬川秀雄　著

中等西洋歴史

中學校用

広島大学
教
81602
図書

広島大学図書
2000081602

東京　冨山房　神田

42
230
昭13

例言

一、本書は「改訂中等西洋歴史」の内容を再調精査し、最近文部省で公布された新教授要目及び教授指針に基づき、これに周密なる修正を加へ、平易簡明な口語體で記述したものである。

一、大戰後に於ける國際情勢、現代文化の趨勢及び列國の現勢等に對しては、特別に注意を拂ひ、且つ最新の資料史實等に基づき、その内容を修正し、生徒をしてその認識を誤らしめざることに努めた。

一、隨所に偉人・豪傑・忠臣・賢哲の事蹟・嘉言等を記入し、生徒をして感奮興起その人格の陶冶に資せんことを期した。

一、本書は西洋に關する史實を叙述するに當り、常に意を我が國との關係に用ひ、我が國民としての立場を考慮し、躍進日本の世界に於ける國際的地位の向上を明かにすることに努めた。

一、本文の記事を明確にし、且つ學修上の興味を增進させる爲に、多數

斬新な圖畫と新地圖とを挿入した。特に地圖の表現には少からず工夫を加へた。

一、卷末に年表と着色した歴史地圖數葉とを添附して、時代と史實、史實と土地との相互關係を明かにすることを期した。

本書の内容はかやうにして整備充實されたことと考へるが、更に敎官各位の示敎を仰ぎ、漸次補正を加へて行きたいと思ふ。

昭和十二年六月

著者識す

中等西洋歴史目次

緒論　西洋史の意義……一

第一篇　上古史（紀元前三十世紀より紀元後四世紀頃に至る）……三

第一章　古代東方諸國……三

第二章　ギリシヤ……九

第三章　ローマ　キリスト教……一七

第二篇　中古史（四世紀頃より十五世紀頃に至る）……二六

第四章　民族の大移動……二六

第五章　中古のヨーロッパ……三四

(一)　封建制度の發達と農村・都市の狀態……三四

(二)　帝權及び法王權の盛衰……三九

(三)　ヨーロッパ諸國の王權伸張……四四

第三篇　近世史（上）（十五世紀頃より十八世紀に至る）……五二
第六章　新機運の世界……五二
第七章　宗教改革……五九
第八章　近代諸國家の發達……六四
(a)フランス……六四　(b)イングランド……六七
(c)ロシヤ……七一　(d)プロシヤ……七五
(e)アメリカ合衆國……七九
第九章　近代の國家・社會とその文化……八三
第四篇　近世史（下）（十八世紀末より十九世紀末に至る）……九〇
第十章　フランス革命　ナポレオン……九〇
第十一章　自由主義と國民主義との發展……一〇八
第十二章　國民主義諸國家の隆昌とその發展……一一
(a)フランス……一一三　(b)イギリス……一一七
(c)イタリヤ……一二〇　(d)ドイツ……一二三
(e)ロシヤとバルカン半島……一二六　(f)アメリカ合衆國……一三一

第十三章　近世の國家・社會とその文化……一三四
第五篇　最近世史（十九世紀末より現代に至る）……一四五
第十四章　歐・米諸國の世界政策……一四四
第十五章　世界大戰……一五八
第十六章　大戰後に於ける國際情勢……一六六
第十七章　列國の現勢……一七四
第十八章　現代の國家とその文化……一九三
第十九章　西洋史上より見たる我が國の使命と國民の覺悟……一九九
附錄
（中等西洋歷史年表
（卷末地圖六葉

學生諸子に對する注意 二

一、西洋歷史學修の第一の目的は、西洋文明の由來を明かにし、邦國の盛衰・社會の變遷に關する明確な觀念を養成せしめ、以て日本國民としての覺悟と抱負とを知らしめるにある。それ故、學生諸子は本書を讀むに當つて、常に彼我の國體や國情の異なるところを考へ、世界的日本國民として必要な覺悟と思想とを養成することに努めなければならぬ。

一、西洋歷史學修の第二の目的は、上下五千年の間に活躍した偉人・英雄の性行や事業などを知らしめ、その德性の涵養に資せしめるにある。それ故、學生諸子は本書を讀むに當つて、特に英傑が邦家の爲に獻身努力した偉蹟、若しくは忠魂義膽に富んだ行動などに留意し、その感化と刺戟とによつて、世界的日本國民として必要な德性を養成することに努めなければならぬ。

中等西洋歷史

緒論　西洋史の意義

歷史の意義

一西洋史の意義　歷史は社會人としての個人の集り成せる國家及び社會が、古より絕えず變遷發達して今日に至れる成迹（セキ）を研究する學問である。元來歷史の事實なるものは、繼續的に發生するものであるから、これを場所の東西によつて東洋史と西洋史とに區分すべき理由もなく、また時の古今によつて、これを古代史・中古史・近世史・最近世史等に區別すべき必要をも認めない。しかも歷史家が一般にかかる區分法を採用してゐるのは、全く歷史研究上の便宜に基いたものである。試みに世界史上に於ける文化發展の經路を迚（タド）つて見ると、一方にはエジプトのナイル河畔と、西南アジヤのチグリス・エウフラテ

ス兩河の流域とを中心として發生し、次第に西方に傳播(ヂシバ)し、遂にヨーロッパの全土とアフリカの北岸一帶の地方とに蔓延した西方の文明があり、他方には印度のインドス・ガンガ兩河畔及び支那の黃河・揚子江兩河間を中心として起り、漸次東方アジヤ・朝鮮半島並びに我が國にも波及した東方の文明もあつた。さうしてその東方の文明を研究するのが東洋史の主要目的であるやうに、西洋諸國民の創建した國家及びその文明の進歩發達を記述するのが西洋史の主要目的である。

西洋史の目的

國史は神武天皇が天祖の神勅を奉じて日本の國土を開拓し給うてから、萬世一系の天皇がその後を繼承して、永久に德化の中心となり、我が國民を指導して、特殊の國家を完成し、優越せる文化が育成されるに至つた成迹を記述するものである。始めは東洋史の一部をなしてゐたが、明治以後國際關係が次第に擴大されるに及び、今や世界史の一部を飾るに至つた。

人種の區分　世界の各方面に住居する十數億の人民を通常白色人種(コーカサス人種)・黃色人種(モンゴル人種、或はチュラニヤ人種)・黑色人種(エチオピヤ人種、或はニグロ人種)に三分するが、この場合ヨーロッパの殆

んど全部、アフリカの北部及びアジヤの西南部等に住居して、西洋文明を發達させたものは實に白色人種(更にこれをハム族・セム族・アーリヤ族に三分する)で、就中アーリヤ族(或はインド＝ヨーロッパ族ともいふ)に負ふところが最も多い。

白色人種分類表

- (1) ハム族 ― エジプト人　リビヤ人
- (2) セム族 ― バビロニヤ人　アッシリヤ人　フェニキヤ人　ヘブライ人(ユダヤ人)　アラビヤ人
- (3) アーリヤ族
  - アジヤ派 ― 印度人　メヂヤ人　ペルシヤ人
  - ヨーロッパ派
    - ギリシヤ人　イタリヤ人(ローマ人)
    - ケルト人(ガリヤ人　スコットン人　ブリトン人　ビクト人)
    - ゲルマニヤ人(ドイツ人　スカンヂナヴィヤ人　イングランド人)
    - スラヴ人(ロシヤ人　ポーランド人)

第一篇　上古史(紀元前三十世紀頃より紀元後四世紀頃に至る)

第一章　古代東方諸國

上古期は太古から紀元四世紀の後半にゲルマニヤ民族が大移動を起した時代までを含み、我が仁德天皇の御代、支那東晉の時代に及んでゐる（第一章より第三章に至る）。この期の初にエジプト人はナイル河畔に、バビロニヤ人及びアッシリヤ人はチグリス及びエウフラテス兩河の間に住して、共に西洋文化の曙光を放つた。その後アッシリヤ・新バビロニヤ・メヂヤ・エジプトの諸國がそれ〴〵獨立して相爭つた。さうしてメヂヤの治下から興つたペルシヤは、これ等の諸國を滅して大帝國を創立した。

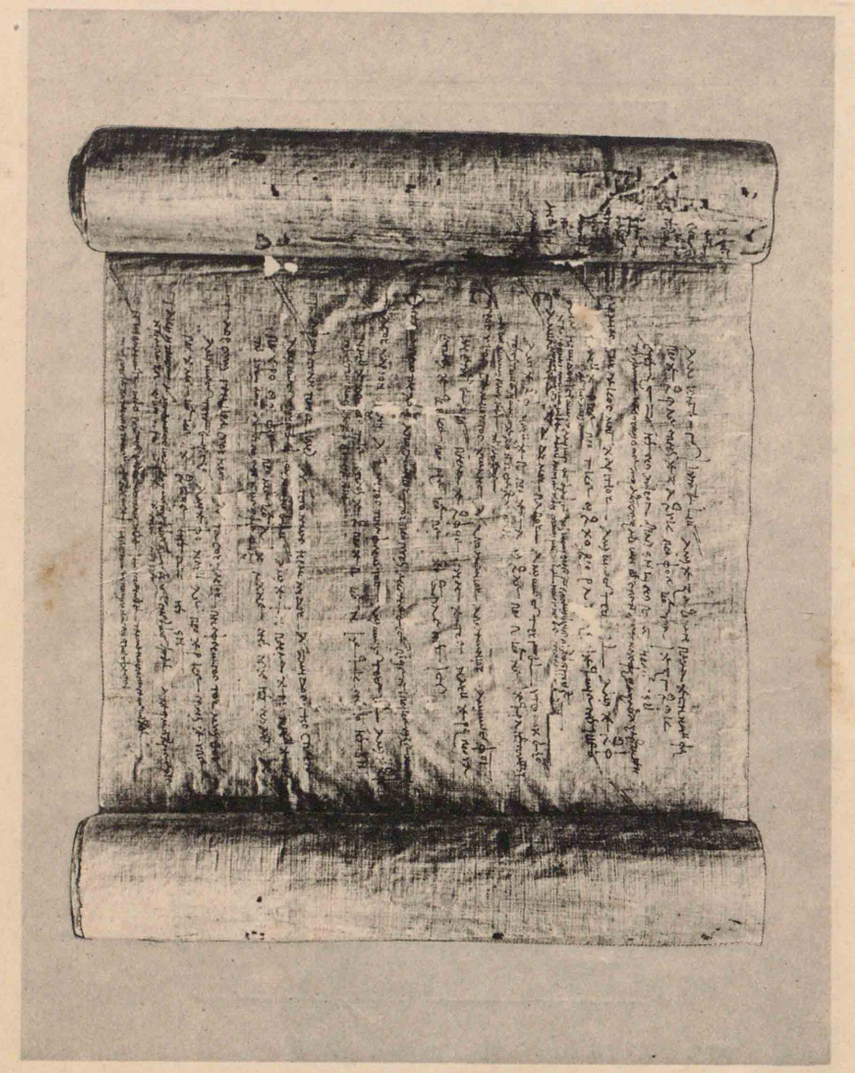
當時ギリシヤはバルカン半島の南方から興り、アテネ・スパルタの兩都市國家は協力してペルシヤの大軍を破り、國運の隆昌を促したが、後、交〻霸を爭つて共に衰へ、遂に北方の蠻族マケドニヤに滅された。その後英主アレクサンドル大王はエジプト・ペルシヤなどの諸國を征し、東・西兩洋に亙る大帝國を建てて兩文化の融合を企てた。

これより先、ローマはイタリヤ半島に興り、その卓絕した武力を用ひて歐・亞及びアフリカに跨る大帝國を建てた。さうしてギリシヤから輸入した文化をローマ化して廣大な版圖に弘め、ここに始めてヨーロッパを基調とする西洋文化の發展を促すに至つた。

エジプトの建國

一　エジプト

エジプト Egypt は氣候が熱くてナイル河畔が豐沃（ホウヨク）（小麥・大麥・亞麻を多量に產出したし）なので、早くから開け、今から約五千年前に既に統一した專制王國が現はれ、夙に開明の域に達してゐた。社會には僧侶・武士・平民の三階



バピルス紙とその上に書かれた象形文字

エジプト人は古くから象形文字を發明し、これを木・石または金屬の上に刻んでゐたが頗る不便であつたので、後には紙の製作をも發明するに至つた。即ちナイル河に生長するパピルス（カヤツリ草）といふ植物の莖を切り、その表皮を取り去つた後に、これを縱に薄く裂き、その薄片を縱横に重ね、ゴム液をその上に注ぎ、これに壓力を加へて一種の紙を製造することに成功した。その上に象形文字を書き、これを卷物にして携帶に便にしてゐた。各國の博物館などに、現物の保存されてゐるものは少くない。ここに掲げたのは、ベルリン新博物館内のエジプト宮に保存するものを寫したものである。

ナイル河とピラミッド

最大のピラミッドはカイロの西、ギゼー村にある。クフ王のもので、高さ一三八・七米で、斜面の長さ一五〇・三米である。

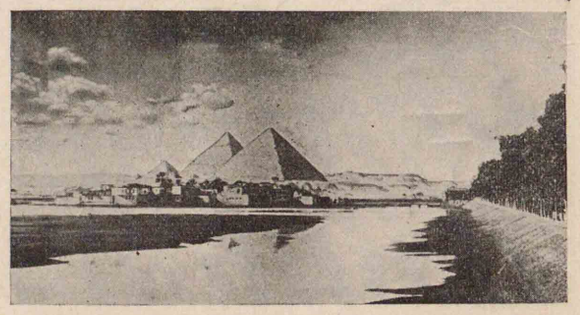
級があり、一般に多神教を信じ、特に太陽を崇拜し、且つ靈魂の不滅なるを信じ、貴人の屍體（シタイ）をミイラ Mummy として保存する風があつた。またピラミッド Pyramid・スフィンクス Sphinx・オベリスク Obelisk などの雄大莊重なものを造り、太陽曆（一年を十二ヶ月、三百六十五日とした）・象形文字 Hieroglyphic などを發明し、パピルス Papyrus 紙をも製造し、測量學・數學・天文學などにも秀でゐた。

㈡ バビロニヤとアッシリヤ

チグリス Tigris・エウフラテス Euphrates 兩河の下流地方は、肥沃で東・西交通の要衝に當り、且つ氣候が暖かであつたので、バビロニヤ Babylonia 王國は早くから興つて、エジプトと共に世界最古の文明國となつた。ところがその後、兩河の上流地方にアッシリヤ王國が興り、バビロニヤを滅して獨立し、次第に西方を征して最大の帝國を建てた。けれども間もなく内亂が起り、蠻族が北から侵入して來たので、國勢は次第に衰へ、

バビロニヤの建國

アッシリヤの盛衰



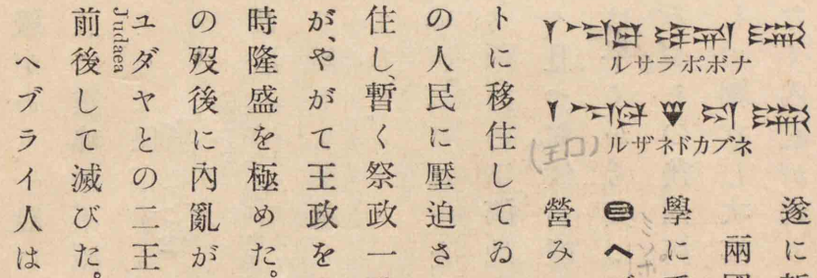
*神武天皇の御頃　支那の春秋時代

兩國の文化

楔形文字

ヘブライの建國

古代東方諸國圖

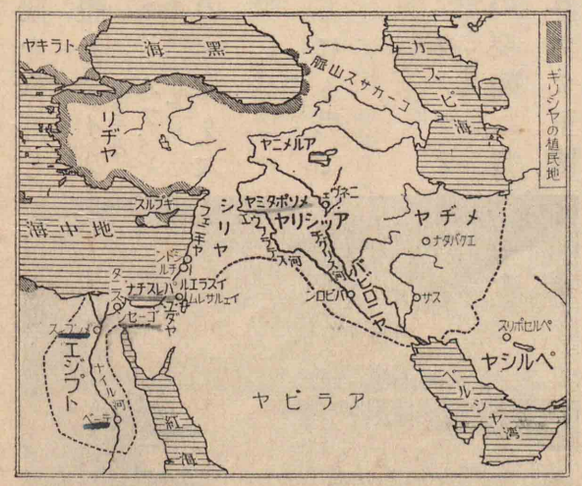


遂に新*前六〇六バビロニヤ國に滅された。

兩國民は多神教を奉じ、楔形文字(Cuneiform Writing)を用ひ、また天文や數學に秀で、建築・彫刻にも巧で、殊に商業に熱心であつた。

ヘブライとフェニキヤ

ヘブライ人(Hebrews)は早くから牧畜を營みつつ一時下部エジプトに移住してゐた。然るにその後土着の人民に壓迫されてパレスチナ(Palestine)に定住し、暫く祭政一致の政を行つてゐたが、やがて王政を立ててから、國運は一時隆盛を極めた。けれどもソロモン王(Solomon)の歿後に内亂が起つて、イスラエル(Israel)とユダヤとの二王國に分れ、間もなく相前後して滅びた。(Judaea)



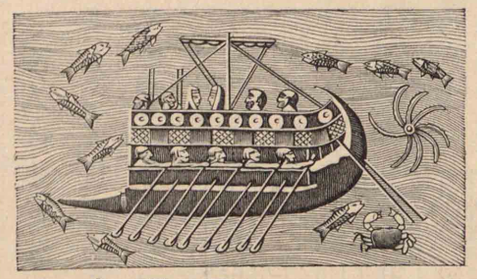
ヘブライ人は鞏固な家族制度を持し、異民族との結婚を禁じて血族の純潔を保ち、また多神教徒の間にあつて固くイェホヴァ(Jehovah)といふ一神のみを信じ(ユダヤ教)、國土を失つた後もなほその信仰を飜さなかつた。

ユダヤ人

フェニキヤ

フェニキヤの軍艦

國人は文學に長じてゐたが、偶像の崇拜を禁じてゐたので、彫刻や繪畫は發達しなかつた。

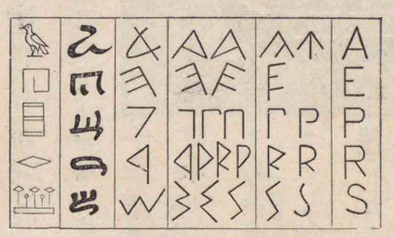


ユダヤ(ヘブライ)人は亡國の後、商人となつて商業の盛な都市に移住し活躍してゐた。今日ユダヤ人が祖國なきも、なほ世界各地に散居して金權を握つてゐるのはこの爲である。

フェニキヤ人(Phoenicians)はシリヤ(Syria)の沿岸地方に興り、早くからエジプトと交通し、地中海の沿岸や島嶼などにも植民し、また大西洋(Atlantic Ocean)から北海を經てバルチック海(Baltic Sea)に航し、且つ陸路隊商を編成して、西方アジヤや黒海(Black Sea)の諸地方にも往來して貿易を勵み、東方の文化を西方の諸地方にも傳播させた。

國人は多神教を信じ、青銅・硝子・染料などを製し、物品交易の不便をさとつて貨幣を用ひ、また簡單な音符文字を發明してこれをギリシヤに傳へ、今日の西洋文字の基をつくつた。

青符文字の發達



古代東方諸國の社會狀態

古代東方諸國では各地到る所に專制政治が行はれ、一般民衆を主體とする民主政治は未だ出現しなかつた。また普ねく迷信が行はれ、不可思議な現象はこれを神の所業として說明してゐた。

四　ペルシヤ　ペルシヤはその酋長キルスの時メヂヤを滅して獨立し、更に新バビロニヤやエジプトを征服した。さうしてダリウス一世はマケドニヤの地方を征服し、更に方向を轉じて西方印度をも攻めて空前の大帝國をつくり、內治を勵み、制度を整へ、商・工業を興したので、領內はよく治まり、國運は一時隆昌を極めた。

ギリシヤの都市國家と植民貿易

オリンピヤ大祭

第二章　ギリシヤ

一　ギリシヤの土地と住民　ギリシヤはバルカン半島の南端にあつて、內地は山が多くて小區域に分れ、海岸は港灣に富んでゐたから、その住民は各地に獨立した都市國家をつくり、また地中海の沿岸・島嶼にも植民して通商貿易を營んでゐた。しかし國人はその民族・宗教・言語を同じうしてゐたばかりでなく、オリンピヤに祀つてあるゼウス神の爲に、四年毎に國民祭を行つて大競技會を催し、全國民を參加熱狂させたので、同一民族であるといふ觀念が強烈に植付けられた。

オリンピヤはギリシヤの南端ペロポネスス半島の西方エリス州內を流れるアルフェウス河畔にあつて、ギリシヤの主神ゼウスの神殿が造營せられてゐた神域で、この神の爲に四年の終、卽ち毎五年目に一回大祭が行はれ、各種競技（徒競走・高飛・圓板投・槍投・角力・拳闘・競馬・戰車競走等）が五日間に亙つて行はれた。さうしてこれによつてギリシヤの全族一致の觀念を養成することが出來た。なほこれと同時に次の如き效果を齎すことが出來た。

(1)この競技は肉體的の練習を主眼としてゐたから青年達の健康を增進したこと。
(2)競技に優勝せんが爲に努力したので忍耐・克己の精神を養成し、且つ名譽に對する愛着心を喚起せしめたこと。
(3)ギリシヤ人獨得の男性的な氣風を盛ならしめたこと
(4)詩歌・音樂等の競技に優勝せんが爲に努力したので、自然にギリシヤ文藝の發展を促したこと。

ギリシヤの二民族

スパルタ

アテネの古錢　ロンドン博物館所藏。

アテネ

㊁スパルタとアテネ

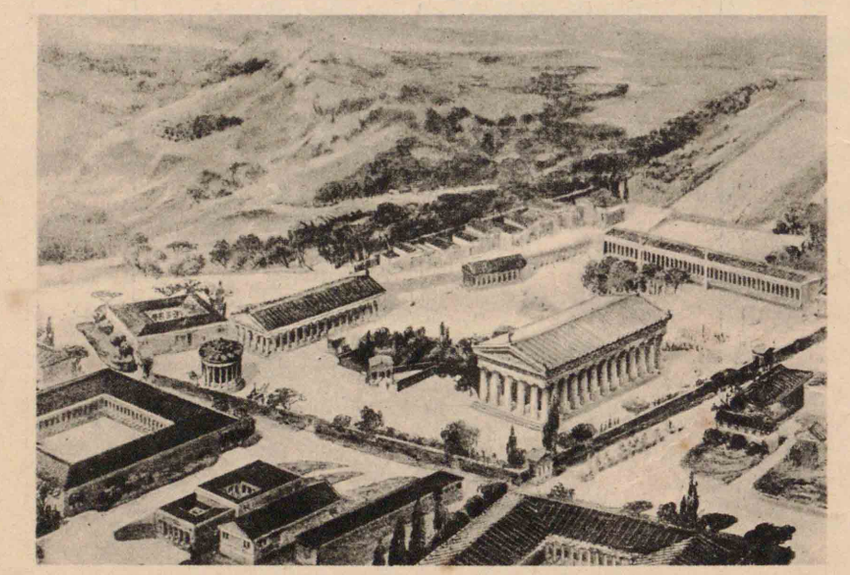
ギリシヤ民族中のドリヤ族はスパルタ都市國家をつくつて貴族政治を行ひ、男子に尙武的教育を施して强健な武士をつくり、女子にも身心を練り婦德を磨かしめたので、國力は次第に强盛となつた。

アテネはイオニヤ族の建てた都市國家で、初め王政で、後貴族政治となり少數の貴族が政權を專らにして平民との間に爭が絕えなかつた。しかしソロン・クリステネス等が出て、平民にも政權を分け與へたので、多年の紛爭を

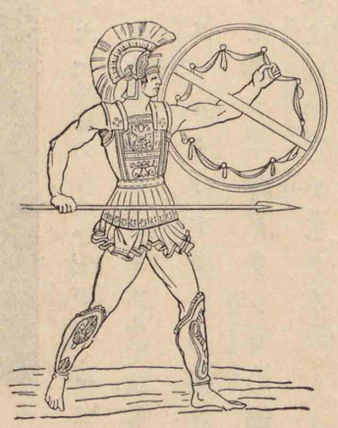
Dorians　Sparta　Athens　Ionians　Solon　Clisthenes

アテネのアクロポリス

オリンピヤ復舊圖



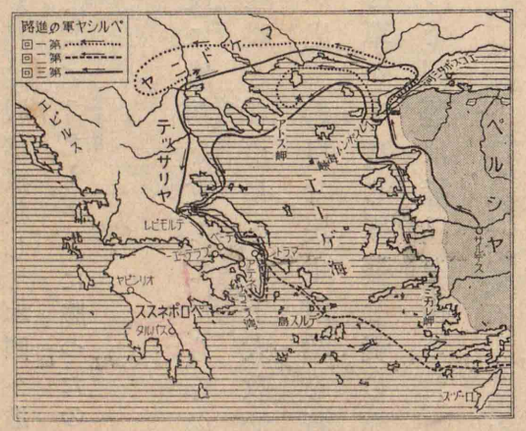
アクロポリスはアテネ市民が神聖視した丘陵で、パルテノンの殿堂が巍然として聳え、アテネの繁盛を誇り氣であつた。後ここは信仰のみならず、政治の中心ともなつて盛觀を極めた。オリンピヤ復舊圖はオリンピヤの盛時を追懷させる爲に作られたものであつて、中央の壁を以て圍繞された區域内が主要な部分である。中央からやや右方にあるドリヤ式の最も大きな建築がゼウス神殿で、その前方に祭壇が設けられてある。ゼウス神殿に相對する左方のドリヤ建築がヘラの神殿で、その後方の丘陵がクロノス丘で、山麓の遙か右方に薄く長方形を劃した部分が有名な競技場である。往年著者は親しくこの地を踏査し、これ等神殿の礎石の存在する外、大理石材の累々として横たはつてゐる有様を目擊して、感慨無量であつたことを今なほ記憶する。



ギリシヤ輕裝歩兵

解決して、民主政治の基を確立した。やがてアテネはスパルタと協力してペルシヤの大軍を紛碎してから、國威は俄かに強盛となつた。

ペルシヤ戰役　ギリシヤの併合を企てゐたペルシヤ王ダリウス一世は、アテネが小アジヤ沿岸のギリシヤ植民地の叛亂を援けたことを責めて出征し、ここに本戰役を起した。しかし前後二回の遠征は共に失敗したので、次王クセルクセス Xerxes は水陸の大軍を督してギリシヤに侵入した。スパルタ王レオニダス Leonidas はこれをテルモピレ Thermopylae の嶮に迎へ、奮戰して部下のスパルタ武士と共に壯烈な死を遂げたが、アテネの提督テミストクレス Themistocles の海軍は大いにペル



ペルシヤ戰役地圖

シャ艦隊を前四八〇サラミス Salamis 灣内に破り、ペルシャ王をして周章狼狽して本國へ逃れ歸らせた。ついでギリシャの陸軍もまた大いにプラテーエー Plataeae に勝つたので、ペルシャは遂に講和した。

㊂ アテネの隆盛

アテネはペルシャ戰役に偉功を立ててから、その勢力は俄かに隆盛となつた。その上、大政治家ペリクレス Pericles が出て善良な民主政治を行ひ、市區を改め、海軍を充實し、學藝を奬め、商業を盛にしたので國運は隆昌を極めた。

ペリクレス　ローマ、ヴァチカン博物館所藏大理石半身像。

アテネの市街

アテネ人の住宅は概ね煉瓦或は石灰石で造られた一階建のもので窓が少く、換氣不十分で不衛生なものであつた。從つて男子は日中家事を婦女子に託して市中で過してゐた。

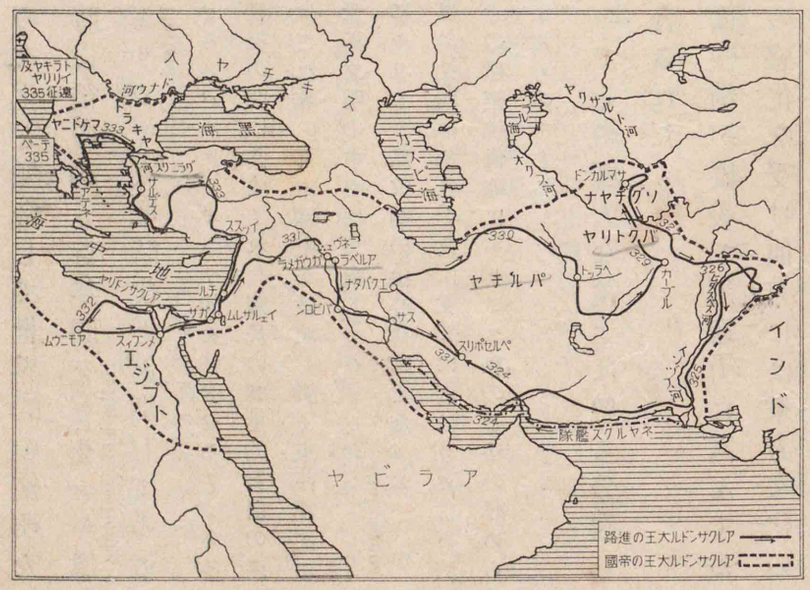
スパルタはアテネの盛なのを嫉み、前四三一―四〇四ペロポネスス Peloponnesian war 戰役を起してこれに勝ち、一時ギリシャの霸權を握つたが、間もなくこれをテーベ Thebes に奪はれた。しかしテーベもまた幾程もなく勢力を失つた。

霸權の推移

㊃ アレクサンドル大王 Alexander the Great

前三五六―三二三

この時ギリシャの北なるマケドニヤ Macedonia 國にフィリップ Philip といふ偉人が出て、ギリシャの衰運に乘じて、これを征服したが、不幸にも臣下に弑せられた。その子アレクサンドル大王は內亂を鎭めた後エジプトを征し、轉じてペルシャの全土と印度の一部とを略して前三二四スサ Susa に凱旋した。大王はその征服した諸地方を統一して、東・西兩洋に跨る一大帝國を建てたが、前三二三バビロンで病歿したので、その偉業は頓挫（トンザ）した。けれども大王の輸入したギリシャの文



アレクサンドル大王の遠征とその帝國圖

化は、廣く征服した領土内で東方の文化と融合して世界的の文明をつくるやうになつた。史家はこの時以後の約三百年間をギリシヤ風 Hellenism (Hellenistic Period) 文明の時代と稱して、その以前のギリシヤ文明時代 Hellenic Period と區別してゐる。

ギリシヤ風文明時代

ギリシヤ風の文明とその東漸

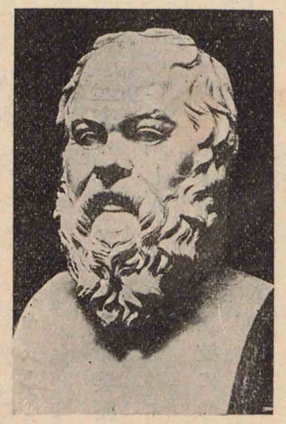
(1) ギリシヤ文明時代はドリヤ族を代表せるスパルタ、イオニヤ族を代表せるアテネ等の都市國家が互に相競爭した時代で、數世紀の間に養成された國民の歷史的發展の產物であつた。然るにアレクサンドル大王はこれ等の都市國家を破壞し、廣く東西兩洋に亙る世界的の大帝國を創立した。從つて世界文明の中心は東漸し、エジプトのプトレメウス Ptolemaeus 王家の首府アレクサンドリヤは實にギリシヤ風文明の中心都市となつた。

(2) 中央アジヤ方面に發展したギリシヤ風の文明は佛教と共に支那に傳はり、更に百濟を經て我が國にも傳はつた。奈良の法隆寺の建築・佛像等にギリシヤ風の手法の認められるのは、全くギリシヤ風文明の影響によるものである。

大王の歿後英主が出なかつたので、その廣大な領土は忽ち分裂したが、後いづれもローマの爲に併合された。

ギリシヤの文學・歷史及び哲學

五 ギリシヤの文化　ギリシヤ人は性情が優美で創造力に富んでゐたから、一方には快活陽氣な自然の感化を受け、他方には東方文化の影響を蒙り、一種獨得な新文化をつくつて、ヨーロッパ文明の淵源をなし、文學・史學・美術等にそれ〴〵代表的の大家が輩出した。



ホーマー　ローマ、カピトル博物館所藏大理石半身像。

ソクラテス　ローマ、カピトル博物館所藏大理石半身像。

ギリシヤの三大哲學者

文學　ホーマーは Homer イリアド・オデッセイ Iliad Odyssey の二大雄篇を著し、エスキルス・ソフォクレス・エウリピデス Aeschylus Sophocles Euripides はギリシヤの三大悲劇作家で、ヘロドツス・ツキヂデス Herodotus Thucydides は二大史家であつた。

哲學　始祖ターレス Thales 以下の哲學者は、主として自然界の現象を說明することに努めてゐたが、前五世紀の頃、大哲ソクラテス Socrates が出て彼等の所說を斥け、專ら主觀的に人事卽ち倫理道德の研究に沒頭した。さうして彼は、プラトー Plato・アリストトル Aristotle と共にギリシヤの三大哲學者となつた。

美術　ギリシヤ人は古代の諸國民中、美術的素質の最も圓滿に發達した國民で、その美術の特色は、エジプトのやうに徒に宏大單調でなく、極めて雅致に富み、複雜な趣向の中に調和の美

を備へた。

建築　ギリシヤ建築の様式に三種の別があつた。ドリヤ式は最も古くて荘重を旨とし、イオニヤ式は(Doric)(Ionic)これについで起り、優美で装飾がやや精巧である。コリント式は(Corinthian)最後に發達したもので、優美華麗を極めてゐる。彫刻もまた建築と相前後して發達した。さうして建築にはイクチヌス(Ictinus)、彫刻にはフィヂヤス(Phidias)・プラクシテレス(Praxiteles)などの名手が出た。

プラクシテレスの彫刻したヘルムス神の大理石像　ギリシヤ、オリンピヤ博物館所藏。

元來ギリシヤは競技を奬勵し、殊にその優勝者の肖像を彫刻してオリンピヤの殿堂内に獻納し、永くこれを保存することとした。これ等の優勝者はいづれも英氣の充實した青年で、裸體のまま競技に參加した關係上、その彫像もまた筋骨逞しい典型的裸體青年を寫したものであつた。

プラクシテレスの力作ヘルムス神の像は氣品高く、波立つ頭髪、恰好のよい雪白の體軀など如何にも立派で、男性美の代表的なものである。

ローマの建國

ローマの政體

ローマの歩兵

第三章　ローマ　キリスト教

一　ローマの建國とその政治　ギリシヤがバルカン半島の南端に興つて、その勢力を東方に發展させてゐる間に、ローマはイタリヤ半島の中部、卽ちチベル(Tiber)河畔に創設(前七五三)されたローマ市から興り、後、附近の地を征服して、次第にその勢力を西南方に伸張した。政體は初め王政で後共和政治(前五〇九)となり、貴族と平民との爭が久しく續いたが、紀元前四世(前三六七)紀の中頃、兩者の權利が同等となつてから漸く融和した。これから貴族と平民とは協力して他の民族に當り、まづ中部イタリヤを從へ、ついで南部イタリヤにあつたギリシヤ植民市をも略して、イタリヤ半島の大部を統一した。ローマはこれ等征服民族を優遇し、彼等に市民權を與へてこれを同化したので、その勢

力は漸く強大となつた。

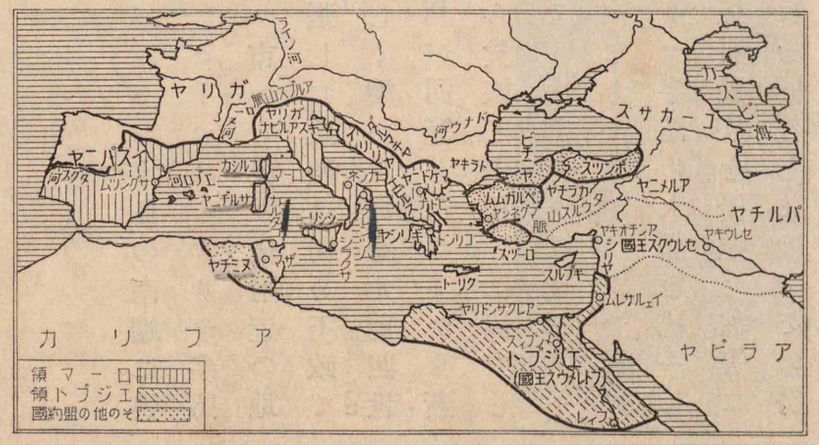
㈡ローマの興隆と版圖の擴張　當時アフリカの北岸にカルタゴ(Carthago)といふフェニキヤの植民地があつて、早くから貿易・植民に努め、國富み、海軍に長じ、西部地中海の海上權を握つてその勢が強かつた。新たに興つたローマは愛國的精神の充實せる國民と忠勇義膽に富める將兵との協力一致によつて、遂に前後三回に亙るポエニ(Punic (Poeni) Wars)戰役を起して、前一四六カルタゴの全土を征服した。

ローマの版圖及び盟約國圖(前一五〇年頃)

ハンニバル

ナポリ博物館所藏大理石半身像。ハンニバルの奮鬪

(1)カルタゴの勇將ハンニバル(Hannibal)は資性豪邁で戰略に長じ、夙に用兵の機



カルタゴの最後

敏神速なので有名であつた。第二ポエニ戰役(前二一八—二〇一)の時、彼は大軍を統率してアルプスの峻峰を攀ぢ、萬難を排して小ベルナルド越(Little St. Bernard)を通行して北部イタリヤに進出し、到る所にローマ軍を粉碎したので、援軍の來着を待つて將にローマに肉薄せんとした。偶〻この時にローマの大將スキピオ(Scipio)は新鋭のローマ軍を統率してカルタゴの本國を衝いたので、ハンニバルは急遽歸國して彼とザマで會戰した。この役でハンニバルは渾身(コンシン)の智勇を搾(シボ)り、巧に八十頭の軍象を使用して奮鬪したが、鋭氣充實せるローマ軍の爲に空しく大敗を蒙り、遂に屈して講和するに至つた。

(2)第三ポエニ戰役の時、カルタゴの都城はローマの大軍によつて包圍されて外援は來らず、糧食は缺乏してこれを守備することが不可能となつて來た。しかも國人は降服を肯(ガヘン)ぜず、火を城中に放ち、火焔の中に身を投じて壯烈な最期を遂げた。そこで猛火は焔々として四方に擴がり、延燒すること實に十七日、宮殿・樓閣・寺院・民屋等悉く烏有に歸し、滿目の光景轉(ウタ)た凄愴を極めたので、戰勝の名譽を得たローマ軍の司令官スキピオ＝アフリカーヌス(Scipio Africanus)も、さすがにこの悲風慘愴たる光景を凝視して悵然(チヨウゼン)として歎じて曰く「アッシリヤは既に滅び、ペルシヤ・マケドニヤもまた滅びぬ。而してカルタゴ今火焔の中にあり、次に來らんものはそれローマか」と。勝利の悲哀を痛感したスキピオの胸中さもあらんかな。

ローマは先にシリヤを破り、前一六八**マケドニヤを征し、**前一四六**更にギリシヤを滅**

したので、地中海沿岸の諸國は概ねその領土に歸した。ローマはこれ等の廣大な領土を統治する爲に、道路を築造し、交通の便を圖つたので、內・外の貿易は長足の進歩を遂げた。

貧富兩階級の對立と抗爭

㊂ローマの內訌とケーザルの治績　ローマ人は海外の領土から得た無限の富で奢侈遊惰を極め、盛に奴隸を用ひて自作農民の業を奪つた。富者はこの間にあつて政權を私し、次第に土地を併せたので、國家の中堅たるべき中產階級は次第に衰へ、遂に貧富の兩階級が對立して權力を爭ふやうになつた。グラックス兄弟は夙にこれを憂ひ、奮起して貧民救護を策したが、不幸にも元老院と一部の市民とに反對されて果さず、相前後して壯烈な最期を遂げた。

ケーザル　ローマ、ラテラン博物館所藏大理石像。

かかる時代に貧民黨からケーザル（Caesar）といふローマ第一の偉人が出て、ポンペイウス・クラッスス（Pompeius Crassus）と共に三頭政治（Triumvirate）を組織し、ローマの政權を

三頭政治とケーザル

握つた。ついでケーザルはガリヤ（Gaul）の蠻民を征服し（前五八—五一）、ローマの文化をこの地方に移してから、威名は日に盛になつた。ポンペイウスはこれを嫉み、密かに元老院と結んで、彼を除かうとしたので、ケーザルは俄かにローマに歸り、その黨與を仆して文・武の大權を一身に集め、弊政の改革、產業の保護、植民の奬勵、曆法の改正（エジプトの太陽曆を採用し、一年を三百六十五日とし、四年目に一日の閏日を加へる制である）などを斷行し、治績が大いに擧つた。けれども彼は反對派の爲に元老院の議場で殺されたので、天下は復亂れた。

ケーザルの偉業とその殺害

ケーザルの最期

(1) 前四四年三月十五日ケーザルが元老院に臨んで議長席に着くと、かねて彼を殺さうと計畫してゐた徒黨の一人なるキムベル（Cimber）は、まづ突進してケーザルの外袍（トガ）を裂き、他の一人カスカは劍を以て彼を刺さうとした。ケーザルはその柄を握り、大聲（Toga）を揚げて「兇漢カスカ。汝何事を爲さんとするぞ。」と叫んだ。そこでカスカは援助を求めたので、一味の者は四方から肉薄した。ケーザルは一本の鐵筆を武器として暫く抵抗したが、圖らずも平素信任してゐたブルッス（Brutus）もまたその一人であるのを見て大いに驚き、「汝ブルッスもか。」と叫びながら急に抵抗を中止し、衣を以て顏を蔽ひ、身に二十三創を蒙り、その政敵たるポンペイウスの像の下で悲壯な最期を遂げた。年五十六であつた。

ローマの盛大

(2)ローマの廣大な領土は、發達した交通機關と公正にして統一された法律とによつてよく統治され、ローマ・アテネ及びアレクサンドリヤの三市は文化の中樞となり、就中ローマは人口數百萬を有する宏壯な大都市となつた。

オクタヴィヤヌス

四 ローマの帝政　ケーザルの養嗣子オクタヴィヤヌス(Octavianus)はアントニウス(Antonius)とクレオパトラ(Cleopatra)との軍を破つてローマに凱旋し、遂に天下を一統し、元老院から(前二七)アウグスツス(Augustus)の尊號を受けてローマの全權を握り、專制政治を行つた。かやうにしてローマの共和政治は名のみとなつた(史家はこれから後をローマ帝政時代と呼ぶ)。アウグスツスは內政を整へ、國防を嚴にし、土木を起し、また大いに文藝をも奬めたので、ローマ文化の黃金時代が現出した。

ローマの帝政

コンスタンチヌス大帝

金貨の上に彫刻されたもの。

アウグスツスの後約二百年間、帝國の政治はなほよく行はれたが、マルクス=アウレリウス(Marcus Aurelius)(王安敦)の歿後(一八〇)から漸く亂れ、內には軍人が跋扈して皇帝を廢立し、外からは蠻族が侵入したので、國運は著しく傾いた。

*仁德天皇の御頃東晉の成帝の時代

コンスタンチヌス大帝の統一

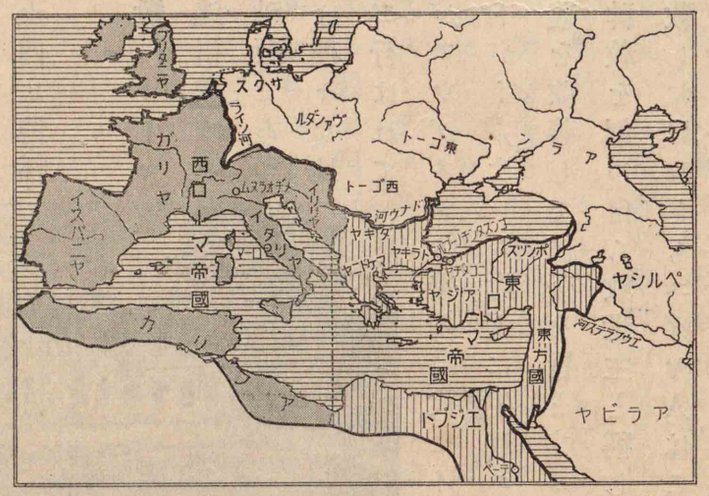
ローマ帝國分裂圖

帝國の分裂

ローマの法律と學藝

その後コンスタンチヌス大帝(Constantine the Great)が出で、內亂を鎭めて全國を統一し、都をコンスタンチノープル(今のイスタンブール)(*三三〇 Constantinople)に遷し、勵精治を圖つたので、中興の政が一時成就した。けれども帝の歿後、產業は衰へ、失業者は激增し、國威は爲に失墜し、三九五年以後帝國は遂に東・西に分れた。

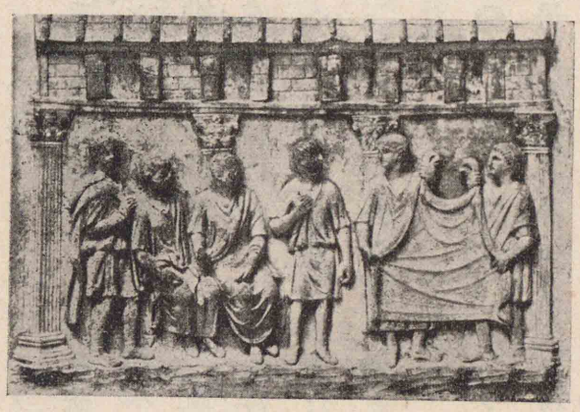
五 ローマの文化　ローマでは政治が最も發達し、殊に法律は後世の模範と仰がれた。これに反して、學問や藝術は概ねギリシヤの模倣であつたが、雄大と堅牢とを特色とする劇場・圓形競技場(Colosseum)・浴場・凱旋門・軍道・水道などの土木事業に於て見るべきものがあつた。要するにローマ人が世界の



文化普及の功績

文明に寄與（キヨ）した最も偉大な功績は、ギリシヤ文明を吸收してこれをローマ化し、更にこれを四通八達せる道路網によつて、その廣大な領土内に傳播・普及せしめたことであつた。

ローマの圓形競技場



キリスト教の創始

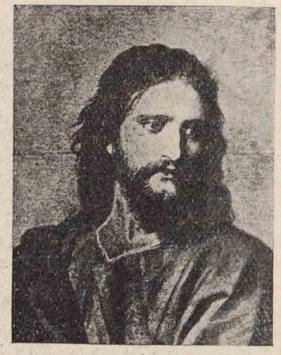
㊅キリスト教

ローマ人は一般に迷信家で、その宗教は多神教であつたが、地方には種々な地方的の宗教が行はれてゐた。ところがアウグスツス帝の時代にイエス・キリスト（Jesus Christ）がイェルサレム（Jerusalem）附近に生れ（前四）、ユダヤ教の教義を改善して仁愛を旨とする世界的の一神教を創め、自ら救世主と稱して熱心に布教した。けれどもユダヤ人はこ

ローマの風俗

キリスト教の弘布

キリスト



れを喜ばず、ローマ官吏に誣（シ）ひたので、キリストは遂に十字架上で殺された。爾來歷代の皇帝は概ねキリスト教を邪教として斥けたにも拘らず、ポール・ペートル（Paul Peter）等の弟子は毅然としてその信仰を飜さず、益（ヽ）布教に努めて撓（タユ）まなかつたので、信徒の數は日に增した。その上コンスタンチヌス帝が自らその信者となつて、布教を公認したので、キリスト教は四方に弘まり、後には（三一三）ヨーロッパの社會上・政治上に偉大な關係をもつやうになつた

キリスト教の公認

*仁德天皇御即位難波遷都

第二篇　中古史（四世紀頃より十五世紀頃に至る）

中古期はゲルマニヤ民族が大移動を起してから、十字軍以後に、西ヨーロッパに近世的の國家が創立されるまでを含み、我が仁德天皇の御代の頃から、後土御門天皇の御代（足利氏の季世、戰國時代）に至り、支那では東晉の孝武帝の末から明の孝宗の頃に及んでゐる（第四章より第七章に至る）。この期の初に、ゲルマニヤ民族は東北方面から侵入して西ローマ帝國を滅し、その地方に數箇の獨立王國を創立して、一時ヨーロッパを安定させることが出來た。しかし間もなくサラセン・マジャール・ノルマンなどの諸民族が各方面から侵入して來た爲に、再び動搖を來たした。そこでドイツ皇帝は帝權を以て、ローマ法王は法權を以てヨーロッパを統轄しようとしたが、共に失敗したので、封建制度の新組織が西ヨーロッパ諸國の間に採用されて、到る所に政治的分裂の傾向を馴致した。然るに本期の末には、國家主義が漸く唱道されて、一旦分裂した小邦を更に結合して、イングランド・フランス・イスパニヤ及びポルトガルなどの諸國を現出せしめた。

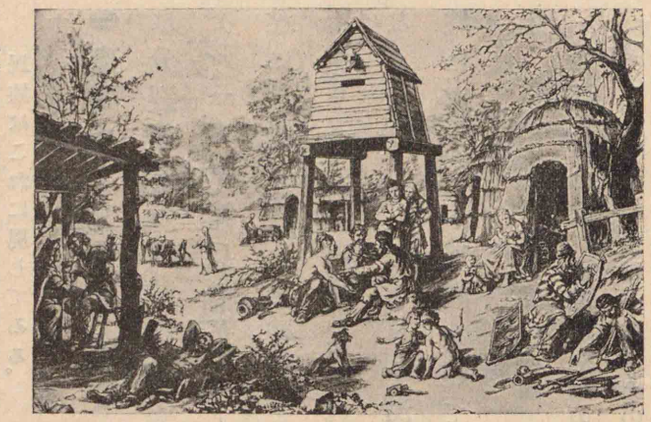
第四章　民族の大移動

ゲルマニヤ民族の移動

ゲルマニヤ人の村落

ローマ市にあるアントニウス圓柱の表面に印刻されたものによる。

ゲルマニヤ民族の建國



㊀ゲルマニヤ民族の移動と王國の創建

ゲルマニヤ族（Germans (Teutons)）は北ドイツの平原に住んでゐた蠻族で、資性勇猛で戰を好み、ローマの衰運に乘じて、屢〻その北邊を侵し、四世紀の頃にはその一派なる東ゴート族（Ostrogoths）は黑海の北岸に、西ゴート族（Visigoths）はドナウ河北に、ヴァンダル（Vandals）族はその上流の地方に、いづれも移住してゐた。然るにフン（Huns）族が東ゴート族を征服してから、ドナウ河北の地方に侵入したので、西ゴート族は一旦ローマを侵した後、イスパニヤ（Spain）に入つてこの地に西ゴート王國（四一五）を建てた。ついでヴァンダルはアフリカの北岸（カルタゴの故地）に、フランク（Franks）はガリヤの北部に、アングロ・サクソン（Anglo-Saxons）はイングランドの南部に各〻王國を建てた。

ラテン民族

ゲルマニヤ族が血族上ローマ人と混和してローマ化したものをラテン民族といふ。現時のフランス・イスパニヤ・イタリヤ諸民族はこれに屬してゐる。

西ローマ帝國の滅亡

民族移動時代に於けるヨーロッパ圖

雄略天皇の末年

(二)東・西ローマ帝國　西ローマ帝國は分裂後、その國勢は益〻衰へたので、ゲルマニヤ傭兵の長オドアケル(Odoacer)は遂に皇帝を廢して帝國を滅し(四七六)、自らイタリヤに君臨した。けれども間もなく東ゴートはこれを滅して(四九三)、この地に東ゴート王國を建てた。

西ローマ帝國滅亡の原因　(1)ローマの富豪は屬領より輸入せる無限の富によつて驕奢遊惰に流れ、小農は奴隷の使用と穀價の低落とによつてその業を奪はれ、英氣を喪失した。從つて國民一般はその自覺を失つたこと、(2)ローマの軍隊は晩年腐敗したので、

ユスチニヤヌス帝の偉業

中古の暗黑時代と東ローマ文化

マホメット

愛國的精神の缺乏せる傭兵を採用して、蠻族の侵入を防ぎ、却つてその滅亡を促進するに至つたこと。(3)東・西兩帝国お互に助け合はぬこと、

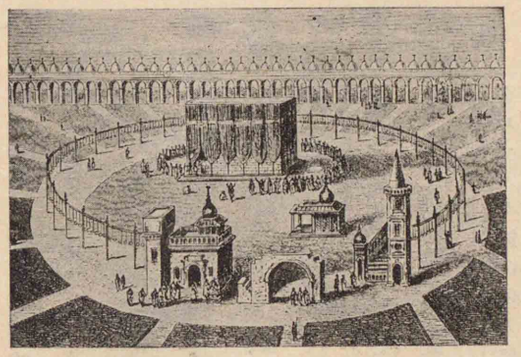
この頃東ローマ帝國の國勢もまた振はなかつたが、ユスチニヤヌス帝(Justinianus)が即位(五二七)してから、形勢は一變した。帝は内治を勵み、キリスト教異教派を禁じ、ローマ法典(五三三)を編纂し、また養蠶の業を支那から傳へた。且つビザンツ式(Byzantine Style)に基いてセント=ソフィヤ(St. Sophia)以下多數の寺院やその他の土工を起した。帝はまたヴァンダル王國を滅し(五三四)、更にイタリヤを略して一時國威を内外に發揚したが、帝の歿後、國運は再び衰へた。

ゲルマニヤ族の侵入によつて學問の中心地方は破壞されたので文化は一時頽廢し、所謂中古の暗黑時代を出現した。然るにコンスタンチノープルを中心とする東ローマ帝國は能くギリシヤやローマの文化を攝取同化することが出來たのはこの爲である。

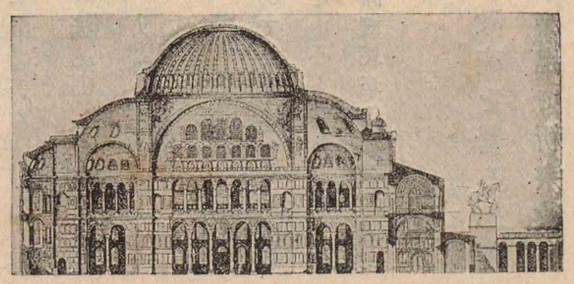
(三)サラセンとマホメット　サラセン(Saracens)(アラビヤ民族或は大食(タージ))は牧畜や隊商を營み、部落に分れてアラビヤ半島に割據してゐたが、マホメット(Mahomet)が出て新宗教を

*推古天皇の御代、前年聖德太子が薨じたが

以てこれを統一してから、國運は俄かに勃興した。マホメットはメッカ(Mecca)に於てユダヤ・キリスト兩教を參酌(サンシャク)してイスラム教(回教・回々教・マホメット教)(Islam)といふ一神教を創め、自ら神の使であると稱して熱心に布教したが、間もなく多神教徒なるメッカ人に迫害されてメヂナ(Medina)に奔つた。*六二二



セント＝ソフィヤ寺院の縱斷面



メッカに於けるマホメットの石造堂

然るに彼はその後武力でメッカを取り返して、その教を弘め、アラビヤの大半を征服して、サラセン國を建てた。

マホメットの歿後、その繼承者(カリフといふ Caliph)は政治・宗教・軍事の大權を握り、教祖の意志を繼いで飲酒を禁じ、宿命說を唱へ、專心討伐と布教とに努めたので、東はペルシヤを滅し、北は東ローマを侵し、西はアフリカの北岸を略

版圖の擴大

してイスパニヤに入り、その艦隊は地中海上に活躍してゐた。然るにその後フランク王國(西ゴート(七二))を侵して失敗したので、退いてイスパニヤの地を保つた。

サラセン國の分裂

かうしてサラセンは東・西に分れ、東はバグダード(チグリス河畔)(Bagdad)に、西はコルドヴァ(イスパニヤ)(Cordova)に都し、各〻特殊の發達した文化をつくつた。

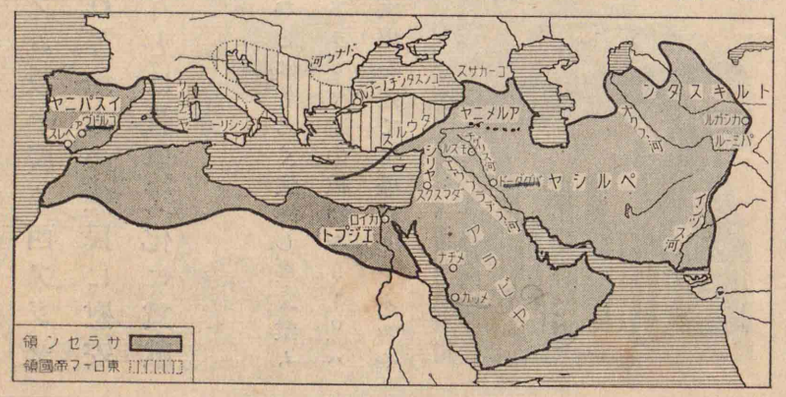
サラセンの版圖擴大圖

教祖マホメットは無學であつたから、自ら說法したことなどは、いづれも門弟子に命じてこれを筆記させて置いた。これ等の斷片的な訓話や神話を集めたものが、コーラン(イスラム教の聖典)(Koran)である。

コーラン

㊃ サラセンの文化

東・西の兩サラセン國は各種の學藝・醫術を興し、農・工業を勵まし、通商・貿易を盛にしたので、國勢は大いに振ひ、文化の進歩も遙かに西歐諸

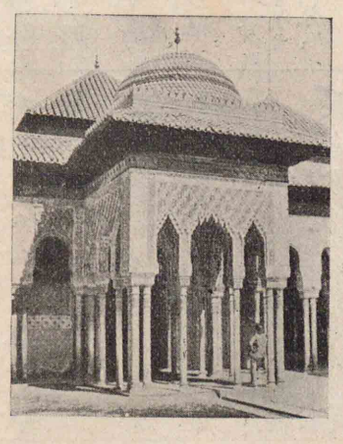


國を凌ぐやうになつた。これを要するに、中古の暗黑時代に於てサラセンが特に文藝の研究に努力したこと、イスラム教を廣く西アジヤから北アフリカ・イスパニヤの方面に弘め、これ等地方の住民に慰安を與へたこと、東西の交通を發達させたことなどは、世界文化に貢獻した著しいものであつた。

サラセン文化

サラセン時代には、學問の中でも數學・化學・醫學・地理學などは著しく發達し、農・工業もまた盛大を極めてゐた。卽ち橙・棕櫚・薔薇・棉花・甘蔗などのアラビヤ產の植物をヨーロッパに移植して、その風土に適せしめ、ダマスクス(Damascus)に織物の大工場を建てて、盛にリンネルやモスリンを織出し、サマルカンド(Samarcand)やバグダードに大規模な製紙工場を建てて多量の洋紙を製造した。

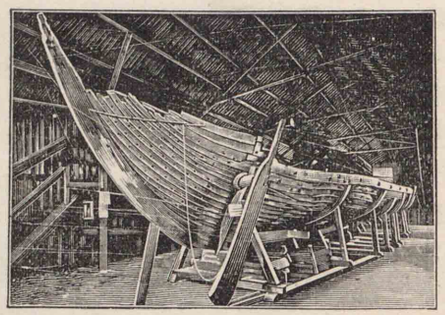
イスラム教は一切の偶像を禁じてゐたから、人物や動物などの繪畫・彫刻は發達しなかつた。その代りに幾何學的の圖案で一種の花卉(クワキ)模樣を案出し、これを寺院建築の裝飾に用ひ、且つ濃艶な色彩を好んでゐたから、光彩陸離として人目を眩惑するに足りるものがあつた。



アルハンブラ宮殿の一部

アルハンブラ宮殿はイスパニヤの舊回教都市グラナダ(四七頁地圖を見よ)にある。

今日殆んど世界語となつてゐる學問上の術語及び日用語の中で、Alcohol(酒精)・Algebra(代數學)・Admiral(海軍提督)・Cotton(綿)・Sofa(長椅子)・Sugar(砂糖)などはサラセン語から出たものである。

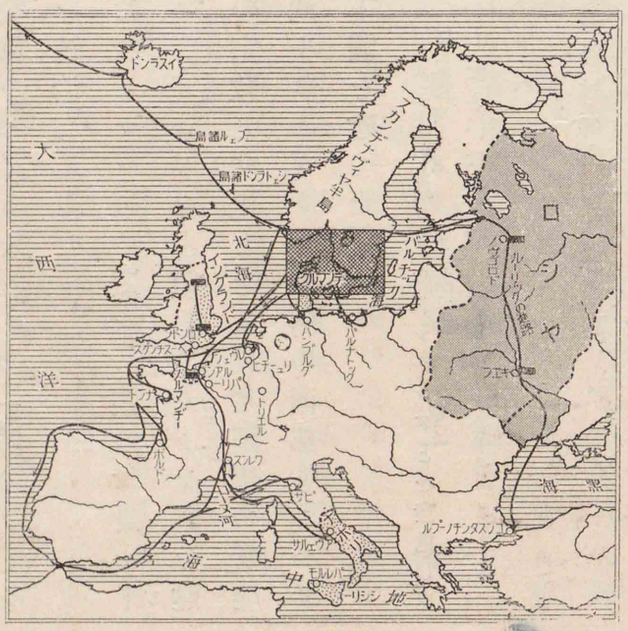


ノルマンの船

ノルウェー、オスロー大學所藏。

㊄ノルマン(Normans)

ノルマンはゲルマニヤ族の一派で、スカンヂナヴィヤ(Scandinavia)半島の南部とデンマルク(Denmark)地方とに住んでゐたが、早くから海賊となり、各地を侵してゐた。卽ちノルマンの一派は西フ



ノルマン人移住圖

ノルマンデー公國の創立

ランクの海岸にノルマンデー公國をつくり、またその一派のデーン人(Danes)は一時(十一世紀の前半)イングランドを統治してゐた。

ロシヤの建國

次にスウェーデンに住んでゐたノルマンの一派ルス族(Russ)の酋長ルーリック(Ruric)は、スラヴ族(Slavs)の内亂に乘じ、ノヴゴロド(Novgorod)を占領して(八六二)ロシヤ(Russia)國を建て、都をキエフ(Kiev)に奠め、東ローマの宗教と文化とを入れて國運の發展を企てた。

ナポリ王國の建設

またノルマンデーの武士はイタリヤ半島の南部とシシリー島とを併せて、ここにナポリ王國(Naples (Napoli))を建てた。

この外、ノルマンは北洋航海をも試み、イスランド(Iceland)島とグリーンランド(Greenland)とを發見し、更に北アメリカ大陸の東北海岸にも航行したといはれる。

第五章　中古のヨーロッパ

(一)　封建制度の發達と農村・都市の狀態

封建制度の起因

㊀封建制度(Feudal System)　西歐の諸國は、サラセン・スラヴなどの諸蠻族に侵されて不安と混亂とに陷つたので、これを安定する爲に地方分權主義の封建制度が採用された。その起源はフランク王の宮宰チャールス・マルテル(Charles Martel)が、サラセンの侵寇を擊退する必要上、王領の一部を割いて封土

封建制度の組織及びその發展

騎士宣誓式擧行の光景

とし、これを部下に與へて新たに君臣の關係を結び、その報酬として、平素乘馬・用兵の術を練り、有事の日、國王に從つて軍役に服せしめたことに基いてゐる。その後、封土が世襲となつてから、これを有する者も更にその一部を部下に割いて、君臣の關係をつくつた。さうして諸侯・教會・都市もまたこれに倣ひ、多數の部下を養つて自衛を圖つたので、十世紀になつてその組織は完備し、爾後この制度は約五百年間、英・佛・獨などの西歐諸國に普ねく行はれた。

封建時代の農民

騎士

㊁武士と農民　封建時代には、武士と僧侶とは社會の上層に位して權勢を逞しうし、農民・商工業者を威壓してゐた。

武士の中にも騎士(ナイト)といふ一階級があつて、封建時代の華と謳(ウタ)はれてゐた。騎士は幼時

主君に仕へて禮節を習ひ、武藝を練り、競技會（トーナメント Tournament）に臨んで武技を鬪はせ、然る後に嚴肅な儀式を擧げて武士道を守ることを誓つた。從つて騎士は名譽を重んじ、神を崇（アガ）めて、弱者を憐み、婦人を敬ひ、且つ武勇で權勢に屈しなかつたので、社會一般から非常に尊敬された。

但し十字軍以後世態が變遷するに隨つて、その性質もまた一變し、次第に墮落するやうになつた。

西洋の武士道は我が國戰國時代の武士道と酷似してゐる。しかし彼は基督教のみを信仰し、婦人敬愛を強調するに、我は神佛を併せ崇敬し、婦人の代りに親に孝養すべきことを唱道するところが相違してゐる。

十三世紀の農民

向つて左、村の領主が農民の長に土地讓渡の證文を示す。右、農民が樹木を倒して家を建てるところ。

修道僧の勞働奉仕

古代では勞働を賤しみ、これを奴隷に一任して顧みなかつたが、中古期に入つてから、キリスト教の感化を蒙り、社會一般に勞働を人生の訓練と考へ、これを尊重するやうになつた。しかし農民・商工業者は封建時代には武士の壓制を受け、社會の下層にあつて苦しんでゐた。

農民中の最下級のものは農奴と呼ばれ、永久に土地から離れることの出來ぬもので、

土地と共に賣買せられてゐた。

㈢ 都市と商人

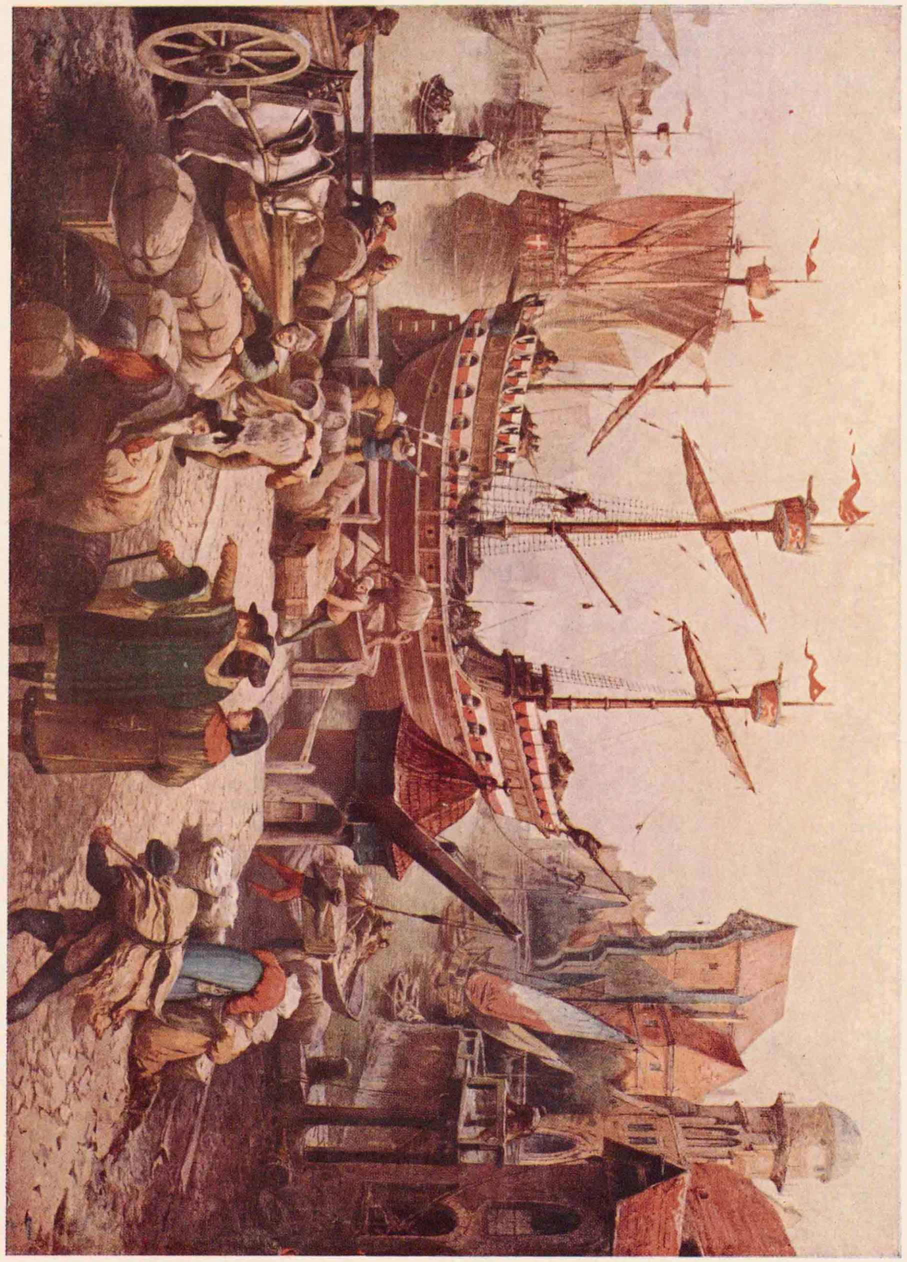
中古の經濟生活は、自給自足の方針に基いて、極めて小規模なものであつた。殊に組合（ギルド Guild System）制度が到る所に實施されて、商工業者は相互に統制を守り、製造・販賣を協定したので、自由競爭は未だ行はれず、交通はなほ不便で、商業の發達を妨げてゐた。然るに十字軍以後、地中海の貿易が俄かに活氣を呈してから、ヴェニス（Venice）・ジェノア（Genoa）・ミラノ（Milano）・フロレンス（Florence）などのイタリヤの諸市がまづ發展し、東方及び地中海の貿易に從事してゐた。

都市の勃興と市民の擡頭

イタリヤの都市

ついでライン（Rhine）・ドナウ（Danube）及びローヌ（Rhone）などの諸大河沿岸の要所に多數の都市が勃興し、それ〴〵商業か工業かの中心となつて發展し、貨幣の流通も激增し、後には貨幣は都

中古の市場



ハンザ同盟加入港の光景

自由都市の出現と都市同盟

市から農村へも浸潤(シンジュン)し、所謂貨幣經濟時代(Money Economy Period)を見るに至つた。

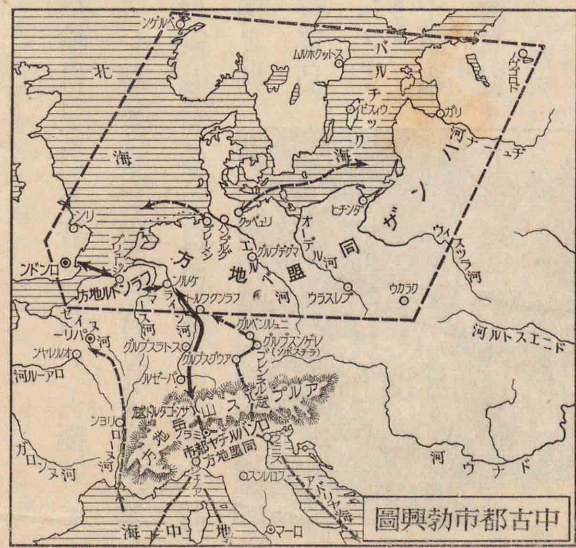
これ等の都市の中には、金力で諸侯から自治權を買收して自由都市となつたものもあり、また王侯の壓制を防ぎ、商業の發達を圖り、且つ共同の利益を擁護する爲に、都市相互間の同盟を約したものもあつた。卽ち十二世紀にミラノ市を中心として出來たロンバルヂヤ同盟、十三世紀に出來たライン都市同盟・ハンザ同盟(Hansa)などは特に有名であつた。

ハンザ同盟

殊にハンザ同盟では、リュベック(Lübeck)・ハンブルグ(Hamburg)及びブレーメン(Bremen)などが活動して、一時八十五以上の都市を包容し、その富强は却つて王侯を凌がうとしてゐた。

中古の都市

中古の都市は城壁と溝渠とを以て圍繞



中古都市勃興圖

ハンザ同盟時代は、中古紀でヨーロッパの貿易盛大を極めた時であつた。それ故同盟に加入してゐた港はいづれも商船の出入、物資の集散、商人の往來などで活氣を呈し、商館は繁榮してゐた。

この畫はハンザ同盟加入港の港内及び埠頭の實況を描寫したもので、當時の商船の形體、その構造、港灣の設備、商品の包裝及び輸送の狀態などは、これによつてほぼ想像することが出來る。

ギリシャ正教とローマ正教

されその内部に多數の市民が生活を營んでゐた。街道は狹隘で屈曲してゐて、殊に不潔であつた。普通の家屋は草葺で、階上は住所、階下は商店に當てられ、衞生下水防火設備等は未だ施されず、極めて小規模のものであつた。市内の公開の地域に教會が建てられ、その側に市場と墓地とが設けられてゐた。

當時ヨーロッパ最大の都市であつたパリーの人口が約三十萬で、ロンドンの如きは僅かに四萬人に過ぎなかつた。

(二) 帝權及び法王權の盛衰

㊀東西兩教會の對立 キリスト教會では、信仰と布教との便宜上から聖像(Icon)を用ひてゐたが、後には偶像崇拜の風を生じたので、東ローマ皇帝はこれを禁じた(七二六)。然るにローマ法王(Pope)(法王は父(Papa)から轉じ、地上に於けるキリストの代表者の意)はこれに從はなかつたので、結局東・西兩教會は分離して、東をギリシヤ正教(Greek Catholic)、西をローマ正教(Roman Catholic)と稱した。

㊁法王とフランク王 フランク王國では八世紀の中頃、宮宰ピピン(Pipin)

*桓武天皇の御頃、前年和氣清麻呂が薨じた

チャールス大帝

*北イタリヤ、レノ河口にあり、アドリヤ海に面してゐる。

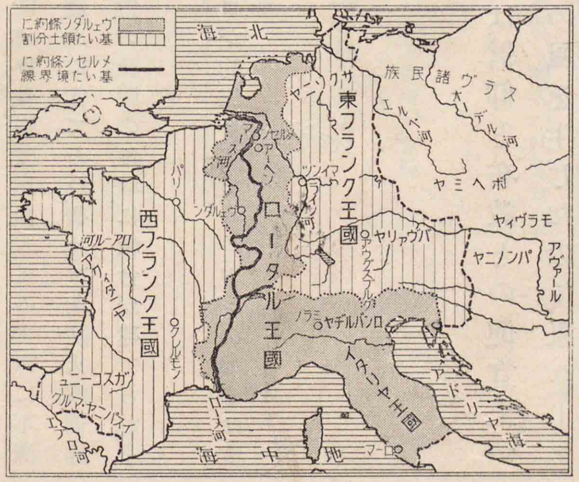
西ローマ帝國の再興

大帝の領土とその分裂略圖

チャールス大帝の文化擁護

がその王位を簒(ウバ)つて自立したが、やがて法王の承認を得たので、ピピンはこれを德とし、*ラヴェンナ（Ravenna）の地を法王に寄進した（法王領の始め）。その子チャールス大帝（Charles the Great）は大志を抱き、交戰數十回でイタリヤとイスパニヤとの北部地方を征服し、またゲルマニヤの諸部落をも統一した。そこでローマ法王レオ三世は帝冠を（*八〇〇）王に授けて、西ローマ帝國を再興せしめた（法王加冠の始め）。帝は心を内治に用ひて農工業を保護し、また學校を創め、學藝を奬勵するなど、治績の大いに見るべきものがあつた。

ゲルマニヤ民族の侵入によつて破壞されたヨーロッパの文化は、帝の建設的の努力によつて再び



*村上天皇の御代

オット大帝

オット大帝の偉業

神聖ローマ皇帝の稱號

グレゴリー七世

グレゴリー七世

その光を放つこととなつた。

然るに帝の歿後、その遺領はヴェルダン（八四三 Verdun）・メルセン（八七〇 Mersen）兩條約で東フランク・西フランク・イタリヤに三分された。これは後のドイツ・フランス・イタリヤ三國の基をなしたものである。

東フランク即ちドイツではチャールス大帝の血統が絶えてから（九一一）、選擧王國となつた。さうしてオット一世（Otto I.）は諸侯の叛亂を平げ、ノルマン・マジャール（Magyars）の侵寇を防ぎ、イタリヤを併合したので、ローマ法王から帝冠（*九六二）を受けて、神聖ローマ皇帝（Holy Roman Emperor）と稱した。ドイツ國王は歷代この稱號を用ひて、西ローマ皇帝の繼承者となつた。

㊂ **法王と國王との衝突** 十一世紀の中頃、ローマ法王となつたグレゴリー七世（一〇七三 Gregory VII.）は教會の積弊を改め、ついで僧侶任命の權を國王の手から回收した。ドイツ國王ヘンリー四世（Henry IV.）は大いにこれ

を憤り、一旦法王を廢したが、却つて法王の爲に破門され、罪を法王に謝して纔かにその位を保つことが出來た。これから法王の權力は漸く強大となり、十字軍時代にその極點に達した。

ヘンリー四世と法王

ヘンリー四世は法王の宥免を得んが爲にドイツを發し、アルプス山脈の通路モンスニー峠の險路を越え、一〇七七年の正月漸く北イタリヤのロンバルヂヤ平野に達した。當時法王はトスカナ伯の未亡人マチルダ Matilda のカノッサ城 Canossa にゐたので、單身ここを訪れ、法王に面會を求めたが許されなかつた。そこで國王は被髪徒跣のままで、寒風に曝されつつ、城外に佇立すること三晝夜の後、漸くマチルダ未亡人の哀願により面謁を許された。やがて國王は法王の足下にひれ伏してその罪を謝し、辛うじて破門の宣告を解かれた。

ヘンリー四世法王に歎願す

四 十字軍　キリストの墳墓の地なるイェルサレムは、初めサラセンの所有であつたが、セルジュック Seljuk-Turks トルコがこれを奪つてから、西歐諸國から來る順禮者を虐待したので、ローマ法王ウルバン二世 Urban II. は熱心に聖地回復の必要を唱へた。宗教心に燃え、且つ敵愾心に富んでゐた封建武士等は、これを聽いて大いに感激し、相率ゐて出征した。これを十字軍と Crusades いふ。

十字軍の原因

十字軍の經過

第一回十字軍で聖地をキリスト教徒の手に回復し、やがてこの地にイェルサレム王國を建てたが、間もなくトルコ人に滅されたその後これを回復する爲に、なほ數回の遠征が試みられたが、遂にこの目的を達するに至らなかつた。

武士出發の光景

五 十字軍の結果　十字軍は多數の人命と莫大な軍費とを犧牲にしたにも拘らず、聖地回復の目的を達するに至らなかつた。その結果(一)ヨーロッパ諸國は經濟的に破産に瀕し、封建制度は大いに衰へた。(二)けれども東・西兩洋の交通が開けて、西ヨーロッパ諸國人の生活狀態を一變した。卽ち航海・貿易の事業が發展して中産階級の擡頭を促し、(三)サラセンの發達した學藝を

十字軍の結果

西歐諸國に輸入し、(四)且つ西歐人の地理的知識を豐富ならしめ、アジヤ方面に旅行する者が續出するに至つた。

(三)　ヨーロッパ諸國の王權伸張

イングランド王國の創建

大憲章の制定

イギリス下院の起源

㊀ 英・佛と百年戰役

アングロ=サクソン族が九世紀に今のイギリスの南部地方にイングランド王國を創設してから、三百七十餘年を經て、十三世紀の初、國王ジョン(John)が卽位した。王は失政が多く、外ではフランス王と爭つて敗れ、內では重稅を課して人民を苦しめたので、貴族・僧侶はロンドン市民と共に國王の失政を責め、王に迫つて(一二一五)大憲章(マグナカルタ)に署名せしめ、人民の生命及び財產の安全を保障させた。これがイギリス憲法の基である。然るにその子ヘンリー三世は大憲章を奉じなかつたので、シモン=ド=モンフォール(Simon de Montfort)等は國王に迫り、貴族・僧侶の外に市民や地方の代表者をも召集して、(一二六五)國事を審議させた。これがイギリス下院(House of Commons)の始めである。

我が憲法の誇り

百年戰役

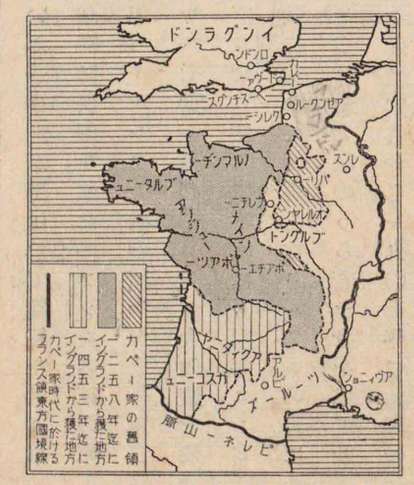
百年戰役略圖

ジャンヌ=ダルク

我が國の憲法は明治天皇が御制定になつた所謂欽定憲法で、我が國の歷史を骨子とし、外形だけは外國の憲法に則(ノット)つて書かれたものである。從つてその精神は萬世一系の天皇の御親政であるから、イギリスのやうに貴族・僧侶や市民の代表者が國王に强要して、漸く成立した協定憲法とは大いに類を異にしてゐる。

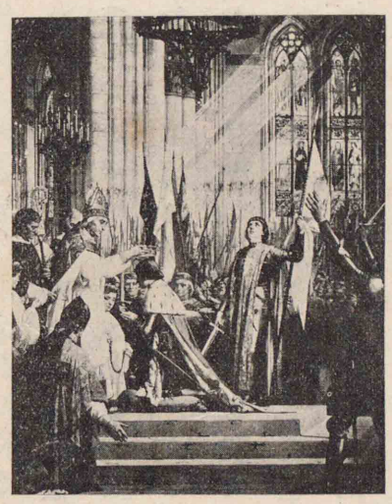
フランスでは初め王權は振はなかつたが、十二世紀の後半から英(エイ)邁(マイ)な君主が相ついで出て、內は諸侯の權力を抑へ、外は法王を威壓したので、王權は漸次伸張するやうになつた。殊にフィリップ六世以下數代の國王はイングランド王エドワード三世以下數代の國王と所謂(一三三九—一四五三)百年戰役(Hundred Years' War)を演出してこれに勝ち、カレー(Calais)港以外の全土を回復して更に一層國威を發揚することになつた。

百年戰役ではフランス軍は常に敗れ、オルレヤ(Orléans)



ジャンヌ＝ダルク

ン城の陥落も切迫してゐたが、偶〻ジャンヌ＝ダルク（Jeanne D'Arc）といふ一少女が現はれて國難を救ふべき神託を受けたと稱し、頭に白甲を戴き、白馬に跨り、腰に長劍を横たへ、フランス軍の陣頭に立つて將士を勵ましてから、士氣大いに振ひ、忽ちオルレヤン城の圍を解き、一四二九年チャールス七世を奉じて、レンス大伽藍で戴冠式を擧げさせた。然るに不幸にも翌年コンピエーニュの戰に敗れて捕虜となり、ルアンの野に焚刑（フランス）に處せられ、十九歳のうら若き身を以て壯烈な最期を遂げた。しかし一九〇七年に救國の偉勳は認められ、ジャンヌはキリスト教會の聖徒の中に加へられ、世界大戰勃發後、フランスは未曾有の國難に直面してから、國人のジャンヌに對する崇敬追慕の度が更に一層高められ、今日では國內到る所の寺院にその英姿を見るやうになつた。



戰後のフランス

㈡ 百年戰役後の西ヨーロッパ諸國

フランスでは百年戰役後に君臨した歷代の國王が殘存せる諸侯を抑へ、王權の伸張に努めたので、十

戰後のイングランド

イスパニヤ王國の創立

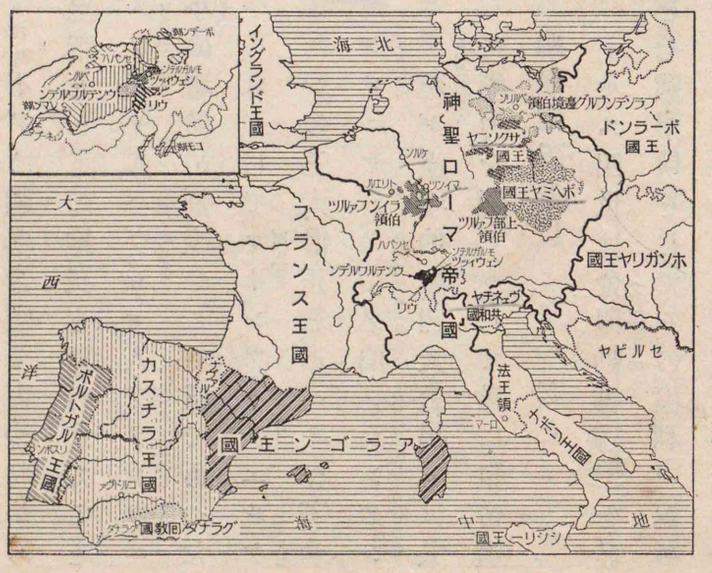
十五世紀のヨーロッパ

ポルトガル王國の建設

五世紀末になつて漸く全國を統一することが出來た。イングランドでは百年戰役の後に薔薇戰役（一四五五―一四八五 War of Roses）と稱する內亂が三十年間も續き、大小の諸侯が從軍してその家を喪つたので、王權は却つて伸張した。

イスパニヤではコルドヴァのカリフ朝が滅びてから、多數のキリスト教國が再興された。その中アラゴン・カスチラ兩王國（Aragon Castile）は併合し（一四七九）てイスパニヤ王國を建て、サラセン人を國外に逐つて（一四九二）國土を統一した。

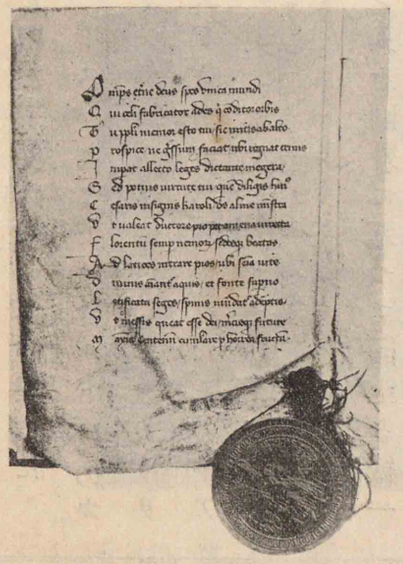
初めカスチラの屬邦であつたポルトガル（Portugal）は、十一世紀の末に獨立王國となり、十六世紀以後はヨーロッパに於ける重要な國家となつた。



㊂ドイツの國情とスウィスの獨立　ドイツは選擧帝國であつたから帝權が極めて微弱で、神聖ローマ皇帝としての抱負を實行することは出來なかつた。從つて國内にはスワビヤ人(Swabians)・バヴァリヤ人(Bayarians)・フランコニヤ人(Fraconians)・サクソン人(Saxons)などが雜居し、大小の諸侯が割據せる有樣であつた。

さうしてマインツ(Mainz)・トリエル(Trier)・ケルン(Köln)の三大僧正と、ボヘミヤ(Bohemia)王・サクソニヤ公(Saxony)・ファルツ伯(Count Paratinate)・ブランデンブルグ(Brandenburg)邊境伯(Margrave)の四大公伯とは、共に權力を逞しうして、遂に皇帝選擧の常置委員となつた。そこでチャールス四世は金印勅書(Golden Bull)(黄金文書)(一三五六)を發布し、前記三大僧正と四王公伯とを七選擧侯としてその權利を認めたので、帝權は愈〻衰へた。

金印勅書



金印勅書の發布

スウィスはもとドイツのハプスブルグ家の私領であつたが、その三

スウィスの獨立

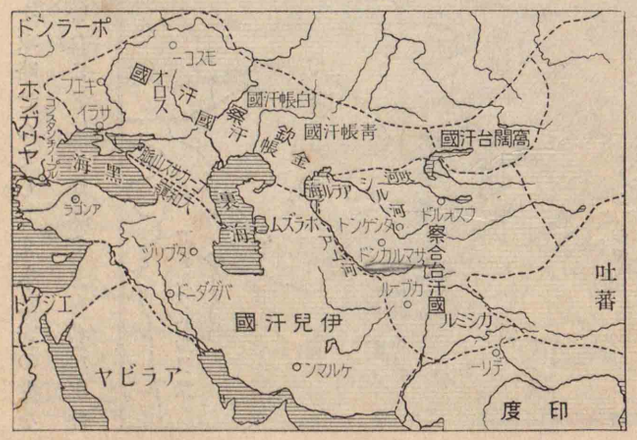
州は同盟して叛旗を飜し、屢〻領主の軍を破り、遂に十三州の聯邦を組織して獨立した。(一二九一―一四九九)

㊃蒙古の西侵とトルコの勃興　蒙古の太祖成吉思汗(Temudjin)(鐵木眞)の孫拔都(Batu)の西征は太宗窩闊台(Oghotai)の命を奉じ、西征してヨーロッパに入り、モスコー・キエフを陷れ、南部ロシヤの地方を攻略し、シレシヤ(Silesia)及びホンガリヤ(Hungary)を蹂躪した後、黑海の北、ヴォルガ(Volga)河畔に欽察汗國(Kipchak)を創建してロシヤの諸侯國を服屬した。ついで旭烈兀(Hulagu)(鐵木眞の孫憲宗の弟)は憲宗の命を奉じて西方アジヤの地を侵し、バグダードに君臨せるカリフ朝を滅し、(一二五八)この地方に伊兒汗國(Ilkhan)を建設した。

拔都の西征

欽察汗國の創設

元の四汗國圖



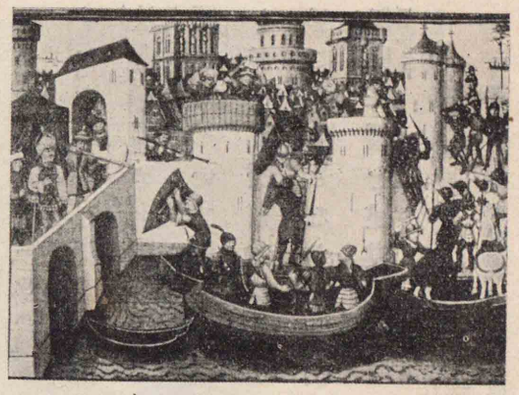
忽必烈

憲宗の歿後その弟忽必烈(Khubilai)は帝位に卽き、都を燕京に遷し、ついで國號を元と改めた。やがて宋國を討滅

オスマン＝トルコの建國

トルコのコンスタンチノープル占領

オスマン＝トルコ勃興圖

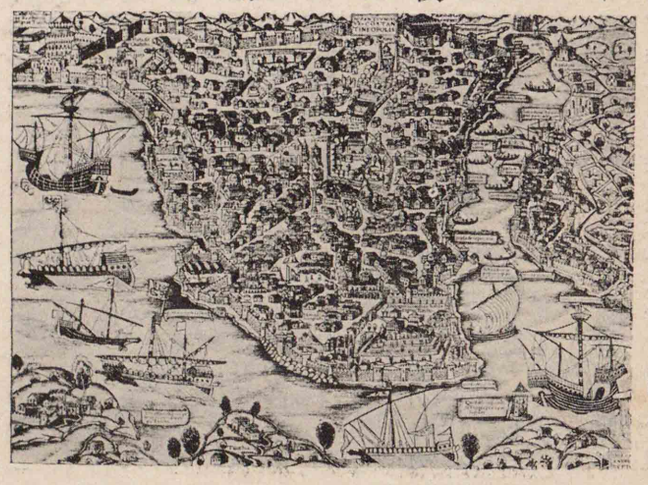


衰運に乘じ、蒙古族の襲來を避けつつ十三世紀の末に小アジヤの地方に據り、自立してトルコ帝國の基を建てた。その後次第に東ローマ帝國の領土を攻め取り、遂にヨーロッパに渡り、十四世紀の末、バヂャシッド一世はバルカン半島の大部を併せ、進んでコンスタンチノープルを圍んだ。この時西方アジヤで勇名を轟かしてゐたチムール Timur は、東ローマ帝國の滅亡を救はんとして、バヂャシッド一世 Badjasid I. をアンゴラの戰に破つた。しかしチムールの歿後その帝國が瓦解したので、トルコは再び勢力を回復し、モハメッド二世 Mohammed II. は遂に*一四五三年コンスタンチノープルを陷れて東ローマ帝國を滅し、都をここに遷し、四方を經略して大帝國をつくつた。

オスマン＝トルコ Osmanli Turks はアルタイ地方に住居してゐた突厥の一部族で、東ローマ帝國の皇帝の要求を容れ、大いにバヂャシッドをアンゴラ Angora で破つた。しかしチムールの歿後その帝國が瓦解したので、トルコは再び勢力を回復し、モハメッド二世 Mohammed II. は遂にコンスタンチノープルを陷れて東ローマ帝國を滅し、都をここに遷し、四方を經略して大帝國をつくつた。

モハメッド二世

ロンドン繪畫館所藏の油繪。



*後花園天皇享徳二年

十五世紀のコンスタンチノープル

東ローマ帝國の滅亡

アンゴラの戰

第三篇　近世史（上）（十五世紀頃より十八世紀に至る）

近世史の上期は十五世紀頃に西ヨーロッパに近世的國家が創建されてから一七八九年フランス革命に至るまでを含み、我が後土御門天皇の御代の頃から光格天皇の御代の初に至り、支那では明の孝宗の頃から清の高宗の末年に及んでゐる（第八章より第十一章に至る）。この期の初に、ドイツに起つた宗教改革の影響を受けて、ヨーロッパ到る所に宗教的政治的の紛爭を惹き起した。その結果ドイツ・イスパニヤは共に衰へたが、フランスはルイ十四世の經營によつて一時霸を稱へるやうになつた。

しかしプロシヤのフレデリック大王や、ロシヤのペートル大帝・カザリン女帝等の努力で、これ等兩國は俄かに勃興し、遂に英・佛諸國と相對峙するやうになつた。またアメリカの植民地十三州は、合衆國を組織してイギリスから分離獨立し、やがて國力を充實して歐大陸の新興諸國と對立するに至つた。

本期に入つて文藝・科學の研究も植民・貿易の事業もまた非常に發展し、葡・西・蘭・佛などの諸國が順次發達し、最後にイギリスは蘭・佛兩國の海上權を奪ひ、世界に於ける海王國たる素地をつくるに至つた。

第六章　新機運の世界

文藝復興の原因

㊀文藝の復興

中古の前半期はヨーロッパ到る所混亂を極め、文藝の如きは僅かに僧侶によつて研究されたに過ぎなかつた。十一世紀以來大學の創設（十二世紀にはヨーロッパではパリー大學・オクスフォード大學・ボロニヤ大學・サレルノ大學の四大學のみであつた）、サラセン文化の輸入、東方にあつたギリシヤ學者のイタリヤ移住などで、文藝復興の曙光はまづイタリヤの地から放たれた。さうして十三世紀頃から人文學者（Humanist）が出て、教會の傳統や、その束縛を離れて自由にギリシヤ・ラテンの古典を研究し、ギリシヤ人の抱懷してゐた人間味を了解し、人の本性を發揮することに努めた。

ダンテ　フロレンス國立博物館所藏。

三大人文學者

フロレンスの人ダンテ（Dante）・ペトラルカ（Petrarca）・ボッカチオ（Boccaccio）は三大人文學者で、その思想はドイツ・フランス・イングランド諸國にも傳はり、やがて近代文學の發達を促した。

三系統語

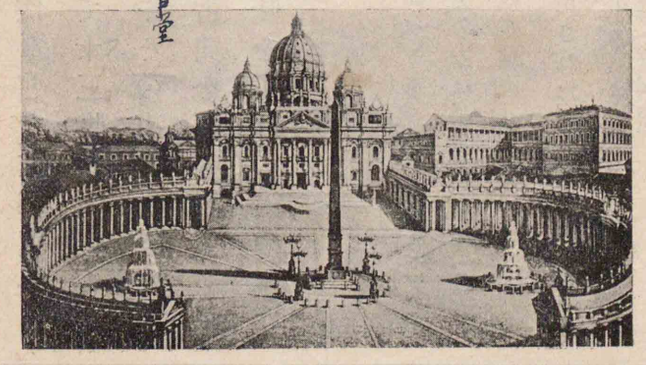
中古期の中頃までは西ヨーロッパ到る所にラテン語が使用された。然るにその後地方地方によつて多少の變化を來し、所謂ラテン系統語即ちローマンス語（Romance Languages）（イスパニヤ語・イタリヤ語・フラン

ス語・ポルトガル語等）と、ゲルマニヤ諸民族によつて使用されたドイツ系統語（ドイツ語・オラン・ダ語・イギリス語・スウェーデン語・デンマルク語・ノルウェー語等）とが出來た。（Germanic Languages）の外東方ヨーロッパ在住の民族は概ねスラヴ系統語（ロシヤ語・ポーランド語・ブルガリヤ語等）を使用してゐた。（Slavic Languages）

中古期の前半に於ける美術は、いづれも教會の束縛を蒙つてゐたが、その後半期の所謂復興時代には、かかる束縛を脱し、新たに寫實の新分子を加へて、人生の眞と美とを發揮するに至つた。即ち建築には、從來のロマネスク式（ローマ式）・ゴシック式（ゴート）の外、新たに復興式が流行し、彫刻は古代ギリシヤの壘を摩し、繪畫も著しい發達を遂げた。

ラファエル

ミケランジエロとラファエル



ローマのセントピーター寺院

復興時代の代表的建築である。

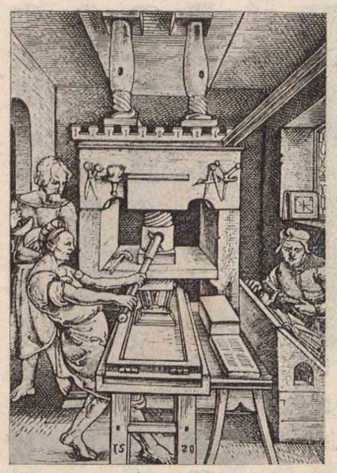
建築彫刻に於けるミケランジェロ（Michelangelo 一四七五—一五六四）、繪畫に於けるラファエル（Raphael）は、共に萬世の師表と仰がれ、レオナルド＝ダ＝ヴィンチ（Leonardo da Vinci）は畫家として、ブラマンテ（Bramante）は建築家として、共に不朽の大作を遺した。

復興式の建築彫刻はイタリヤからフランス・イスパニヤに傳はり、後、イギリスにも入つた。

ミケランジエロ作「モーゼ」

二　新發明と應用

文藝の復興と相前後して、諸種の發明やその應用も盛に興つて、世態を一變させた。中でも磁針盤は十三世紀の末に發明され、これによつて遠洋航海の發達を促した。火藥は早くから支那で製造されてゐたが、サラセン人の媒介でヨーロッパに傳はり、十四世紀にドイツ人シュワルツ（Schwarz）がこれを製造してから、軍用に供せられ、これによつて戰術の革新を促し、封建制度の崩壞を助けた。次に活版術は十五世紀の中頃、グーテンベルヒ（ドイツ、マインツの人）（Gutenberg）



初期の活字印刷機

磁針盤及び火藥の應用

活版術の發明

の金屬活字の發明に起源し、製紙技術の發達と共に學問の普及、文運の發展に貢獻することが實に多大であつた。

㊂印度航路の發見　中古の後半期にトルコが勃興して東西交通の要路を占め、東洋の貨物に重稅を課してから市價が暴騰したので、東洋貿易は一頓挫を來たした。そこでヨーロッパ人の嗜好に適した東洋の物資を直接原產地から輸入する爲に、ここに始めて地中海以外の海洋を航行して、印度や東アジヤ地方に達すべき新航路を發見しようとする氣運が起つた。

ヴァスコ＝ダ＝ガマ

ポルトガル人の印度に達する新航路發見

ポルトガル人は歷代王室の特別な保護と奬勵とで、十五世紀以來熱心にアフリカの西岸に向つて探檢的航海を試み、遂にその國人ヴァスコ＝ダ＝ガマ（Vasco da Gama）は一四九八年アフリカの南端喜望峰（Cape of Good Hope）を迂廻して、印度の西岸カリカット（Calicut）に安着した。

㊃アメリカの發見　ジェノア（イタリヤ）の人コロンブス（Columbus）は、地球は球形であ

マルコ＝ポーロ

るから、西航すれば印度に到達すると考へ、イスパニヤ女王イサベラ（Isabella）の援を得て、一四九二年大西洋を西航し、偶然西印度諸島中の一島に達した。彼はその後なほ三回の航海を試みた。さうしてこの大陸をアメリカ（America）と稱したのは、彼と同時代に、南アメリカの東岸を探檢したイタリヤ人アメリゴ＝ヴェスプッチ（Amerigo Vespucci）の名に基いたのである。

マルコ＝ポーロ

マルコ＝ポーロ（Marco Polo）はイタリヤ、ヴェニスの人で、父ニコロ＝ポーロ（Nicolo Polo）と共に一二九一年の末頃ヴェニスを發し、陸路アジヤ大陸を横斷して大都に着し、元の世祖忽必烈に仕へ、在留十七年、その間大命を奉じ、國內所々を旅行し、各地の人情風俗を察し、これを筆錄することに努めた。やがて歸國の後、東方見聞錄を著はし、始めて東方アジヤに關する新知識を廣く世間に紹介した。コロンブスはこの見聞錄を一讀し、東方にジパングー（Jipangu）（日本）と稱する黃金の豐富な島國があると信じ、東洋殊にこの島に至らんとする希望が、偶然にも新大陸發見の一動機となつたといふことである。

㊄世界一周　新陸地・新航路が發見されてから、遠洋航海を企てる者

*後柏原天皇の世、足利氏の季世、大内義興が貿易のために興り、明の宗武時代

世界周航の始め

メキシコ・ペルー・チリの征服

が頗る多く、ポルトガル人マジェランはイスパニヤ王の命を奉じて大西洋を航し（一五一九）、南アメリカ最南の海峽（Magellan（一四七〇―一五二一））を通過して太平洋に出で、フィリッピ（Philippines）（*一五二一）ン諸島を發見した。彼は不幸にもこの島で歿したが、部下の者はなほ航海を續け、喜望峰を迂廻して本國（一五二二）に歸つた。これが世界一周の始めで地球球形説はこれによつて實證されたのである。

㊅ポルトガルとイスパニヤとの植民　これより先、ポルトガルはカブラル（Cabral）によつて偶然南アメリカのブラジル（Brazil）を發見したが、（一五〇〇）イスパニヤもまたコルテス（Cortes）によつてメキシコを、ピザロ（Pizarro）によつてペルー（Peru）を、各〻略し、アルマグロ（Almaglo）はチリ（Chili）を征して、いづれもこれを植民地とした。

印度に達する新航路が發見されてから、ポルトガル人の東洋に航行する者は次第に增加したので、印度のゴア（Goa）を根據地としてセイロン島（Ceylon も稱へる）及びマラッカ（Malacca）を取り、更に東に進んで南支那海に出で、澳門（マカオ）（或は阿媽港（アマカウ）と）（Macao）の永代租借權を得て支那と通商を營み、また肥前の平戸に來て我が國とも貿易を開き、一時東洋の商利を獨占し、かくて國都リスボ（Lisbon）

ポルトガル人の日本渡來

罪障消滅符販賣の光景

ハンス＝ホルバインの筆になつた木版畫による。

イスパニヤ人のフィリッピン諸島征服

教會の腐敗

ンの繁榮は前古無比となつた。

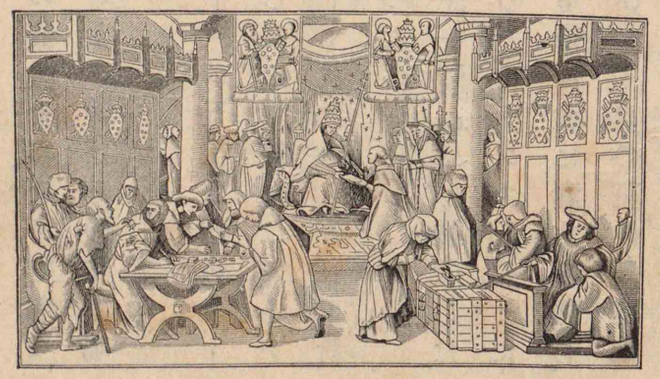
ポルトガル人は一五四三年（天文十二年）大隅國種子島に來て、始めて小銃を我が國に傳へてから、我が國人は自らこれを製作して廣く實戰に使用するに及び、戰術を一變した。その上、西洋流の築城法もまた輸入され、銃眼を有する城廓が各地に築造されるやうになつた。

イスパニヤ人もまた東洋貿易に志し、まづフィリッピン諸島（Manila）を征してマニラを根據地と定め、その拓殖に從ひ、後、我が國にも渡來して平戸で通商したが、その勢力はポルトガル人には及ばなかつた。

第七章　宗教改革

㊀宗教改革の發端

中古の末以來、ローマ教會（Reformation）の風紀は紊れてゐたに拘らず、法王は毫も



*後奈良天皇の弘治元年こ毛の利元年就晴賢が陶を嚴島に滅したに

ルーテルの改革説

ルーテル自説を棄てず

アウグスブルグ宗教和議

反省せず、ローマのセント＝ピーター寺院建立の資金を得ようとして、罪障消滅符を販賣した。ドイツの僧マルチン＝ルーテル（St. Peter Martin Luther）はその非を鳴し、教會刷新の爲に奮起した。（一五一七）

㈡ チャールス五世とルーテル　ドイツ皇帝チャールス五世は、初めルーテルにその説を取消させようとしたが、失敗したので、後にはルーテル派の新教は北ドイツ一帯に弘まり、遂にローマ教會から分れて、新たにドイツ國民の教會を確立するやうになつた。

その後チャールス五世はルーテル派（爾後この派をプロテスタントといふ）を排斥したが、その派の諸侯は同盟してこれに對抗したのと、フランス王もまたルーテル派を援けて皇帝に反對したのとで、皇帝は遂に素志を飜し、一五五五年アウグスブルグ（Augsburg）に宗教和議を結び、ドイツの王侯及び都市に信仰の自由を許した。これからルーテルの新教派はドイツを中心として、デンマルク・スウェーデン・ノルウェー等に傳播され、またスウィスで盛になつたカルヴィン（Calvin）の新教派は、フランスの一部、ネーデルランド（Netherlands）

イグナチウス＝ロヨラ

フランシスコ＝ザヴィエル

耶蘇會の組織

フィリップ二世オランダを領す

スコットランド（Scotland）等に弘布された。

㈢ 舊教派の反省　舊教派ではその勢力を挽回する爲に教會の積弊を除き、宗教裁判所を設けて異教徒に嚴罰を加へた。イグナチウス＝ロヨラ（Ignatius Loyola）（一四九一―一五五六）（イスパニヤ人）は耶蘇會（一五四〇 Order of Jesus (Jesuits)）を組織し、學校を設けて人材を養ひ、且つ宣教師を諸方に遣はして、熱心に舊教の弘布に努めさせた。

ヨーロッパではイタリヤ・フランス・イスパニヤ・ポルトガル・オーストリヤ・ポーランド・アイルランド等は舊教國で、宗教上ローマ法王の指圖を仰いでゐる。

我が國に天主教の傳來したのは、卽ちこの派の宣教師フランシスコ＝ザヴィエル（Francisco Xavier）の布教によつたもので、爾後この教は急速に我が國民の間に弘布され、慶長の初年には全國に蔓延し、信者の數無慮百萬を超ゆるに至つた。

㈣ オランダの獨立　イスパニヤ王フィリップ二世（Philip）は廣大な土地（ネーデルランド・兩シシリー・ミラノ及びアメリカの新植民地）を領し、ポルトガルの王位をも兼ねて、勢威强盛を極めた。そこで王はネーデルランドに舊教を强ひ、且つその特權を奪つて

オランダ獨立の原因

オランダの發展

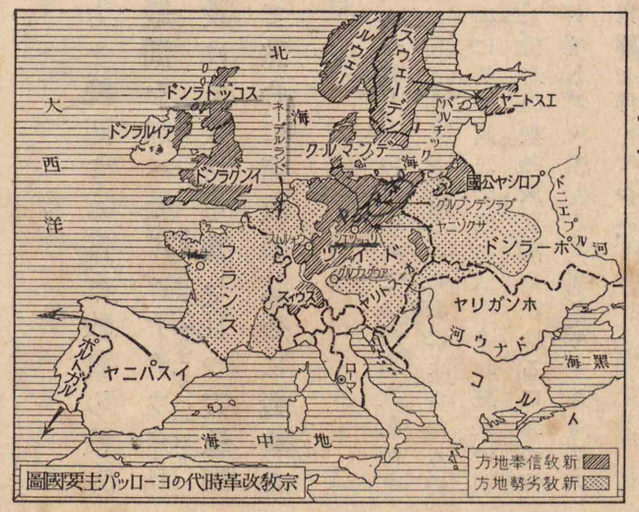
エリザベス女王時代の馬車

イングランド王法王と絶つ

専制政治を行つたので、新教を信ずる北部の七州は獨立を宣言し（一五八一）、オランダ共和國を建てた。

その後オランダは東印度商會（Dutch East India Company）を創め、ジャヴァ島のバタヴィヤ（Batavia）に印度政廳を設け、この市を根據地として臺灣を占領し、我が國及び支那と貿易し、島原亂後は我が國海外貿易の大半を占有し、一時東洋貿易の霸權を握つた。

㊄ イングランドの宗教改革　國王ヘンリー八世は、王后の離婚問題でローマ法王と衝突したので、彼と絶縁してイングランド（一五三四）教會の首長となつた。その後、宗教上の紛爭はなほ行はれてゐたが、女王エリ



宗教改革時代のヨーロッパ主要國圖

エリザベス女王の新教主義

ナント勅令の發布

三十年戰役の原因

ウェストファリヤ條約の內容

ザベスは、新教に基いたイングランド教會を立ててこれを國教とし、新教主義を確立した。

㊅ フランスに於ける宗教上の紛爭　フランスではユグノー（Huguenots）と稱する新教派と舊教派との間に爭が起つたが、ヘンリー四世が*ナント勅（一五九八）令（Edict of Nantes）を發して信教の自由と新舊兩派の同權とを認めてから、多年の紛爭は漸くやんだ。

㊆ 三十年戰役（一六一八―一六四八）（Thirty years' War）　アウグスブルグの宗教和議以後、ドイツ國內に於ける新舊兩教徒の軋轢（アツレキ）に端を發し、ドイツ・デンマルク・スウェーデン・フランスの諸國間に三十年戰役が起つたが、ウェストファリヤの和議で終を告げた。これによつて信教の自由及び舊教とルーテル・カルヴィン二派との同權は共に承認された。

（一六四八）ウェストファリヤの和議でフランスはライン左岸の地を、スウェーデンはポメラニヤ（Pomerania）の地を得て共に國力を增進し、スウィス・オランダは各その獨立を認められた。しかしドイツ帝國內の大小諸侯はいづれも獨立して、ハプスブルグ家の帝權は愈〻衰へ、產業・文化は廢れ、

*一五九八年ナント勅令の發布　慶長三年この年秀吉が薨じたが後陽成天皇の

國民の意氣もまた沈衰した。

第八章　近代諸國家の發達

(a)　フランス

一　リシュリューとマザレン　ヘンリー四世の歿後、ルイ十三世とルイ十四世とが相ついで君臨した。*Louis XIII.* さうしてリシュリュー *Richelieu* はルイ十三世を、マザレンはルイ十四世を、共に輔佐して善政を施し、勵精治を圖つたので、内は王權を固くし、外は大いに國威を發揚することが出來た。

マザレン

二　ルイ十四世の内政　*一六六一　マザレンの歿後、ルイ十四世は萬機を親裁し、コルベール *Colbert* 等の能吏を用ひ、豫算をつくつて財政を整へ、保護政策を採用して產業を勵まし、且つ植民や貿易の事業を興し、文學・藝術をも奬め、ついで常備軍を編成し、新式の武器を採用

ルイ十四世の親政

*西天治皇の、後世綱の時代の明治維新

ルイ十四世とその家族（ロンドン、ウォレス集古館所藏油畫）

この油畫は、ルイ十四世治世の晩年に於けるブルボン王朝四代の肖像を描いたものである。中央の椅子に着いてゐるのはルイ十四世で、その後方の左側に立つてゐるのは皇太子ルイ、右側は嫡孫ブルゴーニュ公である。左側の婦人はルイ十四世妃マダーム＝ド＝マンテノンで、その右側に立つてゐるのはブルゴーニュ公の第三子である。

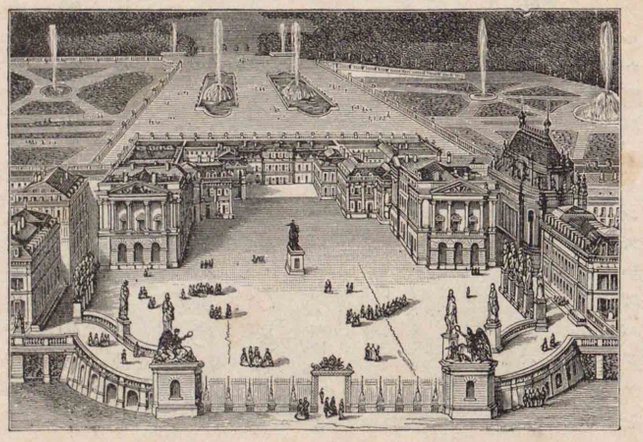
かく一幅の畫中に、四代の肖像を描き收めたもので、瑞色堂に滿ち、和氣靄然たる風致、眞に掬すべきものがある。

ヴェルサイユ宮殿

ヴェルサイユ宮殿

してその訓練を嚴にしたので、國力は充實して、王權は强盛となつた。

國王はヴェルサイユに宏壯な宮殿をつくり、盛な儀式を定めて君主の尊嚴を示し、榮華を恣にした。そこでフランスの言語・學藝・風俗などはヨーロッパ各國の模範と仰がれ、一時ヨーロッパ文化の中心となつた。しかし國王の豪奢と數度の外征とによつて財政は窮乏を告げ、租稅の誅求は漸く苛酷になつたので、不平の聲は喧しくなつた。その上ナント勅令の廢止（一六八五）によつて、商工業に從つてゐた多數の新教徒が國外に逃亡したので、實業界は俄かに衰運に向つた。



ヴェルサイユはパリーの西方十八粁にある小市で、閑雅幽邃の風致に富んでゐる。ルイ十四世は無慮數億の大金を使用し、この地に宏壯華麗な宮殿と庭園

とを營んだのである。さうして時に學者・美術家を始め數多の佳人・才子を一堂に集めて宴を張り、榮華を極め、ブルボン王朝で最も華々しい時代を現出させたが、國力の殷富に驕つて餘り過大な野心を起した爲に、後來大革命の原因を釀したのは遺憾である。

ネーデルランド・オランダ・ファルツ三役

㈢ルイ十四世の外征　ルイ十四世はその富强を恃み、屢外征の師を起した。卽ち初めネーデルランドを攻め、隣國オランダと戰ひ、更にファルツを侵して一部の土地を占領した。ついで一七〇一―一七一四 イスパニヤ繼承戰役を起し、交戰十三年の後ユトレヒト Utrecht で和議を結んで講和し、己の孫フィリップ（後のイスパニヤ王フィリップ五世）がイスパニヤ王たることを承認させた。

ユトレヒト條約の內容

(1) フランス・イスパニヤ兩國の合併しないことを條件として、フィリップ五世をイスパニヤ王とすること。

(2) イギリスはイスパニヤからジブラルタル Gibraltar 及びミノルカ島 Minorca を、フランスからハドソン灣地方 Hudson Bay、ニューファウンドランド Newfoundland Territory、アカディア Acadia（ノヴァスコチア Nova Scotia）地方を得ること（八十頁地圖參照）。

(3) サヴォイ公國は王國となつて、シシリー島を得ること。

(4) プロシヤは王國の稱號を認められること。

(b) イングランド

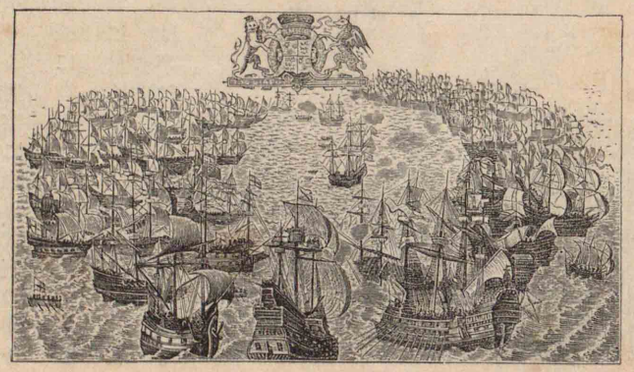
㈠エリザベス女王の治績　イングランドでは、英邁なエリザベス女王が卽位してから、國運は勃興した。女王はまづ王位を覬つたスコットランドの前女王メリーを誅し、ついでイスパニヤ王フィリップ二世の遣はした無敵艦隊 Invincible Armada を破つて、イングランドが他日海軍國たる基をつくつた。この外、女王は北アメリカの東岸にヴァージニヤ Virginia の植民地をつくり、また東印度商會 East India Company が設けられて印度開拓の端緒を開いたのみでなく、學藝を奬めて、大劇詩家シェクスピヤ Shakespeare（一五六四―一六一六）を始め、詩人スペンサー Spenser、哲學者ベーコン Bacon 等を出し、イギリス文學の隆盛時代を現出させた。

メリーの誅戮

無敵艦隊の擊破

學藝の奬勵

無敵艦隊



沈毅膽略に富めるエリザベス女王は、無敵艦隊襲來前に國民の愛國心に訴へて、毅然これに對抗するに決し、卽

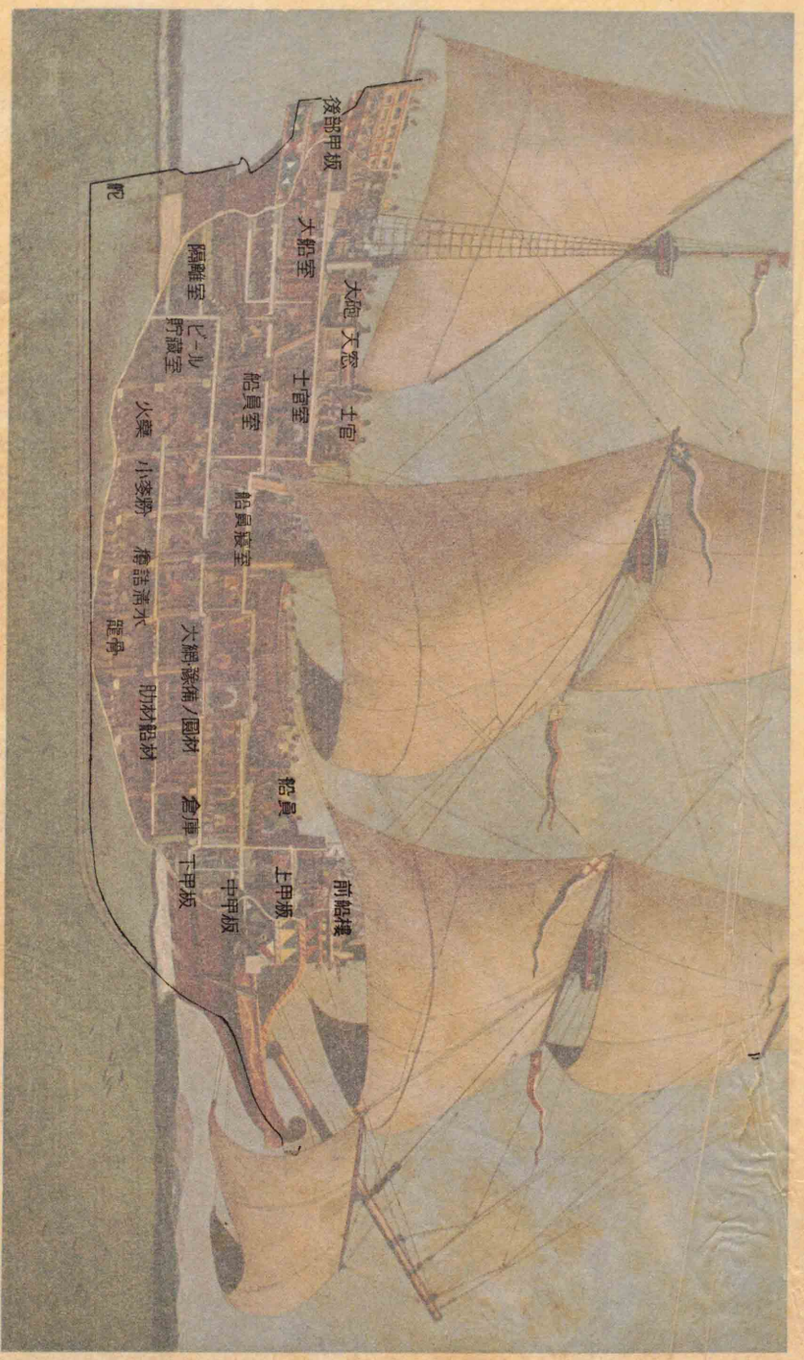
エリザベス女王と無敵艦隊の全滅

時戰備に着手した。やがて女王は駿馬に跨り、親しくチルベリー要塞に臨み、隊伍の間を巡歷して兵士の操練を査閲し、且つ曰く「朕は汝等國民の忠誠に信頼し、國の爲、民の爲、朕の名譽の爲に、來るべき戰爭の最中に於て汝等と生死を共にせんが爲に、親しくここに來つて士氣の鼓舞振作に努力しつつあるのである」と。勇將猛卒は固より、一般の群衆もこの一言にいたく感激し、强敵を殲滅せんことを覺悟した。

(二)共和政治と王政復古　エリザベスの歿後、スコットランド王ジェームス六世がイングランド王（ジェームス一世）James VI.となり、王權神授の說を唱へて專制政治を行つた。子チャールス一世も失政が多く、武力で議會を壓しようとして、議會軍の總帥オリヴァー・クロムウェル Oliver Cromwell（一五九九―一六五八）やがて議會は國王を死刑に處し、一六四九 共和政治 Commonwealth を創設した。かかることは義は君臣にして情は父子なる君民一體の美しき國體を有する我が國に於ては、到底想像も許されない事件である。

チャールス一世時代の風俗

右：紳士とその妻
左：商人とその妻



チャールス一世の失政

艦戰の代時スベザリェたし滅壊を隊艦政海

時戰備に着手した。やがて女王は駿馬に跨り、親しくチルベリー要塞に臨み、隊伍の間を巡歷して兵士の操練を査閲し、且つ曰く「朕は汝等國民の忠誠に信頼し、國の爲、民の爲、朕の名譽の爲に、來るべき戰爭の最中に於て汝等と生死を共にせんが爲に、親しくここに來つて士氣の鼓舞振作に努力しつつあるのである」と。勇將猛卒は固より、一般の群衆もこの一言にいたく感激し、强敵を殲滅せんことを覺悟した。

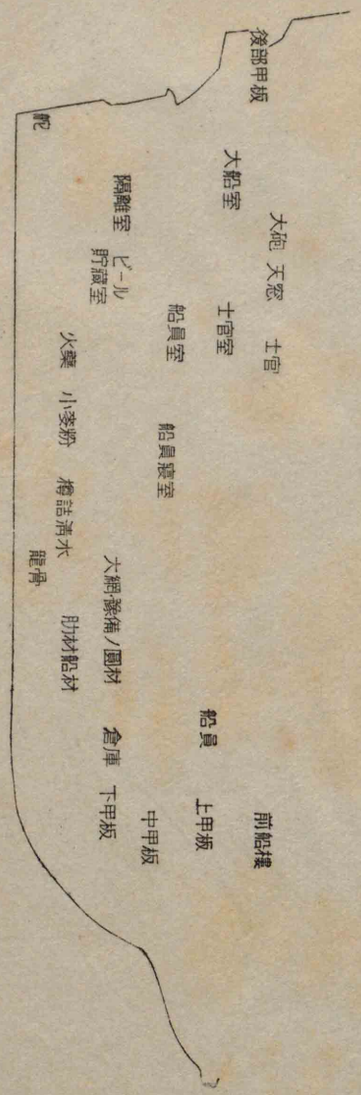
㈡ 共和政治と王政復古

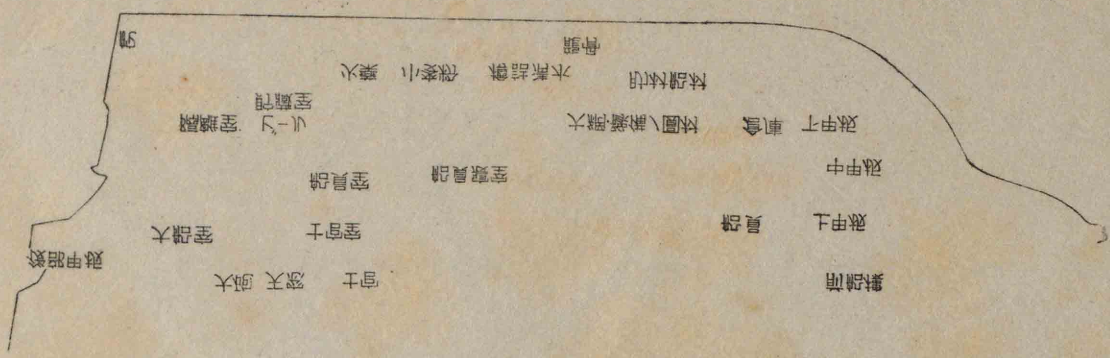
エリザベスの歿後、スコットランド王ジェームス六世がイングランド王（ジェームス一世）James VI.となり、王權神授の說を唱へて專制政治を行つた。子チャールス一世も失政が多く、武力で議會を壓しようとして、議會軍の總帥オリヴァー＝クロムウェル Oliver Cromwell（一五九九―一六五八）に破られた。やがて議會は國王を死刑に處し、共和政治 Commonwealth（一六四九）を創設した。かかることは義は君臣にして情は父子なる君民一體の美しき國體（うるはし）を有する我が國に於ては、到底想像も許されない事件である。

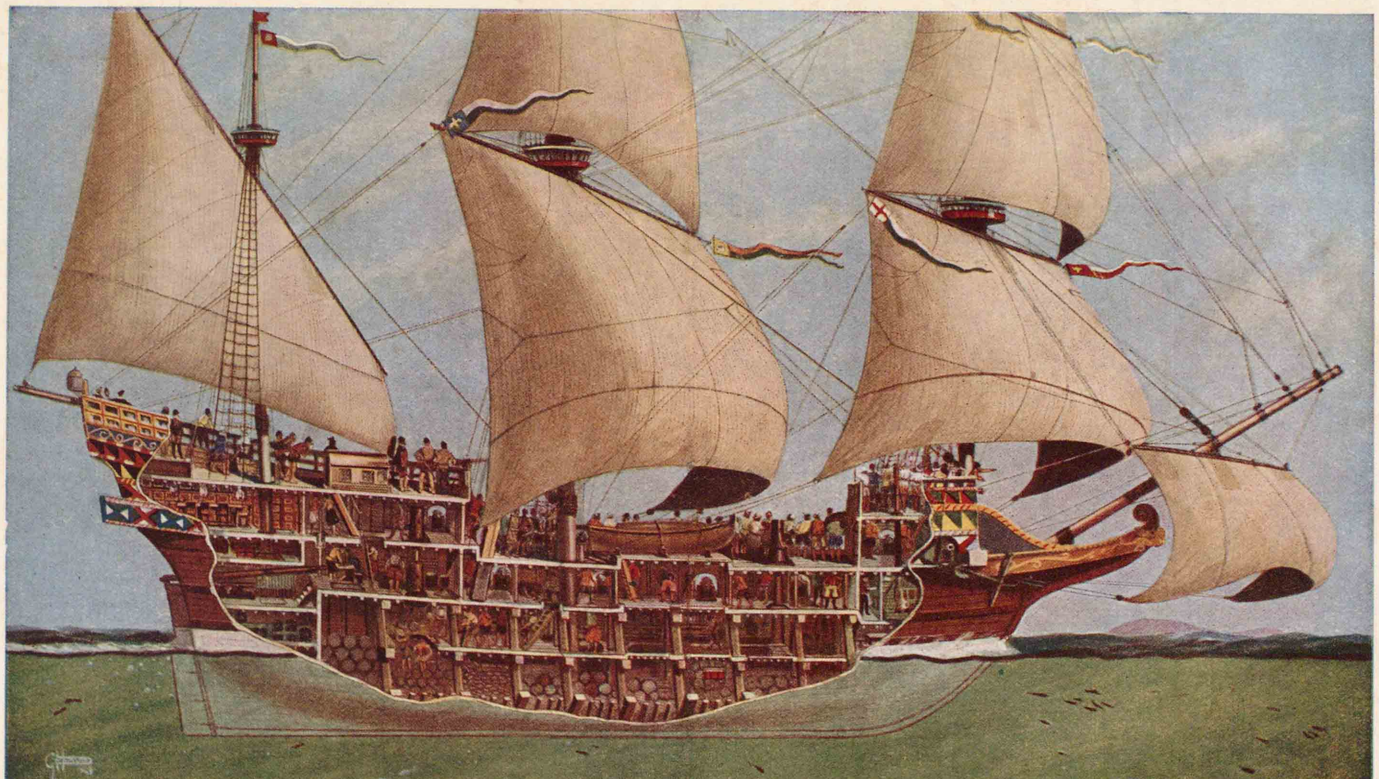
チャールス一世時代の風俗

右：紳士とその妻
左：商人とその妻

チャールス一世の失政







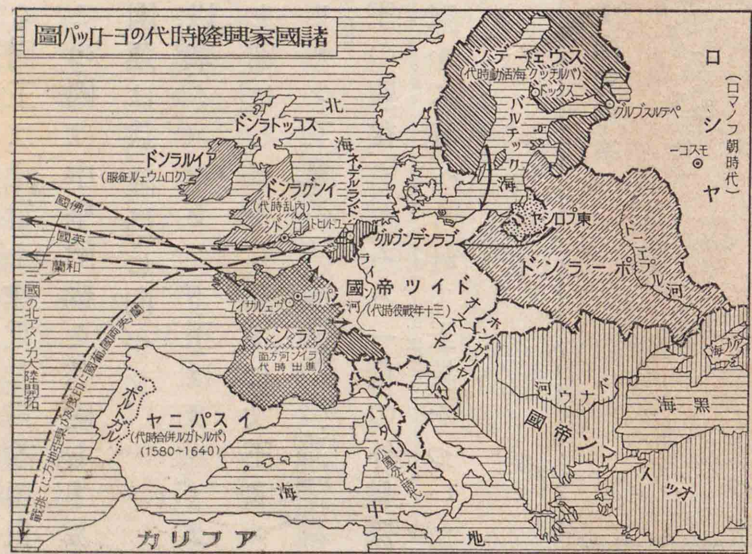
無敵艦隊を撃滅したエリザベス時代の戰艦

クロムウェル

〔クロムウェルのメダル〕

王政復古

その後クロムウェルは推されて共和政府の長官となり、一六五一航海條例 (Navigation Act) を發して、オランダの海運業を抑へたが、その歿後、一六六〇共和政治は滅び、前王の長子チャールス二世が迎へられて國王となり、王政は復古した。然るにチャールス二世・ジェームス二世は共に專制政治を行ひ、殊にジェームス二世は舊教の回復を企てたので、國民は怒つて王を廢し、一六八八その女婿ウィリヤムをオランダから迎へ、翌年ウィリヤムは「權利の宣言」(Declaration of Rights) を承認して國王の位に卽き、ウィリヤム三世と稱



海戰に無經驗なメヂナ＝シドニヤ公 (Medina Sidonia) 統率の下に編成された優勢な無敵艦隊（大戰艦七十三隻、小艦七十六隻、水夫八千人、兵士二萬二千人、書記・僧侶三百人）は、威風堂々七哩にわたる大半月形に展開しつつイギリス海峽に進航した。海戰に熟達したハワード＝エッフィンガム (Howard Effingham) の指揮してゐた英艦隊（戰艦三十四隻、商船百六十四隻）は、約一週間背後から敵艦隊を追擊し、更にカレー港外に於て大打擊を加へたので、無敵艦隊は空しく隊形を亂して北海に退航した。しかも敗殘の敵艦は暴風に惱まされ、覆沒四散して空前の大敗を蒙つた。英艦隊の威名はこれが爲に大いに揚り、又この海戰はトラファルガルの戰勝と共に、英國海戰史上の光輝ある記錄として賞讃されてゐる。

本艦はかかる名譽を擔つたエリザベス時代の軍艦の代表的なもので、その内部の構造設備の複雜してゐる狀態を一目瞭然たらしめる爲に、特にその縱斷面を示した。

本圖はケンブリッヂ大學のマグダレン學院附屬ペプシー圖書館 (Pepysian Library)・科學博物館・ヴィクトリヤ＝アルバート博物館・海軍圖書館等に保管された各種の的確な材料を精細に比較研究した結果に基き、畫家ダヴィス (Davis) の彩筆を揮つたものである。

名譽革命

した。これを名譽革命といふ。(Glorious Revolution)これから國王は議會を尊重し、言論の自由を認めて立憲政治を行つたので、この國は中堅階級を基礎とする議會中心の穩健な君主國となつて、國運は益〻隆昌に向つた。

㈢ 大ブリテン王國　ジェームス一世以來、イングランド王はスコットランド王位を兼攝（ケンセツ）したが、兩國は議會を別にしてゐた。然るに女王アン(Anne)の時代に兩國は全く合併して大ブリテン王國(Great Britain)（これから大ブリテン王國をイギリス王國或は單にイギリスと稱してイングランドと區別する）と稱した。さうして女王の歿後、ジェームス一世の外曾孫ジョージ一世がドイツの*ハノーヴァー(Hanover)家から迎へられて、一七一四王統をついだ。これが今のイギリス王室の祖である。

*ハノーヴァー王朝は一九一七年からウインゾル王朝と改められた。

スチューアート及びハノーヴァー兩朝略系

- 3 チャールス二世（一六六〇—一六八五）
- めりー

ロシヤの獨立

大帝の抱負

大帝の旅行

スチューアート朝祖

1 ジェームス一世（六世）（一六〇三—一六二五）

- 2 チャールス一世（一六二五—一六四九）
  - ウィリヤム二世
  - 5 ウィリヤム三世（一六八九—一七〇二）
  - 4 ジェームス二世（オレンジ公）（一六八五—一六八八）
    - 5 めりー（一六八九—一六九四）
    - 6 あん（一七〇二—一七一四）
- えりざべす
  - そふぃや
  - （ファルツ選擧侯）フレデリック五世（一六一〇—一六三二）
    - （ハノーヴァー選擧侯）エルネスト＝アウグスト
      - I ジョージ一世（一七一四—一七二七）

ハノーヴァー朝祖

(c) ロシヤ

㈠ ロシヤとペートル大帝　ロシヤは十三世紀以來、蒙古の欽察汗國(一四八〇)に屬してゐたが、モスコー(Moscow)大公イワン三世(Ivan III.)は始めて獨立し、その孫イワン四世は皇帝(Czar)と稱して領土を擴げ、數代を經てペートル大帝となつた。

ペートル大帝は英邁で大志を抱き、初めトルコからアゾフ海附近(Azov)(一六九六)の地を奪ひ、ついで西歐諸國を巡歷して、親しく造船術を究め、制度・文

ペートル大帝

内政上の改革

習と傳統とを有する舊都モスコーを去り、新都ペテルスブルグ（今のレニングラード）St. Petersburg Leningrad を創建してここに遷つた。大帝の鴻業により、ロシヤは漸くヨーロッパ化してその面目は一新された。

一要港—海軍力

チャールス十二世

チャールス十二世

㈡ 北方戰役 一七〇〇—一七二一 The Northern War

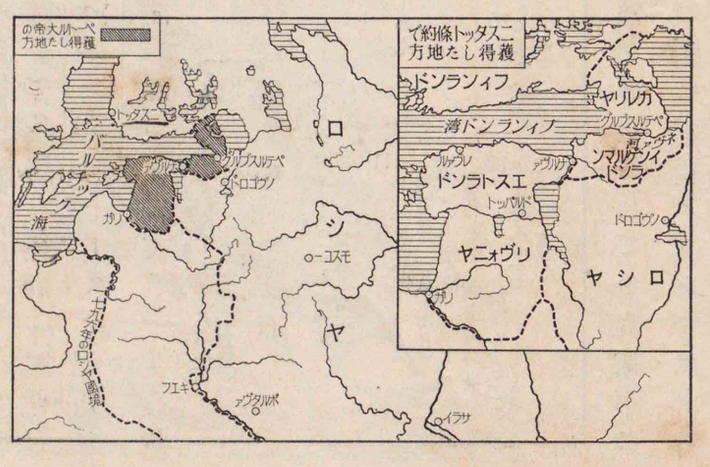
ペートル大帝はバルチック海の沿岸地方を征服しようとして、その領主スウェーデン王チャールス十二世 Charles XII.（一六八二—一七一八）の弱冠なのに乘じ、デンマルク・ポーランド兩國と同盟して宣戰した。これを北方戰役といふ。

この戰役でロシヤはスウェーデンを屈服させて、バルチック海の沿岸地方を得、スウェーデンに代つて北方の強國となつた。

北方戰役

北方戰役圖

北方戰役でチャールス十二世はデンマルク王の軍を破り、轉じてペートル大帝の軍を一七〇〇 Narva ナルヴァで破り、更にポーランド・サクソニヤを侵した。ペートル大帝はこの間に軍政を改めて兵備を嚴にし、ペテルスブルグをネヴァ河口 Neva に建て、諸般の準備を整へてゐた。かかる時にチャールス十二世はロシヤを侵し、一七〇八 ポルタヴァ Poltava の役で敗れてトルコに逃れ、後、ノルウェーで戰歿した。そこで兩國は一七二一 ニスタット Nystadt 條約を結んで講和した。これによつて、ロシヤはインゲルマンランド Ingermanland とカレリヤ Karelia とエストランド・リヴォニヤ Estland Livonia の全部と、多年の希望を達した。



㈢ シベリヤの拓殖

イワン四世がシベリヤの拓殖を始めてから、その事業は大いに進捗し、十七世紀の中頃には遂に清國の北境に達し、屢〻清軍と衝突するに至つたので、ペート

ネルチンスク條約の締結

ル大帝はこれを遺憾とし、清國と折衝してネルチンスク條約（一六八九 Nerchinsk）を結び、外興安嶺とアルグン河（Argun）とを以て兩國の境界とし、多年の紛爭を一掃した。

㈣ポーランドの分割　ポーランドはスラヴ人の建てた王國で、一時强かつたが、貴族が政權を專らにしてから次第に衰へた。ロシヤの女帝カザリン二世はこの機に乘じ、プロシヤ・オース

ロマノフ朝の帝系

1 ミカエル＝ロマノフ（一六一三—一六四五）
2 アレクセイ（一六四五—一六七六）
3 フェオドル三世（一六七六—一六八二）
4 イワン五世（一六八二—一六八九）
そふぃやえうどくしや
5 ペートル一世（大帝）（一六八二—一七二五）
アレクセイ
7 ペートル二世（一七二七—一七三〇）
8 あん（一七三〇—一七四〇）
かざりん
あん
9 イワン六世（一七四〇—一七四一）
あん
11 ペートル三世（一七六二（一月—七月）
12 かざりん二世（一七六二—一七九六）
13 ポール一世（一七九六—一八〇一）
6 かざりん一世（一七二五—一七二七）
10 えりざべす（一七四一—一七六二）

ペートル一世（大帝）は一六八二年兄イワン五世と共に卽位し、兄の殘後萬機を親裁した

カザリン二世

ポーランド分割圖

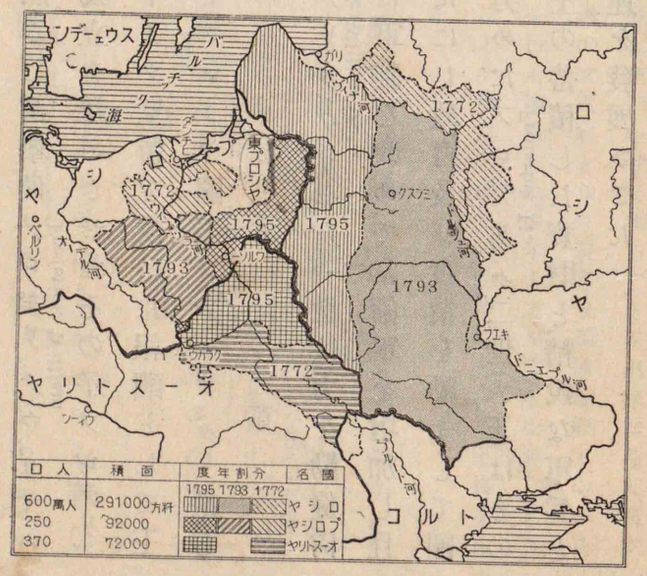
*光格天皇の寛政七年
將軍家齊の時代

トリヤ兩國と謀つて、前後三回に亙つてこの地を分割した。憂國の志士コシューシコ（Kosciuszko）は蹶起して義兵を擧げたが（一七七四・一七九三・一七九五）空しく失敗に終つたので、ポーランドは遂に滅亡した。（*一七九五）

ロシヤはここにポーランドの大半を領有してヨーロッパ强大國の一となつた。

(d) プロシヤ

㈠プロシヤの建國とフレデリック大王　プロシヤはもとドイツ武士團の所領で、後、ポーランド王國（Knights of Teutonic Order）に屬してゐたが、十七世紀の初にブランデンブルグ選擧侯がその



地を併せて、プロシヤ公と稱した。然るに選擧侯フレデリック＝ウィリヤム Frederick William はポーランド王を說いて、公國の獨立を認めさせた。その子フレデリック三世は、イスパニヤ繼承戰役にドイツ皇帝を援けた報酬として王號を許されたので、やがて即位してプロシヤ國王フレデリック一世（一七〇一）と稱した。

フレデリック一世

フレデリック＝ウィリヤム一世

フレデリック大王

次王フレデリック＝ウィリヤム一世 Frederick William I. は、力を勤儉尚武に盡し、夙に軍制を改めて常備軍を增加し、且つ行政を新たにし、教育及び實業を勵まして國本の培養に努めた。フレデリック二世（大王）Frederick II. はその後を繼承し、英邁で武略に長じ、父王の蓄積した資財と、精鋭な軍兵とを用ひて偉勳を樹て、更に一層國運を發展させた。

フレデリック大王

プロシヤ歷代の國王は勤儉尚武を旨とし、自ら奉ずるところは甚だ簡素質實であつた。殊にフレデリック＝ウィリヤム一世は冗官（ジヤウクワン）を淘汰し、常に空色の軍服に白ズボンを着用し、極めて粗野な生活を營んでゐたから、人が呼んで「軍曹王」といつた。

フレデリック大王の生立

フレデリック大王はフレデリック＝ウィリヤム一世の王子で、母はイギリスのジョージ一世の女ソフィヤ＝ドロテヤ（Sophia Dorothea）であつた。幼時から文學・音樂を嗜み、佛文を草し、殊に哲學書を好んで武骨稜々たる父王とは全然その性格を異にしてゐた。その結果、家庭に於て父子の間に屢〻衝突があり、大王もその嚴酷な責罰を甘受することが出來なくて、密かに王宮を脫したこともあつた。やがて最下級の文武官となり、嚴肅な訓練を經て、つぶさに辛酸を嘗めつつ漸次昇進し、二十九歲で王位を繼承した。後年大王が萬難を排して百折撓まず、遂に能く興國の大業を達成することを得たのは、その幼時に於ける嚴格なる訓育に負ふところが少くなかつたのである。

フレデリック大王のシレシヤ占領

マリヤ＝テレサ

七年戰役の原因

大王卽位の年、オーストリヤ繼承戰役（一七四〇―一七四八 The War of the Austrian Succession）が勃發したので、フレデリック大王はこの機に乘じて、急に兵をオーストリヤに進め、女王マリヤ＝テレサ Maria Theresa の軍を破つてシレシヤ Silesia の地を占領し、やがて（一七四八）アーヘン條約で、オートリヤをしてその領有を認めさせた。

二　七年戰役（一七五六―一七六三 Seven Years' War）

マリヤ＝テレサはシレシヤを奪ひ還さうと思ひ、國力を充實し、またフランス・ロシ

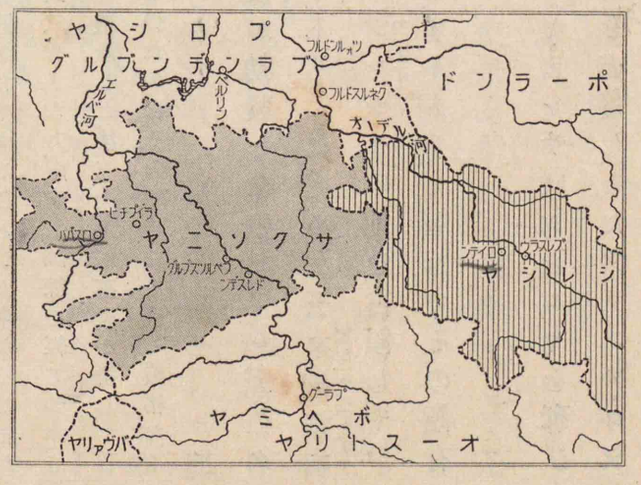
ヤ・サクソニヤ・スウェーデンなどの諸國と同盟して、戰機の到るのを待つてゐた。

フレデリック大王はこれを探知し、急にサクソニヤに侵入して宣戰した。（一七五六）これを七年戰役（第三回シレヤ戰役）といふ。

この役、大王は破竹の勢で各方面の敵を破つたが、中頃に兵隊や軍資の缺乏で非常な苦境に陷つた。けれどもよくこれに堪へたので、形勢は有利に轉回し、ロシヤとフランスとが對プロシヤ同盟を脫退して、オーストリヤを孤立にさせた。そこで大王はオーストリヤと講和し、プロシヤがシレシヤ地方を領有することを承認させた。

七年戰役

シレシヤ戰役及び七年戰役圖



戰後の經營

大王は戰後の經營に努め、鑛山の採掘、荒蕪地の開墾、運河の開鑿を始め、各種の纖維工業を興して、民福を增進し、ついで官制を改め、文藝を奬勵したので、プロシヤの國運は隆昌に向ひ、一躍してヨーロッパ強大國の列に加はつた。

軍備の擴張

義務教育

ホーエンツォルレン家略系

1 フレデリック一世（プロシヤ王）（一六八八—一七一三）
— 2 フレデリック＝ウィリヤム一世（一七一三—一七四〇）
— 3 フレデリック二世（大王）（一七四〇—一七八六）

フレデリック＝ウィリヤム（大選擧侯）（一六四〇—一六八八）

ジョージ＝ウィリヤム（ブランデンブルグ選擧侯）シギスモンド（一六〇八—一六一九）（一六一九—一六四〇）

(e) **アメリカ合衆國**

イギリスの植民地

フランスの植民地

一 イギリス・フランスの植民地 イギリスはエリザベス女王以來植民を奬勵したので、十八世紀には北アメリカ大陸の東岸に十三州の植民地を開いた。フランスは十七世紀の初、アカヂヤ（ノヴァ＝スコチヤ）に植民し

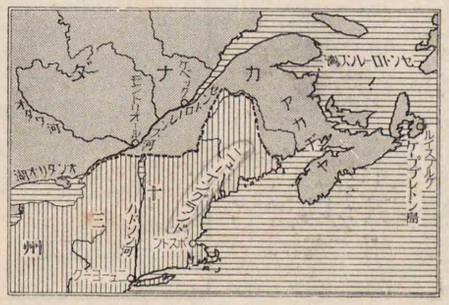
てから、次第にその領域を擴げ、カナダ・ルイジヤナの諸地方を併せ、遂にイギリスの植民地と境を接し、ここに兩國は端（ハシ）なくも衝突した。さうしてその結果、イギリスが勝つてアカヂヤ・ケープブレトン（Cape Breton）島・フロリダ（Florida）・カナダ等の全土を奪ひ、フランスに代つて最大の植民國となつた。

北米に於ける英・佛兩國の戰爭關係圖

㈡ アメリカ合衆國の獨立　イギリスでは七年戰役以來財政窮乏に陷つたので、北アメリカの植民地にも課稅した。植民地の人民は、本國の議會に代議士を出さないから、納稅の義務はないと唱へて、これに反對した。さうして十三州の代表委員はフィラデルフィヤ（Philadelphia）に會して、植民地が自治權を得るまでは本國と通商しないことを議決し、翌年（一七七四）イギリスに宣戰した。さうしてワシントン（Washington）が總督となつて一七七六年に獨立（七月四日）宣言書を公にし、その翌年（一七七七）植民地の十三州が聯邦を組織して、アメリカ合衆國（The United States of America）と稱へた。

植民地の反對

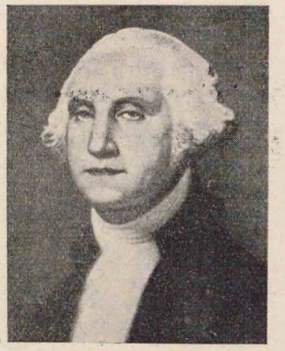
獨立宣言書の公布



獨立軍はワシントンの指揮が良かつたのと、フランス・イスパニヤが合衆國に同盟して援助を與へたのとで、次第に優勢となり、遂に本國軍（一七八一）をヨークタウン（Yorktown）に降すことが出來た。さうして先にイギリス海軍の横暴を抑へ、海上貿易を保護する爲に、武裝中立同盟（Armed Neutrality）を組織したロシヤ・オーストリヤ・スウェーデン・デンマルクなどの諸國も、皆その獨立を認めたので、さすがのイギリスも遂に屈し、パリーと（一七八三）ヴェルサイユとで和議を結んだ。これによつてアメリカ合衆國の獨立は承認され、イギリスはミシシッピ河以東の地を合衆國に讓與し、セネガル（Senegal）と西印度諸島中のトバゴ（Tobago）島とをフランスに割讓し、ミノルカ（Minorca）島とフロリダ州とをイスパニヤに還附した。

ヨークタウンの陷落

ヴェルサイユの和議



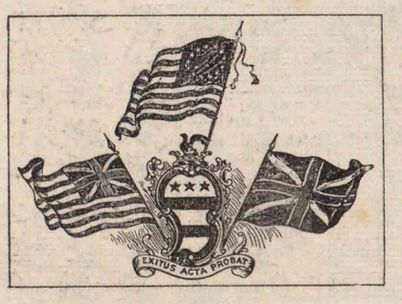
㈢ アメリカ合衆國の憲法　合衆國の人民は、その

ヨーロッパ諸國と合衆國

ワシントン

合衆國の國旗

右：英國旗
左：ワシントンの使用した獨立旗
中：合衆國の國旗

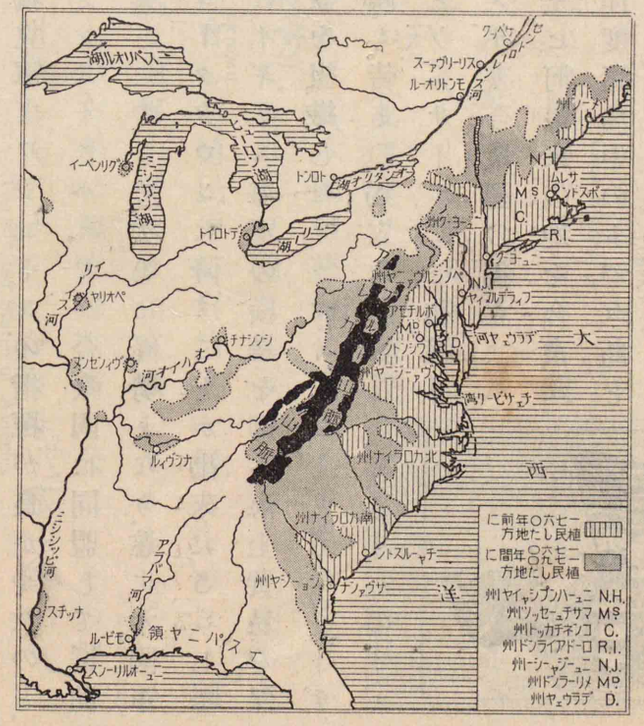


*光格天皇の七年、こと家齊の軍家清宗時代

後必要に迫られて、一七八七年に新憲法を制定した。これによつて合衆國の十三州は聯邦組織となり、各州は任意の憲法を定め、政府と議會とを設けて自治を行ひ、且つ別に全體を統轄すべき中央政府を設け、立法・行政・司法の三權を分掌することとした。

獨立戰爭前後に於けるアメリカ合衆國圖

さうして第一回の國會は一七八九年に開かれ、ワシントンを初代の大統領に選擧し、ついで國都をワシントンに奠めてから、國運は隆々として發展し、ヨーロッパの列強と對等の地位を獲得するに至つた。



國家
兵制
社會
町人

十五世紀の都市生活

第九章　近代の國家・社會とその文化

㈠國家・社會　本期では、ヨーロッパ到る所に、中央集權的國家が成立して專制政治が行はれたが、中には君主自ら目覺めて平民の境遇に改善を加へた者もあつた。兵制に關しては十七世紀以來傭兵を廢して常備兵を設けたが、まだ徵兵制度を採用するには至らなかつた。

社會には貴族・僧侶・平民の區別がまだ嚴重で、貴族・僧侶は社會の上層に居り、種々特權を有して優遇され、平民は農民・商人・勞働者など、いづれも社會の下層にあつて虐待されてゐた。

㈡商・工業　中古の王侯は經濟の道に暗かつたので、ユダヤ人やイタリヤ人を使つて金融事業に當らせた。ところが國民生活の向上するに從ひ、商人・銀行家・法律家・醫師等の一團所謂町人（ブルジョアジー Bourgeoisie）なる者が起つて都市を創設し、同業組（ギルド Guild）

合を組織して產業を獨占し、組合以外の者の競爭を許さなかつたので、產業の發展は非常に緩慢であつた。後、十六世紀になつて、諸國に重商主義の經濟政策が唱へられ、一國の富は商業を盛にし、金・銀卽ち貨幣を蓄積することによつて得らるべきものであると考へた。そこで政府は、高率の關稅を課して外國品の輸入を少くし、同時に內地產業に保護を加へて海外輸出を奬勵し、專ら多量の金・銀を蓄積することに努めた。

重商主義と重農主義との對立

アダム＝スミス

然るに重商主義は商工業を本位とし、外國貿易を奬勵した爲に、自然に農業を輕んじ、農村を疲弊させたので、フランスのケーネー等（Quesnay（一六九四—一七七四））はこれに反對し、貨幣だけが唯一の富でないことを指摘し、土地經濟を强調し、大いに農業の尊重すべきことを唱へた。これを重農主義（Physiocracy）といふ。イギリスのアダム＝スミス（Adam Smith（一七二三—一七九〇））は哲學者であつたが、產業革命の影響を蒙つてイギリスの經濟界が大變動を來た

アダム＝スミスの富國論

アダム＝スミスの學說

した事實に徵し、「富國論」（一七七六 The Wealth of Nations）を公にし、自由貿易主義の經濟說を唱へて一世を警醒し、經濟學の鼻祖と仰がれた。

アダム＝スミスは經濟生活の發達は政府の保護干涉を排除して個人の自由經營に一任することによつて達成されるべきであると說き、重商主義や重農主義の如く一方に偏重することを非難した。さうしてその學說は永くイギリスの經濟思想を支配するに至つた。

三　哲學・純文學

經驗論と唯理論

カントの新說

イギリスのベーコン（Bacon（一五六一—一六二六））は經驗論を唱へ、一切の知識は經驗に基くものであると說いた。これに反して、フランスのデカルト（Descartes（一五九六—一六五〇））は唯理論を唱へ、吾人の知性は毫も經驗に基かない一定の原理を先天的に具へ、眞正の認識はすべてこの原理から發生するものであると說いて、近世哲學思想上の二大源流となつた。然るに十八世紀になつてドイツにカント（Kant（一七二四—一八〇四））が出て、この兩說を綜合して哲學の大系を立て、近世哲學の基礎を築いた。

各國の文學が宗教の束縛を脫して自由の發達を遂げ、殊に各國國

著名な文學者

シェクスピヤ

ゲーテ（右）とシルレル（左）

ドイツのワイマルにある記念碑。

フランスのコルネイユ（Corneille 一六〇六—一六八四）・ラシイヌ（Rachine 一六三九—一六九九）・モリエール（Molière 一六二二—一六七三）、ドイツのレッシング（Lessing 一七二九—一七八一）等はいづれも非凡な文學者で、それ〴〵傑作を遺してゐる。

語の基礎が定つてから、純文學も漸く發達した。

イギリスのシェクスピヤ、ドイツのゲーテ（Goethe 一七四九—一八三二）とシルレル（Schiller 一七五九—一八〇五）とは、世界の三大文豪として知られてゐる。この外、イギリスのミルトン（Milton 一六〇八—一六七四）、ゴルドスミス（Goldsmith 一七二八—一七七四）、

四 啓蒙文學　十七世紀以來科學の發達するに隨ひ、純理を以て舊來の因襲や一切の迷信・傳統を排斥し、その不合理な點を打破して知識を要求する者の蒙を啓かうとする思潮が大いに興つた。さうし

モンテスキュー

三大啓蒙文學者

建築・彫刻・繪畫

リューベンスの繪

てフランス語とフランス文學とが、この運動の機關として用ひられたので、啓蒙文學者はフランスに輩出した。

モンテスキュー（Montesquieu 一六八九—一七五五）・ヴォルテール（Voltaire 一六九四—一七七八）・ルソー（Rousseau 一七一二—一七七八）は啓蒙文學の代表的大家である。モンテスキューは「萬法の精理」を著して、イギリス憲法の美を歎稱し、三權（立法・行政・司法）分立の理想を說いて君主權の制限・打破に努め、ヴォルテールは輕妙な才筆を揮つて教會の腐敗・貴族・僧侶の專横を非難し、ルソーは極端な自由平等論者で「社會契約論」を著はし、不自由・不平等な現社會を覆して、自由・平等な舊態に復すべきを說いて、革新の氣運を盛ならしめた。

五 美術　ミケランジェロの時代を以て極盛期に達した建築・彫刻は、この期間には著しい進歩を示さなかつた。しかし繪畫には、イスパニヤ・オランダなど

代表的の畫家

ベートヴェン

音樂

天文學

經驗哲學

ニュートン

科學界の偉材

引力說

て、各〻大名を博した。

㊥ 科學とその應用

ポーランドの人コペルニクス（Copernicus 一四七三—一五四三）が地動說を唱へて天文學の新系統を開いたことはベーコン（Bacon）の經驗を重んずる新學說と相俟つて科學界は俄かに活氣を呈し、長足の發展を遂げた。

イタリヤのガリレオ（Galileo 一五六四—一六四二）は望遠鏡をつくつて天體を觀測し、ドイツのケプレル（Kepler 一五七一—一六三〇）は天體諸星の運行に關する法則を定め、イギリスのニュートン（Newton 一六四二—一七二七）は引力の大法則（Law of Gravitation）を發見し、ドイツの哲人カに大家が出たので、一時隆盛を極めた。

イスパニヤのヴェラスケス（Velasquez 一五九九—一六六〇）・ムリリョ（Murillo 一六一八—一六八二）、オランダのリューベンス（Rubens 一五七七—一六四〇）、ヴァンダイク（Van Dijk 一五九九—一六四一）、レンブラント（Rembrandt 一六〇六—一六六九）等はいづれも代表的の大家である。

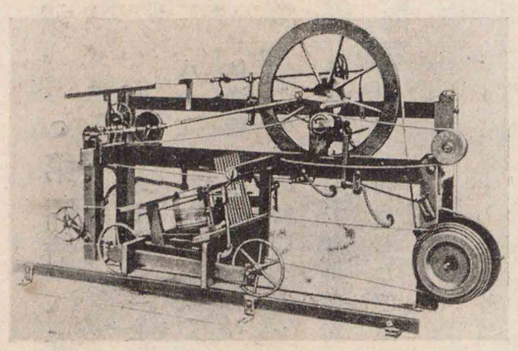
音樂にはドイツのモツアルト・ベートヴェンが出（Mozart（一七五六—一七九一）Beethoven（一七七〇—一八二七））

星雲說

發明界

アークライトの紡績機

科學の應用



ント、フランスの天文學者ラプラス（Laplace 一七四九—一八二七）は星雲說（Nebular Hypothesis）を以て天地の開闢を說明し、スウェーデンのリンネ（Linnaeus 一七〇七—一七七八）は植物學に分類法を試みて、大いにその研究を簡便にした。

この外ハーヴェイ（Harvey 一五七八—一六五七）（イギリス人）は血液循環の法を明かにし、ラヴォアジエ（Lavoisier 一七四三—一七九四）（フランス人）は近世化學の開祖と仰がれた。

かく科學の發達するに隨ひ、その應用もまた顯著となり、種々な發明が現はれ、工業界の革新を促すと共に、益〻人類の福祉（フクシ）を增進させるやうになつた。

セルシウス（Celsius 一七〇一—一七四四）（スウェーデン人）は氣溫計を、フランクリン（Franklin 一七〇六—一七九〇）（アメリカ人）は避雷針を、ワット（Watt 一七三六—一八一九）（イギリス人）は蒸氣機關を、アークライト（Arkwright 一七三二—一七九二）（イギリス人）は紡績機を、ジェンナー（Jenner 一七四九—一八二三）（イギリス人）は種痘法を、それ〴〵發明した。

第四篇　近世史（下）（十八世紀末より十九世紀末に至る）

近世史の後期は一七八九年のフランス革命から一八七八年のベルリン會議に至る八十九年間を含み、我が光格天皇の御代の初から明治天皇の明治十一年に達し、支那では清朝高宗の末年から德宗の初年に及んでゐる（第十二章より第十五章に至る）。

この期の初にフランス革命が起り、自由民權の說が諸方に蔓延したが、ウィーン會議は時流に抗して自由主義を抑へ、ヨーロッパを革命前の舊態に復したので、後、各地に再び革命運動が勃發した。即ちギリシヤはトルコから、ベルギーはオランダから各、獨立し、ドイツはイタリヤと共にオーストリヤの勢力を驅逐してその統一を大成した。この間にイギリスは主力を海外植民地の經營に盡し、ロシヤは中央・東部アジヤの拓殖に努め、アメリカ合衆國は南北戰役後、國運の發展に意を注いで、いづれも多大の効果を齎した。

文藝・科學の進歩は本期の特色とするところであつて、科學の應用もまた盛大を極め、文化發展の上に偉大な貢獻をした。

第十章　フランス革命　ナポレオン

一　革命の意義とその原因

フランス革命は專制政治を打破し、封建

貴族・僧侶と中産階級の衝突

中産階級の國王に對する反感

下層民の奮起

啓蒙文學の影響

アメリカ合衆國獨立の影響

的の弊政を矯正し、民主共和の思想と自由平等の大義とを天下に闡明して、ヨーロッパの世態を一變し、人類進化の歷史に一新紀元を形成した劃期的の大事件である。さうしてその勃發は主として社會的・政治的の缺陷に基因してゐる。即ち(一)實力を失つてゐた貴族・僧侶などが中産階級を威壓した爲に、兩者の間に衝突を招いたこと、(二)驕奢な生活を營んで財政を極度に紊亂した國王は、貴族・僧侶などと結んで中産階級に壓迫を加へたので、中産階級の國王に對する反感が漸次濃厚となつて來たこと、(三)重稅を負擔し貴族・僧侶などに酷使されて、極めて悲慘な境遇に陷つてゐた職工・農民などの下層の平民は、中産階級と策應して、その窮狀を打開する爲に奮起したこと、(四)モンテスキューやルソー等が盛に貴族・僧侶の橫暴を非難し、人權の自由平等を唱へて新思想を宣傳したこと、(五)一部のフランス人は、アメリカ合衆國が獨立して共和政治を實現したことに刺戟され、歷史や國情の相違を顧みることなく、直ちに彼の國の制度を採用しようとしたこと

*光格天皇の寛政元年の清宗高宗時代

ルイ十六世の失敗

は革命の五遠因で、ルイ十六世の失敗は實にその近因であつた。

㈡ 革命の發端と新憲法の制定　ルイ十六世は紊亂した財政を整理しようとして、チュルゴーやネッケル Turgot (一七二七—一七八一) Necker (一七三二—一八〇四) などを擢用したが成功しなかつたので、*一七八九年に貴族・僧侶・平民議員から成り立つ三部會をヴェルサイユに召集した。ところが議論が沸騰したので、平民議員は貴族・僧侶議員から離れて、別に國民議會を起して、憲法を制定するまでは解散しないことを誓つた。その後ルイ十六世は貴族や僧侶の請を容れて、武力で國民議會を抑へようとしたから、不平の暴民はバスチーユの牢獄を破つて、革命の烽火を擧げた。これから暴動は各所に起つたので、貴族や僧侶は續々國外に避難した。

ルイ十六世

パリー、カルナヴァル博物館所藏。

バスチーユ牢獄の破壊

やがて、議會は「人權の宣言」を發表し、政治の主權は人民にあること、すべての人民は自由で同權であること、個人の身體と財産との安全

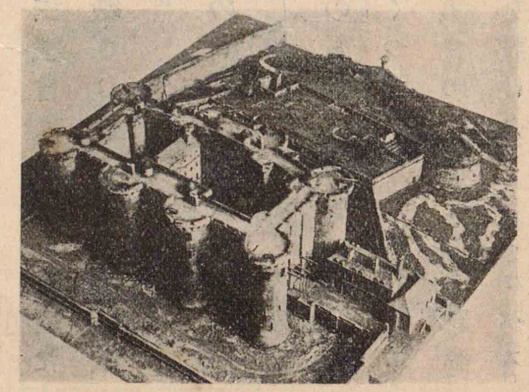
「人權の宣言」

政治上・司法上・宗教上の改革

は共に保障されることなどを定め、更に進んで、政治上・司法上・宗教上に大改革を斷行した。即ち從來の地方行政區劃を廢して、全國を縣・郡・鄕・市などに細分し、すべての官吏と判事とを民選とし、宗教上信仰の自由を認め、寺院の不動産を沒收し、これを擔保として紙幣を發行し、僧侶には俸給を與へることとした。さうして國外へ逃走を企てて失敗し、再びパリーに幽閉された國王ルイ十六世に迫つて、先に國民議會で制定した新憲法を批准させた。

バスチーユ牢獄

新憲法の批准



㈢ 王政の廢滅・恐嚇時代の出現　國民議會解散後、新憲法に基いて召集された立法議會では共和黨員が多數であつたので、輿論は自然に王政の廢滅に偏してゐた。偶この時プロシヤ・オーストリヤの兩國は、革命思潮の波及を阻止する爲に、協力してルイ十六世を救援しよう

聯合軍の襲來

ロベスピエール

聯合軍の敗退

王政の廢滅

第一回對フランス大同盟の成立

小ピット

革命裁判所と公安委員會との設立

これから共和黨は、益ゝ勢を得たが、やがて立法議會は解散され、新たに共和黨の議員を主體とする國民集會が組織され、一七九二年王政の廢止と共和政治の成立とを公にした。

フランスの革命宣傳と王政の廢止とが、國の内外に多大の衝動を與へ、勤王黨は内亂を起したので、イギリスの宰相ピット（小ピット）は、第一回の對佛大同盟（一七九二）（プロシヤ・オーストリヤ・イギリス・オランダ・イスパニヤなどの諸國を含む）をつくつて、フランスの國境を壓した。時に過激黨は議會の全權を握り、革命裁判所と公安委員會とを設け、ダントン・ロベスピエール等がその委員となり、まづ新政府に反對の黨員を殺し、始めて全國に徴兵制度を布き（全國皆兵主義實行の始め）、かくして徴發した壯丁で騒亂を鎮め、然る後前王后マリー＝アントアネット以下多數の人々を殺した。

Pitt（一七五九―一八〇六）
The First Coalition
Revolutional Tribunal, Committe of Public Safety
Danton
Robespierre

王后以下の殺害

ロベスピエールの暴政

ロベスピエール及びその黨與の殺戮

この間、制度の上にも變更を加へ、共和暦をつくつて一七九二年を紀元元年と定め、キリスト教を廢して道理崇拜の教を創めた。

Marie Antoinette
Republican Calendar
Worship of Reason

やがてロベスピエール等が公安委員會の牛耳を執り、益ゝ暴政を行つて、殺戮を恣にした。世人はこの時代を恐嚇時代といつた。しかし彼とその黨與とは輿論の反抗を蒙つて悉く殺され、公安委員會と革命裁判所とは共に廢せられた。

エジプト出征

第二回對フランス大同盟の成立

四　ナポレオンの興起

（一七九五―一七九九）ナポレオンはロベスピエール殺害後に成立した都督政府（Directory）の命を奉じて、まづオーストリヤを征し、更にイギリス・印度間の交通を絶つ爲にエジプトに出征したが、その海軍はイギリスのネルソン提督（Nelson（一七五八―一八〇五））に破られた。イギリス宰相ピットはこの機に乘じ、第二回の對佛大同盟（一七九一）（ロシヤ・オーストリヤ・イギリス・ポルトガル・トルコなどの諸國）をつくつて、フランスに侵入

新憲法の制定

若き日のナポレオン

しようとしたので、ナポレオンは急にエジプトから歸つて政府を倒し、新憲法を定めて執政政府（一七九九―一八〇四 Consulate）を創立し、新たに三人の執政官（Consul）を設け、自ら第一執政となつて文武の大權を握つた。

ナポレオン＝ボナパルトは一七六九年八月コ・ルシカ島の西岸アジャシオ（Ajaccio）に生れた。父はチャールス＝ボナパルト（Chales Bonaparte）と稱し、母はレチチヤ＝ラモリノ（Letizia Ramolino）といひ、容貌秀麗で且つ賢明を以て有名であつた。生來志操堅實で、貧困な家庭にあつて、あくまで質素儉約を勵行し、多數の子女を訓育することに全力を傾中してゐた。ナポレオンの榮達も賢母の教養に俟つところ最も多かつたのである。十歳でパリーの東南にあるブリエンヌ（Brienne）の幼年學校に入學し、一七八四年更にパリーの士官學校に轉じ、翌年業を卒へて砲兵少尉となり、中尉を經て一七九二年二十三歳で砲兵大尉となつた。當時は革命の最中で、初めツーロン（Toulon）港に於ける勤王黨の内亂を一掃して偉勳を樹てた。ついでバラ（Barras）將軍に拔擢されて國民集會を援け、保守黨の起した暴動を鎭めて偉功を奏し、遂に一七九六年イタリヤ軍の總督を拜命するに至つた。

ブリエンヌ幼年學校時代には寡言沈默で頑固であつたから、友人達は彼をスパルタ人と呼んでゐた。頭腦は明晰で、記憶力が強く、數學は最も得意で、歷史殊にプルタルクの

内政の改善

フランス銀行の創立

ナポレオン一世

ナポレオン法典の編成

ナポレオン一世の卽位

英雄傳などを愛讀してゐた。

ナポレオンは英・墺兩國がフランスの新憲法を認めないのを怒り、自らイタリヤに侵入してオーストリヤ軍を破つてこれ（一八〇一）と和し、ついでイギリスとも和議（一八〇二）を約したので、ヨーロッパは一時小康を保つた。

ナポレオンはこの機會を利用して内政を勵み、財政を整へ、パリーにフランス銀行（一八〇〇）を創立して金融の圓滑（一八〇一）を圖り、ローマ舊教（一八〇一）を再興し、新たに勳章（一八〇二）（Legion of Honor）を制定し、文武官吏・學者・藝術家などの勳功の顯著な者に、これを授與した。彼はまた公民教育を奬勵し、土木を起して交通の便を開き、且つナポレオン法典（一八〇〇―一八〇四 Code Napoleon）を編成して諸外國に於ける諸法典の基をつくつた。これより先、彼は國民に推されて終身の統領となつてゐたが、更に大多數の投票で皇帝（一八〇四）の位に卽き、ナポレオン一世と稱

ナポレオン法典とボアソナード

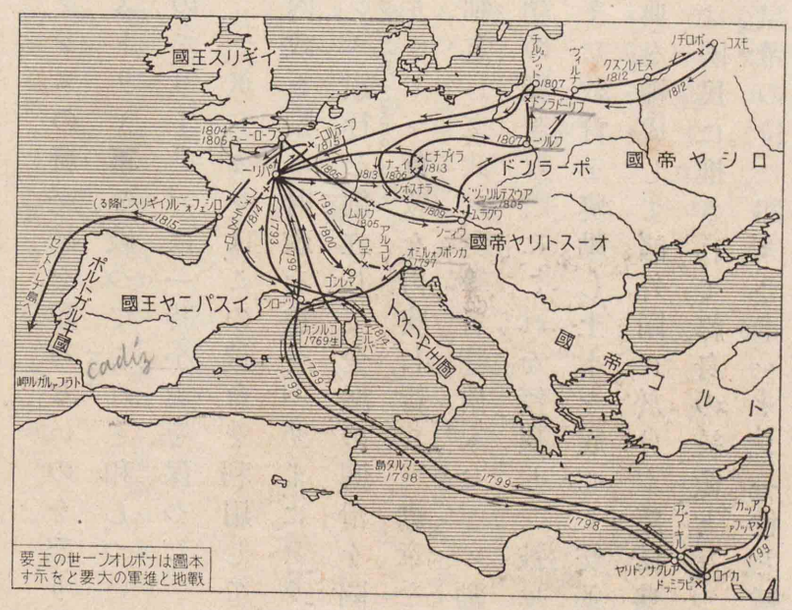
ナポレオン一世の進軍經略圖

第三回對フランス大同盟

へ、翌年イタリヤの王位をも兼ねた。

明治四十三年七月我が國は新たに刑法・治罪法を頒布した。これはフランス法律博士ボアソナード（Boissonade）（一八二四—一八九七）が主としてナポレオン法典を參酌して起草したものであつた。

この時イギリスの宰相ピットは、ロシヤ・オーストリヤ・スウェーデンなどの諸國と第三回の對佛大同盟を組織して、フランスに對抗した。（一八〇五）そこでナポレオン一世はイギリス侵入を企てたが、フランス・イスパニヤの聯合



トラファルガル沖の海戰

ネルソン

ネルソンの奮鬪

ネルソンの最期

艦隊が、ネルソンの爲にトラファルガルの沖で破られたので、その計畫は失敗に終つた。

一八〇五年十月二十一日正午、英・佛兩艦隊の部署が定まると、ネルソン提督は旗艦ヴィクトリー（Victory）の檣上高く「イギリス國は各兵が國家の爲にその義務を實行せんことを希望す」といふ信號を揭げて、その意を各艦に通じ、然る後壯烈な大海戰を演じた。偶、ネルソン提督は敵艦レゾタブル（Redoutable）の後檣から發射した小銃彈によつて重創を蒙つたにも拘らず、なほその任務と責任の重大なことを忘れず、氣息奄々として將に死せんとするに臨み、その捷報を耳にして大いに喜び、「上帝に拜謝す余は己の任務を了せり」と。遂に四十七歳を一期として壯烈な最期を遂げた。嗚呼ネルソン提督は一身を犧牲に供したが、その赤心殉國の精神は炳として竹帛に遺され、永く國民によつて仰慕されてゐる。

ライン同盟の成立
神聖ローマ帝國の解散
プロシヤ征伐
大陸封鎖令の發布
ナポレオン一世のベルリン入城
大陸封鎖令とイギリス

そこでナポレオン一世はその兵を東に進め、墺・露の聯合軍を破つて、オーストリヤと講和した。ついでバヴァリヤ（Bavaria）・ウルテンベルヒ（Würtenberg）・サクソニヤ（Saxony）・バーデン（Baden）などの西南ドイツの諸州にライン同盟（Confederation of the Rhine）をつくらせ、自らその保護者となつたので、神聖ローマ帝國は名實共に滅亡した。

ナポレオン一世のベルリン入城

㊄ナポレオン一世の全盛　プロシヤは久しく中立を守つてゐたが、ナポレオンの侵略を憤り、ロシヤと同盟して戰を宣した。そこでナポレオン一世は長驅してベルリンを取り、大陸封鎖令（Continental System）を出して、（一八〇六、十一月）大陸諸國とイギリスとの通商を禁じ、經濟的にイギリスを自滅させんとした。ついで普露の聯合軍を破つて、兩國とチルジット（Tilsit）で講和した。（一八〇七）

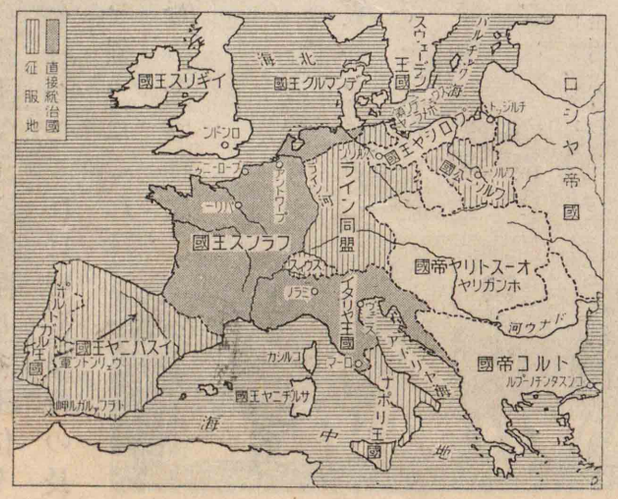
ナポレオン一世は武力ではイギリス本國を襲

ナポレオン盛時のフランス版圖

ポルトガル・イスパニヤの征服

擊することが不可能となつたので、大陸封鎖令を勵行して、イギリスの製品及びその植民地の産物の大陸諸國への販路を遮斷し、同時にイギリスが外國から輸入してゐた穀物・木材等の輸入を杜絶し、同國を經濟的に自滅させんとした。この結果、イギリスの商工業は絶大な打擊を蒙り、大小多數の工場は閉鎖するに至つた。しかし多年蓄積した富の力と優勢な海軍力と商船の力とによつて、その必需品を海外植民地その他より購入して、その困難を打開することが出來たので、大陸封鎖令の實施は結局失敗に終り、これによつて最も苦しめられたのはイギリスではなく、却つてナポレオン一世との同盟諸國であつた。さうしてポルトガルやロシヤが間もなくこの命令に背いて、イギリスと貿易を再開したので、ナポレオン一世はこれ等の諸國を征伐するに至つたのである。

その後ナポレオン一世はポルトガルが大陸封鎖令を奉じないのを責め



て、その國を征服（一八〇八）し、ついでイスパニヤの國王父子を幽閉して、王位を自分の兄に讓らせ、更にオーストリヤを討つてこれに勝ち（一八〇九）、皇帝の長女マリヤ＝ルイザ（Maria Louisa（一七九一―一八四七））と婚（一八一〇）して、家門の繁榮を圖つた。これからロシヤ征伐に至るまでは、實に皇帝の全盛時代であつた。

モスコーを撤退したフランスの敗兵

㈥ナポレオン一世の退位とその再擧　その後ロシヤは大陸封鎖令に背いてイギリスと貿易を始めたので、ナポレオン一世は大擧してロシヤを侵し、一旦モスコー（一八一二）を占領したが、不測の大火と糧食の缺乏とに惱まされて、空しく敗退した。プロシヤはこの報に接して、第四回の對佛大同盟（一八一三）（ロシヤ・スウェーデン・オーストリヤなどの諸國を含む）を組織し、大いにナポレオンの軍をライプチヒ（Leipzig）に破り（一八一三）、進んでフランスに入り、パリーを陷（一八一四）れた。そこでナポレオン一世は帝位を辭してエルバ（Elba）島に流されたが、

第四回對フランス大同盟

納獻資軍の人ヤジロブ

プロシヤ王フレデリック＝ウィリヤム三世は、ナポレオン一世がモスコーで大敗したといふ報知に接したので、竊かにベルリンを逃れてブレスラウに赴き、一八一三年二月三日ことから「我が國に訴ふ」といふ壯烈な勅語を全國に宣布して、國民の奮起を促した。そこで愛國的の熱情は欝勃として各地に瀰漫し、義勇奉公の精神は凝結して、各〻その本職を拋つて、我先にと軍旗の下に集り、一身を國家に捧げようとするに至つた。そして從軍することの出來ないものは、金銀・財寶は勿論、金銀製の什器類まで。あらん限りを盡し、惜氣もなくこれを獻納し、新婚の妻はその指輪まで、頑是ない兒童は貯金箱を空しくし、婦女はその頭髮を斷ち、農夫は最後の馬までも提供して、奉公の赤誠を披瀝した。本圖はその光景を示したもので、各種各階級の民衆が陸續として來り、祖國の爲に各種の物資を携帶して、これを獻納してゐる有樣が紙面に躍如として顯れ、眞に國民奮起の實際を十二分に發揮したものである。

ナポレオンの復位

ウェリントン

ワーテルローの會戰

セントヘレナのナポレオン

ウィーン會議

更に再擧を企て、パリーに歸り、再び皇帝となつた。然るに幾程もなく、帝はイギリスのウェリントン將軍（Wellington（一七六九—一八五二））とワーテルロー（Waterloo（一八一五））で戰ひ、大敗してセントヘレナ（St. Helena）島に流され、ルイ十六世の弟ルイ十八世が位に卽いた。さうして第二回のパリー條約（一八一五）で、フランスの境域を一七九二年の舊に復し、フランスは償金七億フランを出すことを約束した。

ナポレオン一世は一八一五年十月、セントヘレナ島に流されてから、嚴酷な監督の下に極めて憂鬱單調な生活を續け、一八一八年以來は心身著しく衰へた。彼は嘗て歎聲を漏して、「我をこの地に移し、不良な風土で徐々に天壽を害するのは、刀鋒を用ひるよりもなほ酷である。」といつた。やがて一八二一年四月二十七日から病勢俄かに革まり、苦悶すること九日、その間に數通の遺書を認めて、遺子に對する注意、屍體の解剖及び遺産の分配などを完了し、五月五日夕刻絶命した。越えて八日、遺骸を四重の靈柩に斂め、彼が生前好んで散歩してゐた楊樹の下、泉水の邊にある「沈默の谷」に葬つた。

⑦ ウィーン列國會議（一八一四—一八一五）Congress of Vienna

イギリス・ロシヤ・プロシヤ・オーストリヤ及びフ

ランス五國の委員は、革命前の歴史に基づき、國土の分合を行ふことを協定して互に折衝した。しかし意見が區々で容易にまとまらなかつたが、ナポレオン一世の再擧に刺戟されて互に讓り合つたので、會議は漸く次のやうな要領で終了した。

ウィーン條約の内容

(1)※プロシヤは、サクソニヤの北半、ワルソー大公國の一部、前部ポメラニヤとライン河右岸の地とを得た。

(2)※オーストリヤはネーデルランドの地を失つたが、その代りに北部イタリヤを得た。

(3)※ロシヤはワルソー大公國の大部を領して、ポーランド王國をつくつた。

(4)イギリスは先に占領したマルタ・ヘリゴランド兩島とケープ植民地とを領有した。

※一〇一頁地圖を見よ

ボナパルト朝の王系

- ナポレオン一世（イスパニヤ王）ジョセフ＝ボナパルト
- ナポレオン一世（ローマ王）ナポレオン二世（一八三歿）
- まいや＝るいざ
- チャールス＝ボナパルト
- れちちや
- ルイ＝ボナパルト（オランダ王）
- ナポレオン三世（一八五―一八七〇）
- かろりん（ナポリ王ミュラー妃）
- ジエローム＝ボナパルト（ウエストファリヤ王）

(5)スウィスは新たに三州を加へて二十二州の聯邦を組織した。

(6)スウェーデンはデンマルクからノルウェーを割取した。

(7)オランダはオーストリヤ領ネーデルランド（ベルギー）を合併して、新たにネーデルランド王國を創立した。

(8)イスパニヤ・ポルトガル及びイタリヤ國内のサルヂニヤ・ナポリ・法王領などは悉く舊主に還した。

(9)神聖ローマ帝國は瓦解のままとし、新たに三十五州と四自由市とを以てドイツ聯邦を組織することとした。German Confederacy

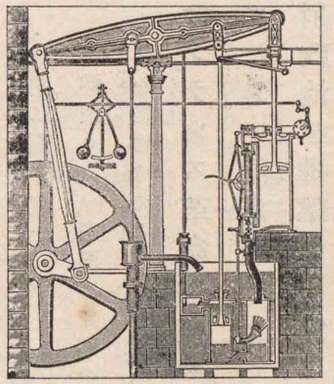
自由主義・國民主義の思想

㊅ フランス革命の結果と産業革命の影響

フランス革命はかやうにして一段落がついた。これを要するにこの革命はブルボン家の壓制政治を排撃する爲に、自由・平等・友愛を目標として勃發したものであつたが、その結果としてブルボン家は復位し、ウィーン會議は革命によつて發生した自由主義や國民主義を排斥して、ヨーロッパを革命前の舊態に復することを眼目として協議決定された。從つて革命は何ものをも遺さなかつたやうに思はれるが、實際はさやうではなかつ

た。卽ちこの革命によつて階級制度は打ち破られ、法律の前には四民は平等となり、信教の自由は認められた。その上、革命によつて養成された自由主義や國民主義の思想は依然として存在し、やがて保守主義や、反動政治に對抗して頑强に抗爭を繼續し、遂に最後の勝利を占めるに至つた。

ワットの蒸氣機關



イギリスに發生した産業革命の影響

當時イギリスでは自然科學の進歩や物質文明の發達、殊に蒸氣機關の應用によつて家庭に於ける手工業は工場に於ける機械工業と化し、製鐵・毛織物・紡績業などが顯著な發展を遂げたので、産業經濟組織に著しい變革を促した。その結果十八世紀の後半から十九世紀の初にかけて産業革命が行はれ、その影響がヨーロッパ大陸にも波及し、フランス革命と相俟つて社會上・産業上に一大變革を與へ、多數の民衆は科學文明及び機械文明の惠澤に浴し、その福祉を增進することとなつた。

すぐれたる我が國體

英・佛・獨などのヨーロッパの諸國では、强者たる王室が優越な實力を以て弱者たる一般民衆を威壓統制して、所謂霸道的の國家を創建した。この場合國民は王室に對して心服したものでなく、實力不足の爲に一時屈從したまでである。この故に王室の暴政が極端になるか、或はその壓力が薄弱となる場合かには、民衆は屢〻結束して革命を起し、王統を顚覆するに至つた。イギリスに勃發した一六四九年チャールス一世時代の革命、一六八八年の名譽革命の如き、或はフランスに起つた一七八九年の大革命、一八三〇年の七月革命、一八四八年の二月革命の如きは、その顯著な實例である。

支那では仁德ある者が天子となり、天帝の命を奉じて仁政を施すのである。從つて霸道國家の場合の如く、力を以て統制の本義とせず、仁政を布いて治國平天下を具現するのであるが、易姓革命の國であることは西洋諸國と同樣である。我が國は天祖の神勅に基いて萬世一系の天皇のしろしめす神國で、三種の神器によつて治國の要道を垂れ給うた。それ故に御歷代の天皇は一點の御私心も交へず、天祖の御心を以て大御心とし、仁愛の聖慮を以て天下を統治し給うた。さうして我等臣民は皇室を宗家と仰ぐ一家族の延長で、實に家族的國家の特長を發揮したものである。從つて皇室と國民との關

係は極めて親密で、所謂「義は君臣にして情は父子を兼ぬる」ものである。かやうに歴代の皇室は親心を以て天下に君臨し、民衆は子心を以て皇室に奉仕してゐるのが、我が國家の王道國家及び霸道國家と異る點である。

第十一章　自由主義と國民主義との發展

神聖同盟の加入國

神聖同盟の趣旨

メッテルニヒ

自由獨立運動

㈠神聖同盟　ウィーン會議の後、ロシヤ皇帝アレクサンドル一世はオーストリヤ・プロシヤ兩國君主と神聖同盟（一八一五 Holy Alliance）を組織し、キリスト教の主義に基いて、各國が互に親しみ愛して永久の平和を維持しようと唱へた。さうしてヨーロッパの諸國（イギリス・トルコ・ローマ法王を除く）は概ねこれに加盟した。中でもオーストリヤの宰相メッテルニヒは、この同盟を利用して、ヨーロッパの平和を保つ美名の下に、ドイツ・イタリヤ・ポーランド・イスパニヤなどに起つた自由主義や國民主義の運動を抑へた。これを反動時代（一八一五年から一八三〇年頃まで）といふ。

そこでこれ等諸國の志士はロンドン・パリー・ジュネーヴなどの諸市に逃れて、各〻青年ドイツ黨・青年イタリヤ黨若しくは青年ポーランド黨を組織し、自國の革命を企てると同時に、互に氣脈を通じて青年ヨーロッパ（Young Europe）をつくり、以て世界的に活動しようとした。

南アメリカに於けるイスパニヤの植民地

イスパニヤ植民地の獨立

メッテルニヒの干渉

㈡アメリカ諸國の獨立　十九世紀の初、イスパニヤは南アメリカでブラジル（Brazil）以外の全土と、北アメリカでメキシコ以南の大半とを領してゐた。しかしその政治は、重商主義政策に束縛せられ、本國の利益を圖るのみで、毫も植民地の經濟的發展を顧みなかつたので、植民地の人民は大いに不平を唱へた。さうしてナポレオン一世がイスパニヤを占領した機會に、相前後して獨立を宣言し、ウィーン會議後も本國の統治を拒み、アルジェンチン（Argentine）・チリ（Chili）・コロンビヤ（Colombia）・メキシコなどの諸共和國、中部アメリカ合衆國などを建てた。ついでブラジルもまた本國ポルトガルの束縛を脱して獨立帝國を創めた（一八二二）

㈢モンロー主義（The Monroe Doctrine）　メッテルニヒはかかる植民地の獨立は自由運動の

一種であると考へ、武力でこれを壓迫しようとした。しかしイギリスの外相カンニング（Canning 一七七〇—一八二七）と合衆國の大統領モンロー（Monroe 一七五八—一八三一）とがこれに反對した。中でもモンローは、向後ヨーロッパの諸國で、アメリカ大陸の諸國に武力干渉をしようとする者があれば、それは合衆國の平和と安寧とを害するものであるから、飽くまで抗爭するといふ教書を公にした。これが卽ちモンロー主義で、さすがのメッテルニヒも遂にこれに屈して、諸植民地の獨立を承認した。これが自由主義が反動主義に對して勝利を得た最初の實例であつた。

モンロー教書を公にす

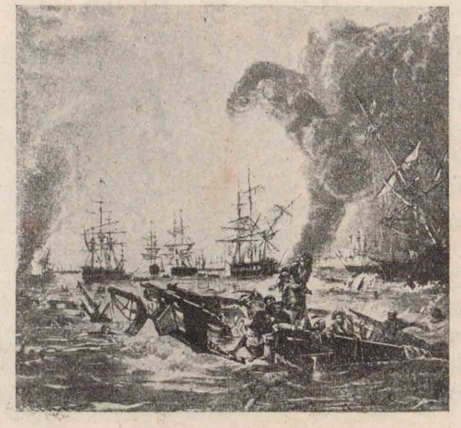
モンロー

四ギリシヤの獨立　ギリシヤは十六世紀の中頃（一五四〇）トルコに隷屬してから、政治上にも宗教上にも多大の壓迫を受けてゐたので、志士はこれを憤つて叛旗（一八二一）を翻した。トルコはエジプトの援を得て殆んどこれを平げた。然るにロシヤは、イギリスと協議の上、トルコにギリシヤの

トルコ皇帝の專制とキリスト教徒の虐待

自治を認めさせようとしたが用ひられなかつた。そこで露英佛三國の聯合艦隊は、トルコ・エジプトの艦隊をナヴァリノ灣（一八二七）内に擊滅し、ロシヤの陸軍はアドリヤノープル（Adrianople）を占領したので、トルコは遂に屈し、この地で和議を結んで、ギリシヤの獨立を認めた。

ナヴァリノ灣内の海戰



第十二章　國民主義諸國家の隆昌とその國民性

當時ヨーロッパには大小幾多の獨立國家が存在してゐたが、その中イギリス・フランス・イスパニヤはそれ〴〵共通の血族・言語・思想乃至歷史・傳統を有する國民主義的の國家であつた。これに反し、ドイツ・イタリヤ・プロシヤ・オーストリヤ・ロシヤなどは異種雜多な民族を抱擁する國家で、未だ鞏固な國民主義的の國家を形成するに至らなかつ

た。然るにその後にフランスに勃發した七月革命及び二月革命によつて、自由統一主義の思想が漸く優勢となり、遂に保守主義を破り、「反動政治を滅して、ヨーロッパの各方面にその思想を宣傳したので、イタリヤ・ドイツなどの諸國は相前後して鞏固な國民主義的國家を創建するに至つた。

チャールス十世の暴政

チャールス十世の玉璽

七月革命の影響

(a) フランス

㊀ 七月革命 July Revolution

フランスのチャールス十世（ルイ十八世の弟）は自由主義を抑ハ、ローマ舊教を興した。その上、專制政治を行ひ、恣に議會を解散し、且つ選擧法に改正を加へると共に言論出版の自由をも束縛した。そこでパリー市民は奮起（一八三〇、七月）して革命を起し、國王をイギリスに出奔させ、王族ルイ＝フィリップ（一八三〇—一八四八 Louis Philip）を迎へて「フランス國民の王（King of the French People）」とした。これを七月革命といふ。

七月革命はベルギー・ポーランド・ドイツ・イタリヤ・スウィスなどの諸國に大きな影響を與へ、各所に自由・獨立の運動を起さ

せた。中でも多年オランダに對して不滿を抱いてゐたベルギー人は、兵をブリュッセル市（Brussels）に擧げ、オランダ軍を破つて獨立（一八三〇）を宣言した。列强はやがてロンドン（一八三一）に會してその獨立を認め、且つ永世局外中立國たることを保證した。しかしその他の國々では、間もなく反動が起つて豫期の目的を達することは出來なかつた。殊にポーランドの如きは、ロシヤの一屬領となつて、長くその束縛を受けることとなつた。

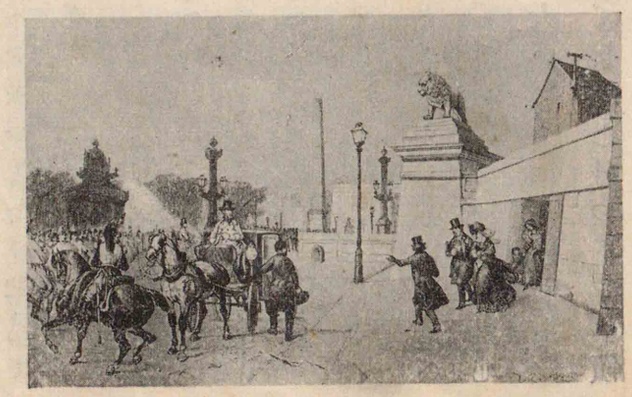
革命の原因

ルイ＝フィリップの王宮脱出

㊁ 二月革命 February Revolution

フランス王ルイ＝フィリップは初め善政を施したが、ギゾー（Guizot（一七八七—一八七四））を用ひて保守政治を行つてから、輿望は地に墜ちた。その上、王は東方問題でエジプトを援け、トルコを抑へようとして却つて失敗を招いたので、民心は全く離反した。そこで共和黨は社會黨と提携してパリーに暴動を起し、國王を排斥して第二次共和政治（一八四八、二月）を創設した。これを二月革命といふ。（Second French Republic）

第二共和政治の成立



フランス革命

二月革命の影響

ナポレオン三世の卽位

ナポレオン三世の外征

ナポレオン三世

ついで新憲法を定め、ナポレオン一世の甥ルイ＝ナポレオン（Louis Napoleon）を選んで大統領とした。

革命破裂の報知が四方に傳はると、オーストリヤではウィーンに暴動が起つて、メッテルニヒはイギリスに奔り、皇帝フェルヂナンド一世は位を甥のフランシス＝ジョセフ（Francis Joseph）に讓つた。またホンガリヤ・プロシヤ・イタリヤなどの諸國でも、相前後して革命運動が起つたが、いづれも成功するに至らなかつた。しかし自由統一の思想は次第に濃厚となつて來た。

㊂ナポレオン三世とクリミヤ戰役（一八五四―一八五六 Crimean War）　大統領ルイ＝ナポレオンは武力で反對黨を抑へ、帝政を再興して皇帝となり、ナポレオン三世と稱へた。帝は民心を收め、國威を外に輝かす爲に、イェルサレムに於ける聖地管理權をトルコ皇帝から得た。ロシヤ皇帝は大いにこれを憤り、トルコに對して抗議し、且つトルコ領内のキリスト教徒の保護權を要求して拒絕されたので、遂に宣戰した。この役、ナポレオン三世はイ

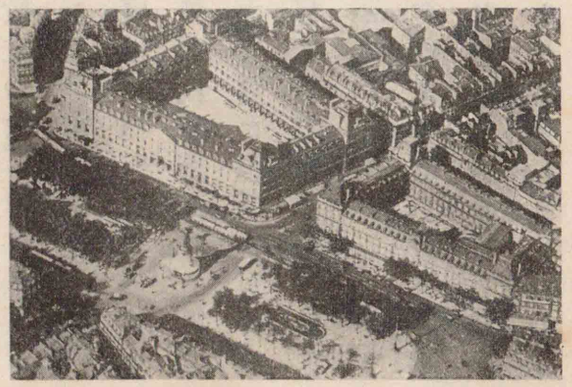
セバストポール要塞の陷落

パリーの和約

ナポレオン三世の市區改正を基として發達したパリー市の鳥瞰圖

ギリスと同盟してトルコを援け、ロシヤの大軍をクリミヤ半島のセバストポール（Sebastopol）要塞に圍み、更にサルヂニヤの援助を得て、遂にこれを陷れた（一八五五）。さうしてパリーで（一八五六）和議を結んで、列國と共にトルコの獨立と領土の保全とを尊重すると同時に、黑海を中立として、ロシヤ南進の計畫を阻止したので、ナポレオン三世の威名は大いに揚つた。

㊃ナポレオン三世の内治　クリミヤ戰役後、ナポレオン三世は意を内治と産業の發展とに用ひたので、工場工業は漸く勃興し、諸外國との通商・貿易もまた著しい發達を遂げた。その上、パリー・リオン（Lyon）・マルセイユ（Marseilles）などの市區に大改正を加へ、これに文化的設備を施したので、都會の面目は一新した。就中パリーに於ける前後二回の世界大博覽會（一八五五・一八六七）は、フランスの文



化を廣く世界の各方面に宣傳することにも役立つた。

然るにプロシヤ＝フランス戰役で、ナポレオン三世が大敗した爲、帝政は倒れたが、行政長官チエール（Thiers 一七九七―一八七七）の盡力で秩序は回復し、多額の償金をも皆濟することが出來た。共和政體の成立後、國民の努力でその基礎は漸く安定し、産業は著しく發展し、その富力は實に驚くべきものがあつた。そこで政府は海外に植民地を開拓し、またドイツに對抗する爲に、軍備の充實擴張をも斷行した。

フランスの國民性

國民は快活で明哲（メイテツ）な理解力を有し、且つ社交的で同情心が深い。意志は相當に强く、貯蓄心に富んでゐるが、强烈な感情を制することが出來ないから、屢〻革命など急激な事を起すことがある。しかし一旦非常時に際すると、その愛國的精神が猛然として發現する。

メキシコとナポレオン三世

メキシコ共和國は多年黨派の軋轢（アツレキ）と財政の窮乏とに苦しめられて、一八六一一時外債利子の支拂を中止した。そこで英・佛・西の三國は各兵を出してこれを責め、遂にメキシコに外債利子の支拂を約束させた。ナポレオン三世はこの機會にメキシコを征し、共和政治を廢

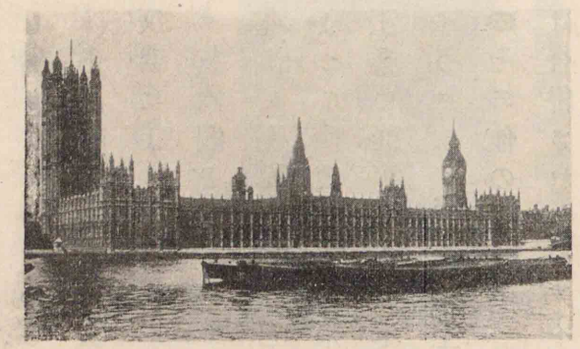
して舊教を奉ずるラテン帝國を創立した。しかし間もなくモンロー主義を堅持するアメリカ合衆國の强硬な抗議を受けて、その兵を撤退したので、帝政は忽ち倒れ、ナポレオン三世の計畫は挫折し、大いに威望を失つた。

(b) イギリス

責任内閣

イギリス議事堂

選擧區の奇觀



❶ 憲法政治の改善　イギリスはヨーロッパで立憲政治の最も早く發達した國で、保守黨と自由黨とが對立して、下院で多數を制するものが責任内閣をつくり、憲政の運用は頗る巧妙を極めてゐた。しかし多年の因襲で各種の弊害がその間に生じ、殊に選擧區改正の如きは最も必要なことであつた。蓋し産業革命以來、鐵・石炭を多く産出する地方に各種の大工場が創設され、農民の離村、工場都市集中の傾向は著しかつたに拘らず、これ等新興の大都市からは一名の代表を

選擧法改正案の通過

舊教徒釋放法案の通過

奴隷廢止・穀物法廢止・航海條例廢止

も出さなかつたからである。

それ故、選擧區の改正は焦眉の急務であつたが、貴族・大地主などの反對によつて容易に實現するに至らなかつた。然るにグレイ伯がウィグ黨内閣を組織してから、選擧法改正案が議會に提出され、一八三二年漸く兩院を通過した。これによつて州・郡・都市はいづれも代議士に選擧し、よつて代表され、從來威力を逞しうした貴族や大地主は勢を失ひ、商工業に從事する資本家や中産階級の者が、これに代つて實權を握るやうになつて、政治上の面目は一新された。

㈢その他の諸改革　これより先、イギリスとアイルランドとの議會は合併されたが、アイルランド人の大半は舊教信者なる爲にイギリスの官吏や國會議員にはなれなかつた。然るにウェリントン内閣の時、オーコンネル等の盡力で、舊教徒釋放法案が議會を通過したので、この制限は撤去された。

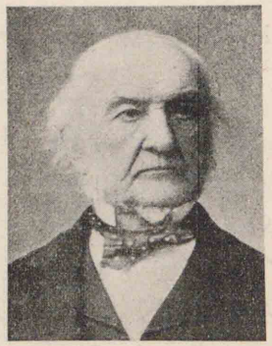
またグレイ内閣の時に奴隷も廢止されたが、穀價の低落を防ぐ爲につくられた穀物法だけは、なほ存して勞働者を苦しめてゐた。幸にヴィクトリヤ女王の時にコブデン（Cobden 一八〇四—一八六五）やブライト（Bright 一八一一—一八八九）等の努力で、その廢止案が議會を通過したので、一八四六、ピール内閣は穀物法を廢してその輸入稅を免除し、一八四九、ついで貿易の自由を制限してゐた航海條例もまた廢止されたので、イギリスは完全な自由貿易國となつた。

ヴィクトリヤ女王の治世

グラッドストン

イギリスの國民性

㈢國運の隆盛　ヴィクトリヤ女王の一代は實にイギリス史上の黃金時代ともいふべく、自由黨のグラッドストン・ローズベリー、保守黨のディスレーリ・ソールスベリー等の大政治家が、自黨が下院で多數を制する場合に交ゝ内閣を組織し、民意を尊重して熱心に政治を勵み、殖産・貿易の發展に努めたので企業熱は勃興し、國運は隆昌を極めて一大商工業國と化した。その上、海軍の優越、社會の改善など、大いに見るべきものがあつたので、歐米の諸國は概ね範をこの國に求めるやうになつた。



國民は概ね氣品が高くて冷靜で、常識が發達して妥協性に富んで

ある。しかし保守的で活潑進取の氣慨と健闘的精神とを缺いてゐる。

ハノーヴァー及びウィンゾル朝の王系

1 ジョージ一世（一七一四―一七二七）
2 ジョージ二世（一七二七―一七六〇）―フレデリック親王
3 ジョージ三世（一七六〇―一八二〇）
4 ジョージ四世（一八二〇―一八三〇）
5 ウィリヤム四世（一八三〇―一八三七）
6 ヴィクトリヤ（一八三七―一九〇一）
アルバート親王（サクス＝コーブルグ＝ゴータ家）
ヴィクトリヤ（獨帝ウィリヤム二世の母后）
7 エドワード七世（一九〇一―一九一〇）
8 ジョージ五世（一九一〇―一九三六）（ウィンゾル朝祖）
9 エドワード八世（一九三六、一月―十二月）
10 ジョージ六世（一九三六、十二月卽位）

サルヂニヤ王とカヴール

ヴィクトル＝エマニュエル二世

(c) イタリヤ

❶ イタリヤ王國の創設

サルヂニヤ王ヴィクトル＝エマニュエル二世は、イタリヤが久しく分裂して統一しないのを遺憾とし、賢相カヴール（Cavour 一八一〇―一八六一）を用ひて政治を勵み、軍備を備へ、產業を盛にし、鐵道を布設して夙夜國力の充實に努めた。その後國

中部諸小國の併合

ナポリ王國の併合

イタリヤ王國の建設

カヴール

王はナポレオン三世の援助を得てオーストリヤ（一八五九）を討つてこれを破り、ロンバルヂヤを得た。やがてサルヂニヤ王はカヴールと共に、中部イタリヤの諸小國（トスカナ・パルマ・モデナ・ロマニヤなどの諸國）を併せ（一八六〇）た後、法王領に入つてその大部を取つた。さうしてシシリー島を征服して北上したガリバルヂ（Garibaldi 一八〇七―一八八二）と力を併せてナポリ王國を滅し、ヴェニス及び法王領以外のイタリヤ全土を統一した。そこでヴィクトル＝エマニュエル二世（一八六五）はイタリヤ國王の位に卽き（一八六一）、ついで國都をフロレンス（Florence）に遷した。

カヴール

カヴールは一八一〇年八月、北部イタリヤのトリノに生れ、十歲で家庭を離れてトリノ（Turin(Torino)）の兵學校に入學した。資性は英邁、意志鞏固で、身體もまた强健であつた。一八二八年十八歲で工兵少尉となり、間もなく中尉に進んだが、七月革命の影響を蒙つて自由主義を唱へた爲に貶謫（タク）され、一八三一年には軍籍を脫して、暫く田園生活を營んで英氣を養つてゐた。ついでフランス・イギリスに遊んで憲法政治の研究に沒頭し、また自由貿易說に心醉し、歸國の後、一八四七年有

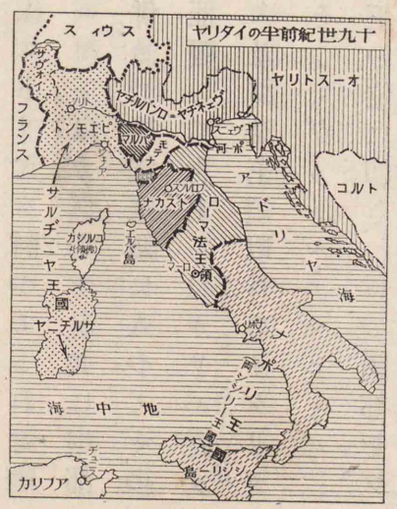
志と共に「覺醒」と題する新聞紙を發行し、盛に立憲主義を鼓吹して、過激な民權思想を排斥した。やがて國王ヴィクトル＝エマニュエル二世の信任を得、一八五二年宰相の印綬（インジュ）を帶びることとなつた。彼は夙にイタリヤの獨立と民族的統一とを畢生の事業とし、一身の毀譽褒貶（キヨバウヘン）を顧みず、鋭意これが實現を企て、遂に萬難を排してその目的を達成した。

ヴェニスとローマ法王領との占領

イタリヤの國民性

二　國土の統一　その後國王は普墺戰役（一八六六）にプロシヤを援けてオーストリヤからヴェニスを取り、ついでフランス駐屯軍が本國に歸還した機會にローマ（一八七〇）を占領して、法王領の殆んど全部を併せ、都（一八七一）をここに遷して、統一の大業を完成した。

國民は強健活潑で情熱的であるが、イギリス人のやうに冷靜沈着でなく、またドイツ人のやうに堅忍不拔でもない。彼等は偉人指導の下に奮鬪努力して、國力の發展と國民生活の向上とに邁進してゐる。



ウィリヤム一世の抱負

ウィリヤム一世

デンマルク戰役

サヴォイ家の王系

（サルヂニヤ王）
チャールス＝アルバート（一八三一―一八四九）
（イタリヤ王）
ヴィクトル＝エマニュエル二世（一八四九―一八六一）
（一八六一―一八七八）
ウンベルト一世（一八七八―一九〇〇）
ヴィクトル＝エマニュエル三世（一九〇〇―）

(d)　ドイツ

一　ウィリヤム一世と北ドイツ聯邦の建設　ウィリヤム一世（William I.）は卽位以來、夙にオーストリヤを聯邦外に驅逐してドイツの統一を大成しようとし、これが準備工作としてまづビスマルク（Bismarck）を宰相に、モルトケ（Moltke）を參謀總長に、任じ、衆議を排して軍備の擴張充實を斷行した。

偶ゝウィリヤム一世はデンマルク國王がシュレスウィヒ（Schleswig）をホルスタイン（Holstein）から分離して、これを自國に併せたことを責めてこれに宣戰し、オー

*慶應三年天皇明治践祚大政奉還

普墺戰役

ビスマルク

オーストリヤ＝ハンガリヤ

ストリヤと共にその軍を破り、遂にシュレスウィヒ以下の地を得て講和した。

プロシヤはこれ等の土地の處分や統治に關して、オーストリヤと意見を異にしたので、まづイタリヤと同盟し、然る後にオーストリヤと戰つてこれに勝ち、前記の土地を領有した外、オーストリヤを聯邦外に放逐し、マイン河北の諸國と共に、新たに北ドイツ聯邦を組織し、自らその盟主となり、ついで聯邦の憲法を定め、更に南ドイツの四王國（バヴァリヤ・ウュルテンベルヒ・バーデン及びダルムスタット）とも秘密に同盟を結んでフランスに備へた。

普墺戰役後、オーストリヤはホンガリヤ王國の建設を許し、國號をオーストリヤ＝ホンガリヤと改稱し、オーストリヤ皇帝は同時にホンガリヤ王位をも兼攝することとした。

(二) ウィリヤム一世とドイツ帝國の創設

フランスは普墺戰役後プロシヤ國運の隆昌を嫉み、プロシヤの宰相ビスマルクはドイツを統一

プロシヤ出征軍の凱旋

セダン役後に於けるビスマルクとナポレオン三世の會見

戰役の經過

する爲には、フランスと戰ふことが必要であると思つてゐたので、兩國の關係は次第に切迫した。偶〻イスパニヤ王位繼承問題を機として、兩國は遂に戰を交へたが、プロシヤ軍は到る所にフランス軍を粉碎し、長驅パリーを陷れて、ヴェルサイユで講和した。

(1)この役、プロシヤの大軍は整備した鐵道を利用して迅速にフランス國内に侵入し、ストラスブルグ（Strassburg）・メツ（Metz）を圍み、更にナポレオン三世をセダン（Sedan）城に破つてこれを捕虜とした。そこでフランスは帝政を廢して國防政府を建て、專ら國防に努めたが、その效なく、ストラス

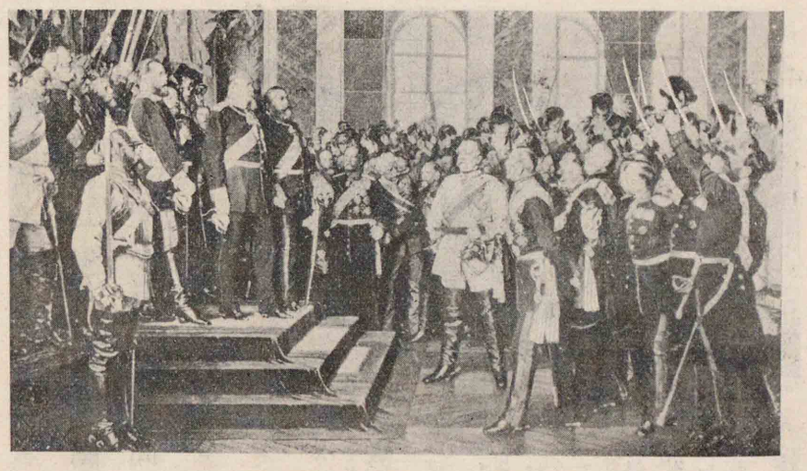
*明治四年この年廢藩置縣

ヴェルサイユ宮殿に於けるウィリヤム一世即位式擧行の光景

ウィリヤム一世の即位

新憲法の制定

戰後の國情



ブルグもメッツも相前後して陷落し、パリーもまた重圍に陷つて遂に開城した。

(2) ヴェルサイユ條約でプロシヤはフランスからエルザス・ロートリンゲンを取り、且つ償金五十億フランを支拂ふことを約束させた。

この戰役中にドイツ統一の議が熟したので、プロシヤ國王ウィリヤム一世は國民の希望を容れ、*一八七一、一月ヴェルサイユ宮殿でドイツ帝國の再興を公にして皇帝の位に卽き、ついで聯邦の憲法により、プロシヤ國王はドイツ皇帝の位を世襲することとなつた。

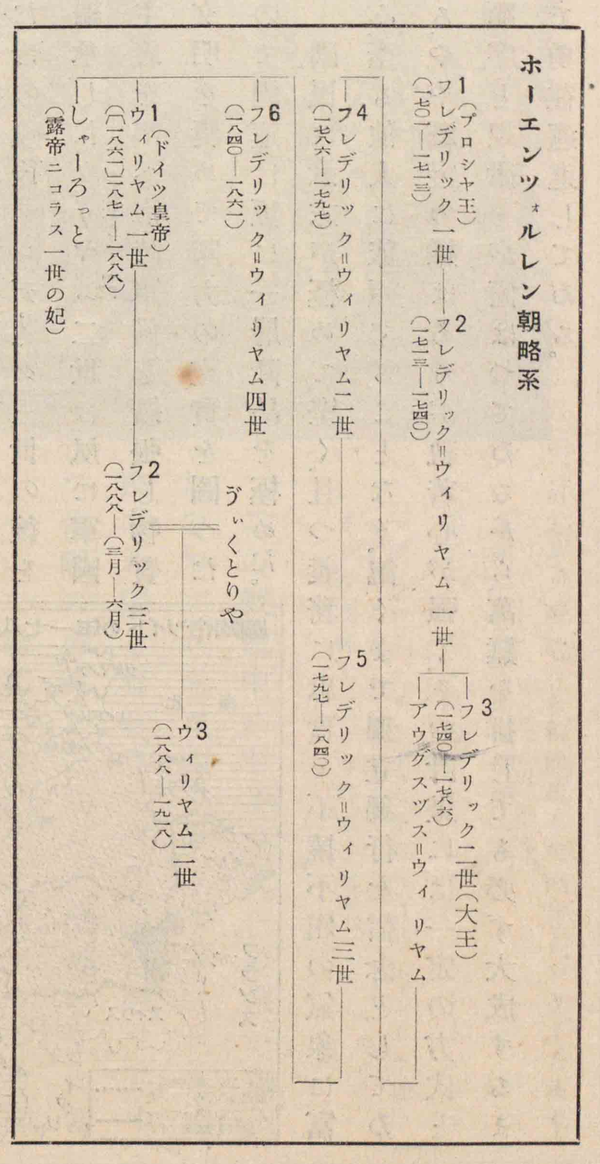
㊂國運の隆昌　皇帝ウィリヤム一世は宰相ビスマルクの輔佐を得て、戰後の經營に努め、農・工・商業を奬めたので、木綿工業・製鐵・製鋼工業等は非常に發展したやがてアフリカ・大洋洲方面に植民地を開き、大いに國力を增進した。帝の歿後フレデリック三世の後を繼承したウィリヤム二世（William II.）は、夙に軍國主義を唱へ海・陸軍備を擴張し、物質文明を奬めて國力の充實を圖つたので、國運は更に一層隆昌を極めた。

ドイツの國民性

國民は意志が極めて堅く、且つ義務に忠實で不撓不屈の氣象に富み、毫も他人に依賴することなく、飽くまで獨立獨行を信念としてゐる。やや驕慢の嫌はあるが執着心が强く、その計畫には一定の方式と順序と規律とが備はつてゐるから、萬難を排しても必ず大成するまで勇往邁進してゐる。

アレクサンドル二世の治世

(e) **ロシヤとバルカン半島**



(f) アレクサンドル二世とトルコ Alexander II.　ロシヤ皇帝アレクサンドル二世は勵精治を圖り、農奴[一八六一]を解放し、地方制度を改め、力めて溫和な政治を行つたが、ポーランド[一八六三]がロシヤに對して叛亂を企ててから、その方針

ベルリン條約の內容

アレクサンドル三世とニコラス二世との治世

を變じて專制政治を行ひ、ついでトルコに內政の改革を迫つて容れられなかつたので、宣戰[一八七七—一八七八] The Russo-Turkish War してこれを屈服させ、やがてベルリン條約[一八七八]を締結して講和した。

(1) モンテネグロ・セルビヤ及びルーマニヤの獨立。

(2) ブルガリヤをトルコに朝貢すべき自治國とする。

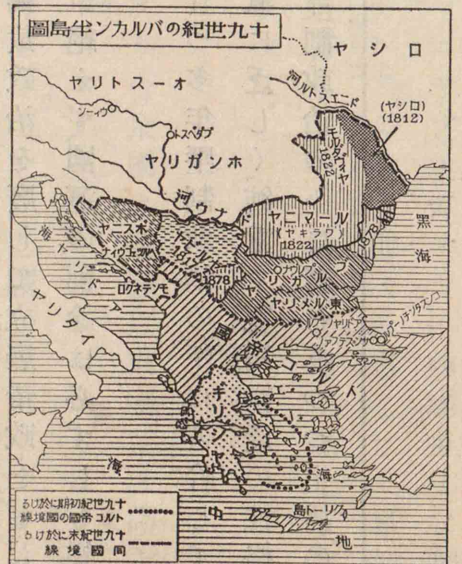
(3) ボスニヤ・ヘルツェゴヴィナの行政權をオーストリヤに委託する。

(4) トルコ領內に於ける信敎の自由を公認する。

皇帝アレクサンドル二世は戰後なほ專制政治を行つて人望を失ひ、遂に虛無黨員の爆彈に罹つて悲慘な最期を遂げた。

(g) アレクサンドル三世・ニコラス二世 Alexander III. Nicholas II.　アレクサンドル二世の後を繼承したアレクサンドル三世もまた獨裁政治を行ひ、スラヴ國家主 Slavic Nationalism

十九世紀のバルカン半島圖



ロシヤの國民性

義を唱へて國内の全人民を露化することに努めた。次帝ニコラス二世も依然專制獨裁政治を行ひ、露化政策（Russification）の實現と、異教の排斥とに努めた。帝は藏相ウイッテ（Witte）（一八四九―一九一五）を信任して、極端な保護政策を行ひ、各種の產業を奬め、シベリヤ鐵道（一八九一―一九〇一）を完成して極東の經營を進め、遂に我が國と交戰（一九〇四―一九〇五）して、大敗を蒙つたので、從來の獨裁政治を廢して立憲（一九〇六）帝政とした。しかし政府と議會との間に衝突が絶えず、國運の前途は必ずしも樂觀を許さない狀態であつた。

國民は氣候・風土の影響を蒙り、且つ多年壓制政治の下に苦吟（クギン）してゐたので、概して沈鬱感傷的で霸氣に乏しく、鈍重で寛裕暢達（クワンユウチヤウダツ）の性格を缺いてゐる。從つて國民は依然專制政治の下に苦しみつつ生活の

ロマノフ家帝系

- ボール一世（一七九六―一八〇一）
  - アレクサンドル一世（一八〇一―一八二五）
  - ニコラス一世（一八二五―一八五五）
    - アレクサンドル二世（一八五五―一八八一）
      - アレクサンドル三世（一八八一―一八九四）
        - ニコラス二世（一八九四―一九一七）

政治・經濟上の衝突

奴隷存廢問題

安定を得ることに汲々（キフ）としてゐる。

㊂バルカン半島の狀態　バルカン半島では、トルコ・ギリシヤの外、新たにモンテネグロ・セルビヤ・ルーマニヤ・ブルガリヤの四國もまた獨立した。さうしてトルコ皇帝アブヅル＝アミド二世（一八七六―一九〇九）（Abdul Hamid II.）は依然として專制政治を行ひ、且つキリスト教徒を迫害したので、紛擾は常に絶えず、半島の風雲もまた暗澹たるものがあつた。

(f)アメリカ合衆國

㊀版圖の膨脹と南北戰役　アメリカ合衆國は建國以來國運は隆々として發展し、フランスからはルイジヤナ（一八〇三）を、イスパニヤからはフロリダ（一八一九）（Florida）を購ひ、更にテクサス（Texas）の地を併せ（一八四六）、メキシコと戰つてニューメキシコ（New Mexico）・上部カリフォルニヤ（Upper California）を取り、その領域は太平洋岸に達した。

かやうに領土を膨脹するに隨ひ、工業を主とする北部と農業を主とする南部との間に、政治・經濟上の利害を異にしたが、更に奴隷の存廢に關して、兩者は意見を異にした。偶〻この時奴隷廢止論者なるリン

リンカーンの大統領當選

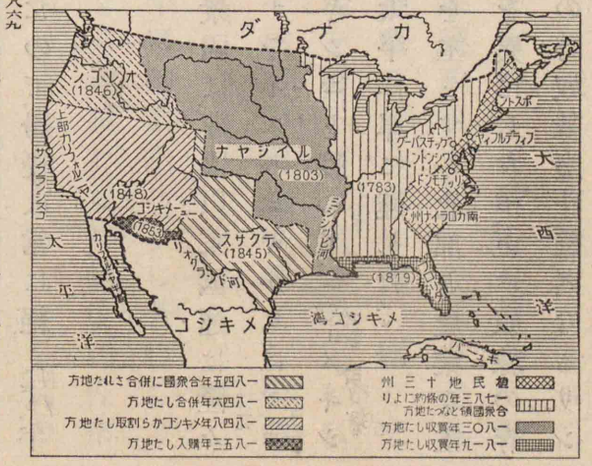
カーンが大統領に當選したので、南北戰役が起つたが、結局北軍は南軍を破つて最後の勝利を占めた。

（一八六一—一八六五）

戰役の經過

初め南軍は頗る優勢であつたが、北軍の總督グラント（Grant 一八二二—一八八五）の指揮そのよろしきを得たことと、その艦隊が南部諸州の要港を封鎖し、農産物の輸出を妨げて軍資を得る路を斷つたこと、大統領リンカーンが奴隸を解放したことなどで、北軍は到る所で勝ち、リッチモンド（Richmond 一八六五）の陷落後、南軍の總督リー（Lee）を降して終を告げた。

合衆國の版圖擴張と南北戰役圖

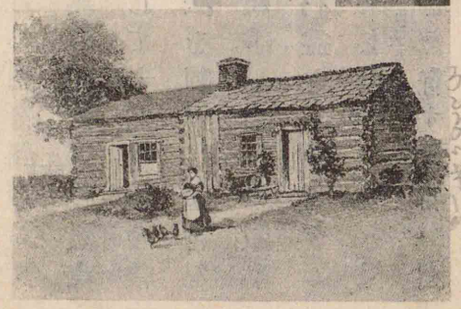


二　戰後國運の隆昌

リンカーンは不幸にも暗殺されたが、その後を承けたジョンソン（Johnson 一八六五—一八六九）・グラント以下歷代の大統領は熱心に戰後の經營とその再建とに努め、奴隸を解放して自由民に編入し、且つ選擧權をも與へたので、南・北は完全に合一して、國基は確立した。爾後北部の諸州には各種の工業が起り、西部地方では白

リンカーンの大統領の殺害

人の移住が著しく增して、金・銀・鐵・石炭・石油などの採掘・棉花の栽培などは益〻大規模となり、天然の資源は開發された。この間に幾多の橫斷鐵道もまた敷設されて交通機關が發達したので、穀物・棉花・大豆などの農產物も大量に產出し、文化は開け、國運は隆昌を極めるやうになつた。



リンカーンとその家

文化の進展に伴なひ、教育もまた刷新され、大學・中學が創立されて男女の共學は認められた。さうしてロングフェロー・エマーソン（Longfellow 一八〇七—一八八二）（Emerson 一八〇三—一八八二）等の文士によつて創作された國民文學は、バンクロフト（Bancroft 一八〇〇—一八九一）等の歷史家によつて編纂された米國史と相俟つて國民の意氣とその自覺とを促進するに役立つた。

國人は自主獨立の精神と活潑進取の氣性とに富み、何事にも世界

アメリカ合衆國の國民性とその抱負

第一主義を以て勇往邁進し、夙に物質萬能主義を唱へ、新奇を好んで舊物を破壞することを意としない。國際的にはモンロー主義と汎米主義とを併せ行ひ、南北アメリカの諸國を威壓してヨーロッパの勢力を驅逐することに努め、同時に帝國主義を高唱して太平洋進出を策し、極東の問題にも容嘴（ヨウカイ）して世界制霸の大望を抱いてゐる。

近世文化の二大特色

第十三章　近世の國家・社會とその文化

㊀國家及び社會

國家主義と民族主義との擡頭

近世文化の二大特色は、自由主義の發展と、物質文化の顯著な進歩とである。自由主義發展の結果として、十九世紀の後半に、ヨーロッパの諸國は概ね立憲政治を採用し、憲法を制定し、國會を開いて民意の暢達を圖つてゐた。しかし國際間の競爭が次第に激烈となつて來たので、君・民は協同して祖國の名譽と利益とを擁護する爲に、個人の利益を犧牲にする傾向を生じ、遂に國家主義（Nationalism）の發達を促すに至つた。これと同時に、同一の民族・言語・習慣などを有する者が團

結して、鞏固な一國家を確立しようとする民族主義も、また一部民衆の間に唱へられるやうになつた。

科學の發達とその應用

次に物質文明の進歩は科學の發達を促し、更に科學が各方面に應用されて大規模の工場や、長距離の鐵道や大型の汽船などが續々出來て、一八七〇年以來は第二の産業革命を招來し、都市・村落の面目は一新された。然るにこれと同時に工場を經營する大資本家卽ち有産階級（Bourgeoisie）と、工場で使役される多數の勞働者卽ち無産階級（Proletariat）との間に、一種の階級的鬪爭を起すやうになつた。所謂勞働問題及び社會問題はかやうにして發生したのである。

勞働問題

社會主義

社會主義は十九世紀に入つてから、イギリスのロバート＝オーウェン（Robert Owen（一七七—一八五八））、フランスのサン＝シモン・ルイ＝ブラン（Saint Simon（一七六〇—一八二五））、ドイツのカール＝マルクス（Louis Blanc（一八一一—一八八二））等によつて唱へられたが、その說は或は空想に走り、或は物質に偏して、各國の國情や歷史を無視したものが多く、これを實行することが困難であるばかりでなく、また決して人類の幸福を招來する所以でもない。

社會政策の實行

これに反して社會政策は現在の經濟組織をそのままとし、その組織によつて起つて來た弊害を矯正改善し、以て各人の生活を徐々に向上發展せしめんとするものである。從つて各國政府は穩健な社會政策を實行して、勞資の協調と共存共榮とを圖り、國民生活の安定とその福利を增進することに努めてゐる。

カント

二　思想の變遷　十九世紀初期の思想界を支配した二大勢力は、理想主義（Idealism）（理智の力を重んじた）とロマンチック主義（Romanticism）（感情を重んじた）とであつた。しかし十九世紀の中頃からは、現實主義（Realism）（空論を排し、實際を基礎とする）が次第に擡頭し、物質文化の進歩と相俟つて思想界を左右するやうになつた。その後十九世紀の末期に、再びその反動が起り、單に事實を探求するばかりでなく、更に事實を根本として原理を發見しようとする新理想主義（New Idealism）と、新ロマンチック主義（New Romanticism）とが唱へられることとなつた。

哲學

文學

代表的作家

バイロン

三　哲學・文學　哲學（Phylosophy）の研究はドイツが最も發達し、中でもカント（Kant 一七二四—一八〇四）は近世哲學の開祖と仰がれ、後フィヒテ（Fichte 一七六二—一八一四）ヘーゲル（Hegel 一七七〇—一八三一）等が出で、いづれも大名を博した。次に純文學の方面では、因襲を打破して清新な氣分と强烈な感情との橫溢（ワウイツ）したロマンチック派の新思想が十九世紀の前半を風靡してゐたが、その後半になつて、自然科學の進步と共に、描寫の精緻（セイチ）を尙ぶ自然主義（Naturalism）がこれに代つた。

ウォーズウォース（Word-worth 一七七〇—一八五〇）・バイロン（Byron 一七八八—一八二四）・テニソン（Tennyson 一八〇九—一八九二）（以上イギリス人）や、ハイネ（Heine 一七九七—一八五六）（ドイツ人）は詩壇の巨擘（キヨハク）として一世に鳴り、カーライル（Carlyle 一七九五—一八八一）・マコーレー（Macaulay 一八〇〇—一八五九）・ラスキン（Ruskin 一八一九—一九〇〇）（以上イギリス人）は三大評論家として、文藝の批評に燦然たる光彩を放つた。次にフランスのユーゴー（Hugo 一八〇二—一八八五）はロマンチック派の代表的作家として、またロシヤの文豪トルストイ（Tolstoi 一八二八—一九一〇）、フランスのゾラ（Zola 一八四〇—一九〇二）は自然主義の小說を以てそれ〴〵顯はれ、ドイツのワグネル（Wagner 一八一三—一八八三）は歌劇を以て盛名を博した

史學　ランケ

次にランケ（ドイツ人）Ranke（一七九五—一八八六）は歴史に科學的研究法を應用して史界を一新し、フランスのギゾー、イギリスのフリーマンと相前後して共に盛名を恣にした。Guizot（一七八七—一八七四）Freeman（一八二三—一八九二）

美術界　美術界の偉材　ダーウィン

美術もまた文學とほぼ同一の進歩を遂げ、その初期には建築・彫刻・繪畫を通じて尚古派とロマンチック派とが相對立してゐたが、中期には自然科學發達の影響を受けて自然主義を以て新機軸を始め、更に印象派・表現派などが現はれた。Impressionism Expressionism

シンケル（Schinkel 一七八一—一八四一）（ドイツ人）・ガルニエー（Garnier 一八三五—一八九八）（フランス人）は建築の名匠として、トルワルドゼン（Thorwaldsen 一七七〇—一八四四）（デンマルク人）・シワンタールレル（Schwanthaler 一八〇二—一八四八）・シャドー（Schadow 一七六四—一八五〇）（以上ドイツ人）は彫刻の大家として、ダヴィード（David 一七四八—一八二五）・マネー（Manet 一八三二—一八八三）（以上フランス人）・ターナー（Turner 一七七五—一八五一）（イギリス人）は繪畫の大家として、いづれも令名嘖々であつた。

レントゲン　マイエルの勢力不滅説

ダーウィンの「種源論」

理化學　キュリー夫人　ラヂウムの發見

四　科學　十八世紀に曙光を放つた科學は、十九世紀に入つて更に長足の進歩を遂げた。卽ちルヴェリエー（フランス人）は海王星を發見し、マイエル（ドイツ人）Leverrier（一八一一—一八七七）Mayer（一八一四—一八七八）は勢力不滅説を確立し、ファラデー（イギリス人）は電磁氣學を創め、リービッヒ（ドイツ人）は有機化學に一新生面を開いて、農藝化學の祖となり、ラマルク（フランス人）はまづ進化論を唱へ、ダーウィン（イギリス人）は「種源論」を公にして進化論の學説を大成し、生物學の發展を促した。Faraday（一七九一—一八六七）Liebig（一八〇三—一八七三）Lamarck（一七四四—一八二九）Darwin（一八〇九—一八八二）Origin of Species

輓近になつて、リンデ（ドイツ人）・ヂュアー（イギリス人）の二人は熱心な研究によつて、從來永久瓦斯と想定されてゐた酸素や水素などを液化し得ることを發見し、ついでレントゲン（ドイツ人）はX線を發見し、爾來この線は各種の方面に應用され、特に醫界の進歩を促した。キュリー夫妻（フランス人）はラヂウムを發見し、原子が電子から Linde Dewar（一八四二生）Röntgen（一八四五—一八九五）Curie（一八五九—一九〇六（夫）、一八六七—一九三四（妻））Radium（一八九八）Atom Electron

ら成り立つてゐることを確め、物質觀に大變動を與へた。

醫學もまた近時非常に發達し、斬新な治療法が施され、人生の幸福を增進するやうになつた。

醫學

醫學上の諸發見

パスツール（Pasteur 一八二二—一八九五）（フランス人）は傳染病豫防接種法と狂犬病患者治療法とを發見し、ロベルト＝コッホ（Robert Koch 一八四三—一九一〇）は細菌學の研究からコレラ菌を發見し、遂にその高弟北里柴三郎をしてヂフテリヤ血淸療法を發見せしめた。その上リスター（Lister 一八二七—一九一二）（イギリス人）はクロロフォルム痲醉外科療法を發見して、手術上に一新生面を開き、ペテン＝コーフェル（Petten Kofer 一八一八—一九〇一）（ドイツ人）は主として健康の保持、疾病豫防の研究に從ひ、特に室內換氣勵行の必要を論じ、衞生學の泰斗となつた。

地理學

この外、人類學・地理學の方面にも研究が行はれた。中でも地理的探檢熱は、近時漸く盛となつて來た。

著名な探檢者

リヒトホーフェン（Richthofen 一八三三—一九〇五）（ドイツ人）は東洋探檢隊を率ゐて支那の地質を研究し、スヴェン＝ヘヂン（Sven Hedin 一八六五生）（スウェーデン人）は前後五回に亙つて中央アジヤ地方に大旅行を試み、またノルデンシェルド（Nordenskjöld 一八三二—一九〇一）（スウェーデン人）はシベリヤの北岸を迂回して我が國にも來り、ナンセン（Nansen 一八六一—一九三〇）（ノルウェー人）は北極探檢を企て、北

車汽の初最たれら せ轉運で國ツイド

ドイツでは、一八三五年に始めてバヴァリヤ州のニュルンベルヒとフュルトとの間に鐵道が開通し、汽車が運轉されることとなつた。この圖は當時の實況を寫したものである。當時使用した列車は、乘合旅行馬車の車體を三個連結したやうに構造されてゐた。そしてこの三室内で旅客は向ひ合せに座席を占め、左右兩方面に窓を作り その中間に昇降口を設け、荷物は屋根の上に載せ、車掌が毎列車の前方に乘つてゐるところは、全く乘合旅行馬車式である。軌道側の道路を疾走してゐる馬車馬が汽車の音響に驚かされて飛上り、犬は吠え、往來の老婆や兒童が驚異の眼で新式の交通機關を凝視してゐる有樣を思ひ合せると、當時の光景がありありと眼前に浮んで來るやうである。

スチヴンソン

汽船

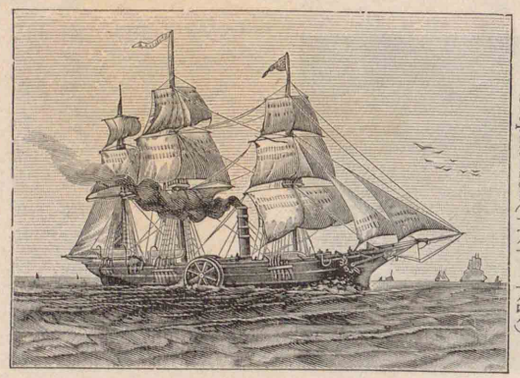
十九世紀初期の汽船

最近の鐵道・汽船

極を距る二百七十二哩の地點に到達した。

㊄ 科學の應用

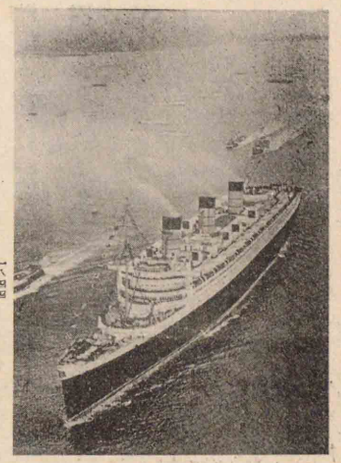
十九世紀の文化に最も重大な影響を與へたものは、蒸氣と電氣力との應用であつた。卽ちフルトン（アメリカ人）（一七六五―一八一五）は蒸氣力を船に應用して汽船を造り、次にスチヴンソン（イギリス人）（一七八一―一八四八）は蒸氣力を陸上に應用して汽車を造り、後、リヴァープールとマンチェスターとの間に鐵道が敷設されて世界に於ける鐵道工事の先鞭をつけた。その後電車は始めてパリーで開通し、その後鐵道も電化された。



アメリカ合衆國の南太平洋線・北太平洋線、カナダのカナダ太平洋線、ロシヤのシベリヤ線、小アジヤのバグダード線などは、大陸貫通鐵道線の最も有名なものである。

汽船もタービン（Turbine）やディーゼルエンジン（Diesel Engine）の發明使用によ

クイン＝メリー號

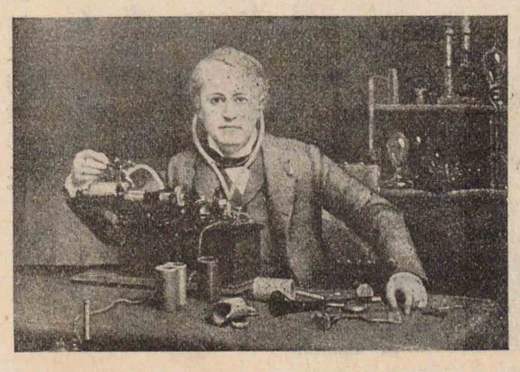


つて、漸次その形體を大にし、その速力を快速にすることに成功し、最近英・佛兩國では七萬噸、時速三十海里の大型快速の汽船を以て大西洋上を航行するに至つた（佛のノルマンヂー號、英のクイン＝メリー號の如きはその代表的なものである）。

電信機

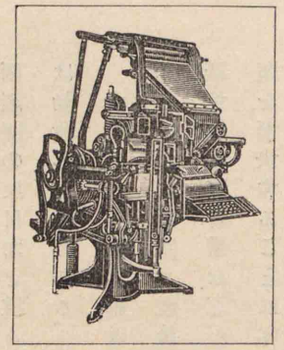
研究中のエヂソン

電氣力はモース（Morse）（アメリカ人）（一八四一）によつて金屬線に應用されて電信機となり、その後、英佛間に最初の海底電信線（一八五一）が沈設され、グラハム＝ベル（Graham Bell）（アメリカ人）（一八四七―一九〇五）は電話機（一八七六）を、エヂソン（Edison）（アメリカ人）（一八四七―一九三一）は白熱電燈・蓄音機などを、またマルコニ（Marconi）（イタリヤ人）（一八七四生）は無線電信を發明し、ついでド＝フォレー（De Forest）（アメリカ人）（一八七三生）は三極眞空管を發明して、後年ラヂオの完成に貢獻した。



この外オトマー＝メルゲンターラー（Ottmar Mergenthaler）はリノタイプ（Linotype）（一八八四）印刷機を發明し、後、これに改良を加へて新聞紙の發行を迅速簡便にした。その上、兵器の改良・進歩もまた著しく、水雷・綿火藥・速射砲・後裝連發銃などが盛に使用されるやうになつた。

リノタイプ印刷機



㈥ 世界共通平和事業

十九世紀の中頃から、交通・輸送機關の發達するに隨ひ、種々な世界共通の事業が勃興し、國際的の會合が頻繁になつて來た。即ち世界大博覽會（International Exhibition）は最初にロンドンで開かれてから、十數回に亙つて世界の大都市に於て開催された。またジュネーヴの規約に基いて戰時傷病者を救護する目的で萬國赤十字社（International Red Cross Society）が創立せられ（一八六四）、我が國もまたこれに參加してゐる。この外萬國郵便同盟・萬國電信同盟（International Postal Union, International Telegraph Union）、各種學藝上の會議、萬國平和會議・國際勞働會議などが相ついで開かれ、殊に國際平和會議の常設館はベルン（Bern）市に建設されてから、各國の國際的會合は次第に頻繁となり、各種の國際的事業が發達するに至つた。

世界大博覽會

第五篇　最近世史（十九世紀末より現代に至る）

最近世期は一八七八年のベルリン會議から今日に至る六十餘年間を含み、我が明治天皇の明治十一年卽ち支那清朝德宗の光緒四年から今日に及んでゐる（第十六章より第二十一章に至る）。

この期の初にヨーロッパでは三國同盟と三國協商とが成立して、よくその均勢を保つてゐた。そこで列强は世界政策を唱へて、アフリカ・アジヤ・太平洋方面に植民地を開拓するやうになつた。然るにドイツの國力が非常に發展したので、ヨーロッパの均勢は動搖を招き、不安陰鬱の空氣は漸く濃厚となつて來た。加之ロシヤ・オーストリヤ兩國間のバルカン半島に於ける利害關係の衝突、イギリス、ドイツ兩國間の實力競爭、フランス・ドイツ兩國間の反目など、種々錯綜した原因がこれに働きかけて、遂に前古未曾有の世界大戰は勃發したのである。

大戰の結果、世界は改造され、民族自決主義に基いて數多の小共和國が建設された。しかしいづれの國も戰後の經營と復舊事業とに惱まされ、戰債會議・安全保障會議・軍縮會議・世界經濟會議などが次から次へと開かれ、種々な協定も出來たが、根本的にその難問題を解決することは容易でない。最近イタリヤに於けるムソリーニのファショ運動や、ド

イツに於けるヒットラーのナチス運動などが激烈となり、イスパニヤにも最近動亂が勃發したので、ヨーロッパの國際關係は惡化して一觸卽發の危機に直面するに至つた。加之アメリカ合衆國の軍備大擴張と太平洋方面に於ける進出、ソヴィエト＝ロシヤの極東方面に於ける防備の充實などは、中華民國の不統一な實狀と相俟つて、東亞の政局を益〻紛糾多事ならしめたので、我が國の任務は愈〻重大化して來た。

文藝・科學は前期から引續いて、間斷なく進步發展し、科學の應用もまた大規模となつて來た。

第十四章　歐米諸國の世界政策

列强の植民政策

㊀列强の海外發展の由來　十九世紀後半になつて、人口の激增と、製品の過剩とを調節し、同時に資源を開發する爲に、歐米の諸國は世界政策を採り、盛にアフリカ・アジヤ兩大陸及び大洋洲などに植民するやうになつた。

リヴィングストンとスタンリーとの探檢旅行

㊁アフリカの分割　十九世紀の後半にリヴィングストン（Livingstone（一八一三—一八七三））やスタンリー（Stanley（一八四一—一九〇四））等のナイル河上流地方の探檢以來、西洋諸國民はアフリカ

イギリス、エジプトを保護國とす

大陸の分奪を企てたので、今や廣漠たる地方は殆んどその植民地若しくは保護領と化した（リベリヤ・エジプトなどを除く）。

イギリス　イギリスはオランダからケープ植民地を獲てスエズ運河會社の大株主となり、エジプトの財政を監督してゐたが、アラビ＝パシャの起した内亂（一八八二）を鎮めてから、エジプトをその保護國とした。その後ケープ植民地の北方にあるオレンジ自由國（Orange Free State）とトランスヴァール共和國（Transvaal）とを征服して、イギリス領となし、やがてイギリスはこれ等の二國とナタル・ケープ植民地とを併せて南アフリカ聯邦（一九一〇）とし、總督を任命してこれを統治させた。さうして今やイギリスはカイロとケープタウンとを連結するアフリカ縱貫鐵道を殆んど完成して、偉大な勢力をこの大陸に扶植してゐる。

アフリカの沙漠

イギリスの南阿經營

以上に列記した以外の英領　ベチュアナランド・ローデシヤ・スダンの一部・ウガンダ・英領東アフリカ・英領ソマリランド・英領ガンビヤ・黃金海岸・ニジェリヤ・シエラ＝レオネなどがイギリスに屬する。

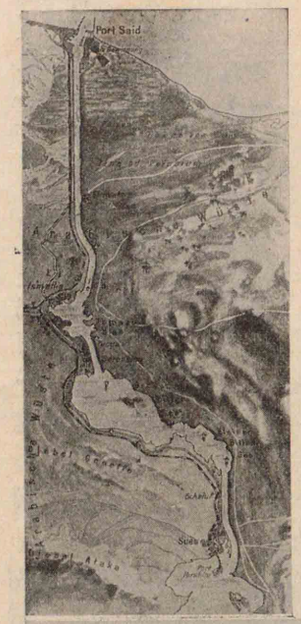
フランスのアフリカ分割

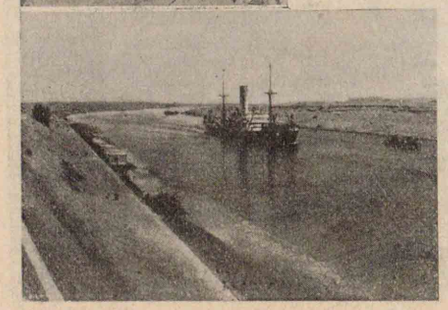
スエズ運河の開鑿　スエズ運河はフランス人レセップス（Lesseps 一八〇五—一八九四）がエジプト太守の助力の下に一八五九年四月起工し、一八六九年に竣成したもので、全長約百五十粁、東・西兩洋の交通路はこれが爲に著しく短縮された。

スエズ運河と同島瞰圖

フランス　フランスはアフリカの北岸なるアルジェリヤ（一八三〇）を領してから、隣邦チュニス（一八八一）を保護國とし、ついでサハラ沙漠（一八九六）とその以南一帯の地方とを略し、更にマダガスカル島をも併せた。

以上に列記した以外の佛領　佛領西アフリカ・佛領コンゴ・モロッコ・佛領





領ソマリランドなどがフランスに屬する。
French Somaliland

ファショダ事件　フランスはマルシャン少佐に一旦ナイル河上流の地ファショダを占領させたが、イギリスの抗議に遭つてこれを棄てた。その後モロッコ國の内亂に乘じ、フランスは兵を出してこれを鎭めた後、モロッコ國を保護國とした。
Marchand　Fashoda　一八九八　一九一二

ファショダ事件（マルシャン少佐が佛國旗をファショダに掲げる光景）

ドイツの植民地

ドイツ國旗をカメルンに掲げる光景

ドイツ　宰相ビスマルクは、植民地の獲得と經營との爲に巨費を要し、しかもこれに對應すべき利益を得ることは不可能であるといふ考から、植民政策に反對してゐたが、ドイツ帝國の創立以後、その方針を一變し、アフリカで、カメルン・トゴランド・南西アフリカ・東アフリカの四地方を得たが、植民地としては必ずしも適當してゐなかつた。
一八八四　一八八五　Kamerun　Togoland　South West Africa　East Africa

イタリヤ　イタリヤはエリトレヤ・伊領ソマリランド及びリビヤ地方を占領し、更にアビシニヤを占領せんとする計畫は失敗に終り、一九〇六年英・佛・伊三國はアビシニヤ國の獨立を承認した。ついでイタリヤはトルコと交戰してトリポリを領有した。
Eritrea　Italian Somaliland　Libya　Abyssinia　Tripoli　一九一二

白・葡・西三國　ベルギーはベルギー領コンゴーを、ポルトガルはギネヤ・葡領東アフリカ・葡領西アフリカを領し、イスパニヤはリオ=デ=オロ及びモロッコの一部を領有した。
Belgian Congo　Guinea　Portuguese East Africa　Portuguese West Africa　Rio de Oro　一九〇八

アフリカの分割圖

三　アジヤの分割　アジヤは世界中最大にして且つ最も早く文化の光彩を放つた大陸であつた。さうして我が國人を始め、印度人・支那人・

ペルシヤ人・アラビヤ人などが、或は宗教・哲學に、或は文藝・科學に、或は農業・工業に多大の貢獻をしたばかりでなく、時には彼等の勇猛にして大膽な遠征によつて、ヨーロッパの天地を震駭させたこともあつた。然るに十九世紀の中葉以來、産業革命がヨーロッパに勃發してから、最新科學の應用が各方面に行はれ、物質文明は長足の進歩發展を遂げたのにも拘らず、アジヤの大陸はかかる文明の恩澤に浴することがなかつたので、自ら落伍者となり、在來の文明は萎靡不振の悲境に陷り、やがてその大半はヨーロッパの列强國によつて分奪され、現時歐米諸强國と伍して眞に對等の地位を保持し得るものは、獨り我が帝國あるのみである。

ヴィクトリヤ女王

(a) イギリスの印度統治

イギリスはクライヴ(Clive)やヘースチングス(Hastings 一七三二—一八一八)以下歷代知事の努力で、モゴル(Moghul)帝國の衰運に乘じ、印度の大半を領し、東印度會社をしてこれを統治せし

印度土兵の一揆

印度に於けるイギリス・フランス衝突圖

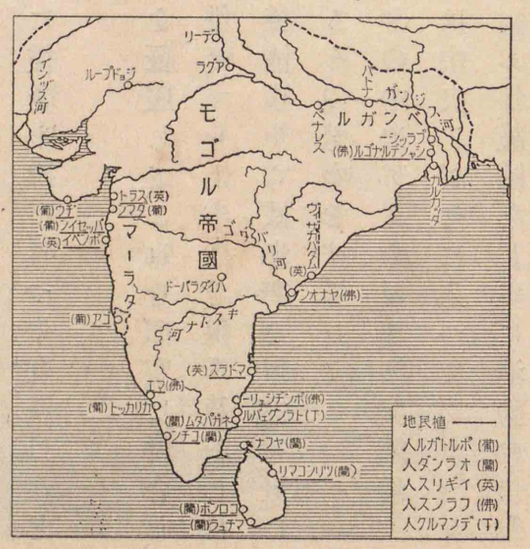
モゴル帝國の創立

イギリス・フランスの印度經營

めてゐた。しかし土兵の一揆(一八五七)を鎭めてから、イギリスはその統治權を東印度會社から政府に移した。ついでヴィクトリヤ女王は印度帝國を創め、自ら印度皇帝の位に卽き、この地方をイギリスの直轄地とした。

チムール五世の孫バベル(Baber)は、十六世紀の前半に印度國内にモゴル帝國を創め、十七世紀の後半には、一時全印度を統治してゐた。然るにその後、内にはヒンヅー教徒が叛旗を飜し、外からはペルシヤが侵して來たので次第に衰へた。

これより先、イギリス・フランスは共に東印度會社(イギリスは一六〇〇年、フランスは一六〇四年)を建て、印度貿易に從つてゐたが、やがてイギリス人はマドラス(Madras)・ボンベイ(Bombay)・カルカッタ(Calcutta)を、フランス人はポンディシェリー(Pondicherry)・シャンデルナゴル(Chandernagor)をそれぞれ根據地として、互に勢力の伸張を企てゐたが、結局はクライヴ等東印度會社員の努力でイギリスの勝利となつた。



長髪賊の亂
北京條約

ムラヴィヨフ
ロシヤの中央アジヤ經營

(b) **イギリスの南清經營**　イギリスは印度の經營がほぼその緒についてから、シンガポール(一八二四 Singapore)を購ひ、マラッカ(一八三五 Malacca)を得、阿片戰爭(一八四〇—一八四二 Opium War)で清國を破つて南京條約を締結して、清國から香港(ホンコン Hongkong)を取り、且つ五港(廣東・廈門(アモイ)・福州・寧波(ニンポー)・上海)を開かせた。清末、長髪賊の內亂に乘じ、英・佛兩國は口實を設けて清に迫り、遂に北京を陷れ、後、北京條約(一八六〇)を結んで和を講じた。その結果、清はイギリスに香港對岸の地九龍(キユールーン)を割き、兩國に償金を拂ひ、且つ牛莊(ニユーチヤン)・漢口(ハンカオ Hankau)などの七港を開くことを約した。

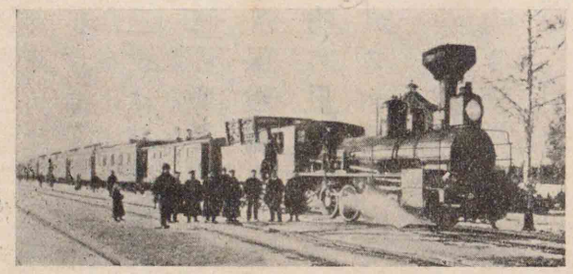
その後イギリスはパンジャプ(Punjap)地方を征服して、これを印度に併合し、ベルチスタン(Beluchistan)を保護國とし、緬甸(一八八五 Buram)を併せ、マレー半島を保護領とし、日清戰役後、清國から威海衞(一八九八)を租借し、更に西藏にもその勢力を扶植した。

(c) **ロシヤの中央アジヤ及び極東經營**　ロシヤは中央アジヤに入つて、ブカラ(一八六八 Bukhara)・キヴァ(一八七三 Khiva)の兩國を保護國とし、更に清國の伊犁(イリ Ili)

シベリヤ鐵道の郵便列車

を侵し(清國と伊犁(一八三九)、アフガニスタンに入り、イギリスと(條約を結ぶ)、アフガニスタン Afghanistan)衝突して失敗した。當時ペルシヤには君主と議會との間に紛爭絶えず、政府は弱體で腐敗し、人民は貧弱で退嬰(タイエイ)的であつたので、英・露兩國はこれに干渉して秩序を回復した後、兩國間に條約(一九〇七)を締結し、アフガニスタンを緩衝地帶とすること、ペルシヤを三分し、北部はロシヤの、南部はイギリスの勢力範圍とし、その中央を中立地帶とすることとした。

東部シベリヤの拓殖はムラヴィヨフ(Muravief(一八〇九—一八八一))の努力で大いに進展し、後、愛琿(アイグン)條約(一八五八 Aigun)で黑龍江以北の地を得、ついで北京條約の締結に斡旋した報酬として、烏蘇里(ウスリ)江(一八六〇 Ussuri)以東の地方を取り、ウラヂオストック(一八六一 Vladivostok)に築港して海軍の根據地となし、更に我が國に千島を讓つて樺太を得た。日清戰役後、ロシヤは獨・佛兩國と共に我が國に干渉し、一旦遼東半島を清國に還させ、後、その一部なる關東州を自ら



ロシヤの遼東半島租借及びその權利の讓渡

越南に於けるフランス勢力の侵入

租借した。(一八九八)さうして東清鐵道を敷設してシベリヤ鐵道と連絡を保ち、滿洲を露化することに努めたが、日露戰役の失敗によつて、その租借權を我が國に讓つた。(一九〇五)その後ロシヤは蒙古と露蒙條約を結び(一九一二)、外蒙古にも保護を加へてゐる。

これ等約六百萬方哩に達する廣大な領土はレニングラードとウラヂオストックとを連絡する大鐵道網によつて統制されてゐる。

(d) **佛・獨兩國のアジヤ經營**　フランスのナポレオン三世は、越南國人が屢〻フランスの宣教師を虐待したのを憤り、(一八五九)出兵して西貢(サイゴン)を占領し、(Saigon)越南王をして交趾(コーチ)の地を割讓させ、(一八六二)且つカンボヂヤ(Cambodja)をも保護國とした。(一八六七)その後、フランスは侵略の歩を進めて、恣に東京地方に駐兵し、やがて越南軍を破り、王をして東京地方を割き、且つ越南がフランスの保護國たることを認めさせた。(一八八三)

フランスは更に支那の雲南・廣西地方にもその勢力を扶植し、日清戰役後、廣州灣を租借した。(一八九九)

ドイツの膠州灣租借

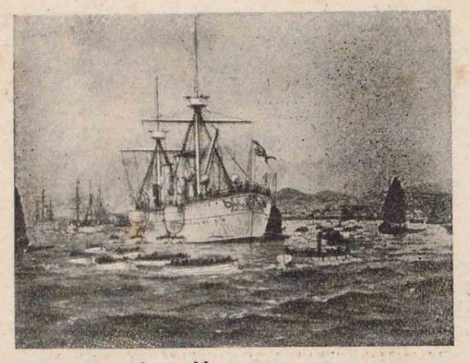
バグダード鐵道

ドイツの膠州灣占領

バグダード鐵道

フランスは現時なほ印度でポンヂシェリー・シャンデルナゴル・カリカル・マヘ・ヤナオン以下の諸地方(面積約百九十方哩、人口約二十九萬一千人)を領有してゐる。(Karikal　Mahé　Yanaon)

ドイツは膠州灣を租借して青島に海軍根據地をつくり、その勢力を支那の內地に扶植することに努めた。(一八九八)



この外ドイツは軍事上及び經濟上の理由に基づき、夙にバグダード鐵道の敷設を畫策し、(Bagdad Railway)トルコ皇帝を懷柔してその敷設權を獲得し、爾來營々としてこれが完成に邁進してゐたが、世界大戰勃發の爲に妨げられて中止し、やがて敗戰の結果、その權利をイギリスに讓渡した。

バグダード鐵道はイスタンブール(コンスタンチノープル)(Istanbul)の對岸スクタリを起點とし、タウルス山(Taurus)を越へてメソポタミヤ(Mesopotamia)の平原を貫通し、バグダードを經由してペルシヤ灣頭バスラ港(Basra)に達する大鐵道で、これが完成の曉にはペルシヤ灣との連絡は達成され、歐・亞兩大陸を貫通する最短最善の交通路となる豫定であつた。

大洋洲諸島の分割

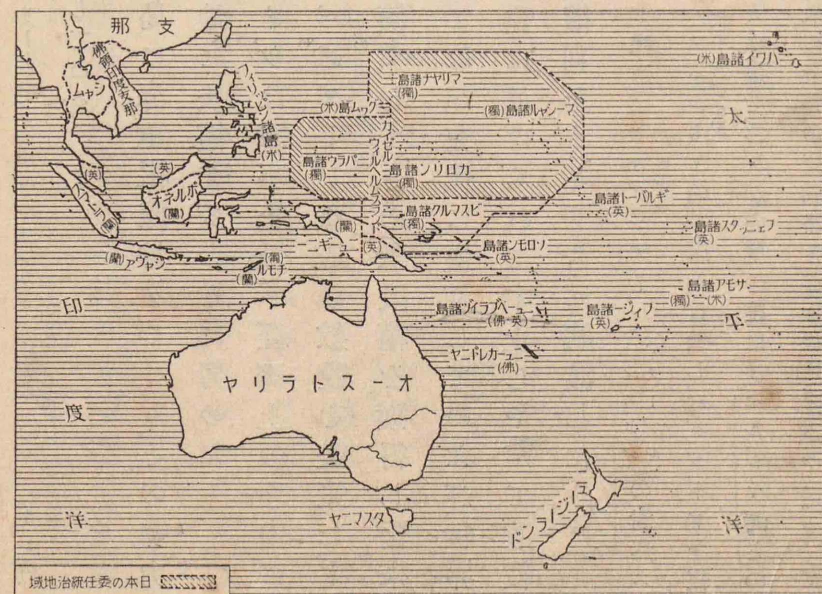
イギリスの所領

大洋洲分割圖

ドイツの所領

㈣大洋洲の分割　イギリスのオーストラリヤに於ける植民は十九世紀の中葉以來著しく發展し、(一九〇一)オーストラリヤ聯邦(The Commonwealth of Australia)を組織したので、全島の統制が强化されるやうになつた。その外ニュージーランド(New Zealand)、フィジー(Fiji)の全部と、ニューギニー(New Guinea)とボルネオ(Borneo)の一部とを領してゐる。

ドイツは(一八八四)カイゼル＝ウィルヘルムスランド(Kaiser Wilhelmsland)・ビスマルク諸島・マーシャル(Marshall)諸島を有し、マリヤナ(Mariana)・カロリン(Calorine)・パラウ(Palau)の三諸島をイスパニヤから購入し、なほ(一八九九)サモア(Samoa)諸島の一部をも取つた。



フランス・オランダの所領

米西戰爭

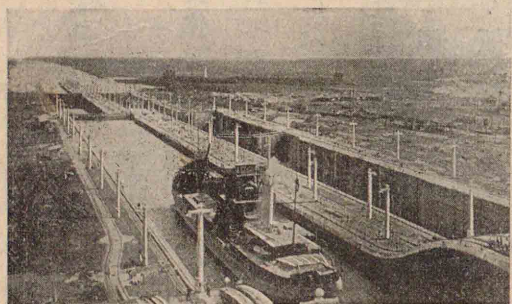
パナマ運河

パナマ運河の開鑿

さうしてフランスはニューカレドニヤ(New Caledonia)の一部を、オランダはニューギニー及びボルネオの一部を領してゐる。

㈤アメリカ合衆國の太平洋進出　合衆國は早くからモンロー主義を唱へて來たが、殖産興業の發展に伴なふ過剩な製品を賣却すべき新市場を求める爲に、帝國主義を採用して太平洋進出を企てた。卽ち(一八六七)アラスカ(Alaska)(面積約五七三四〇方哩)をロシヤから購ひ、(一八九八)ハワイ(Hawaii)の革命に干渉してこれを併合し、更にサモア諸島の一部を領有した。ついでイスパニヤ領のキューバ島とフィリッピン諸島との住民が(一八九八)叛亂を起したのを援け、イスパニヤ軍を破つて講和した。さうして合衆國は(一八九八)キューバ島を保護國とし、ポルト＝リコ(Porto Rico)島・フィリッピン諸島とグヮム(Guam)島とを併合した。

その後、大統領ルーズヴェルト(Roosevelt)(一九〇一―一九〇九)は大いに軍備を擴張し、更に巨費を投じて(一九〇七―一九一四)パナマ運河(Panama Canal)を開き、また優

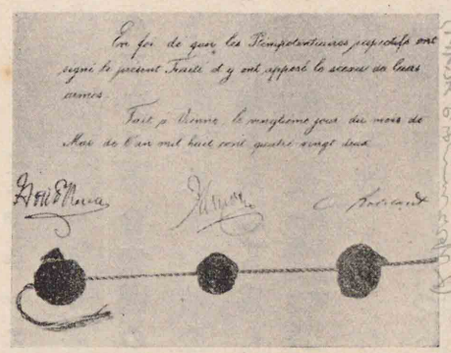


勢な艦隊を以て太平洋を威壓しようとした。

第十五章　世界大戰

(a) 大戰前に於けるヨーロッパ國際關係の變化

㊀ 三國同盟と二國同盟　獨帝ウィリヤム一世は墺(フランシス)・露(アレクサンドル二世)と二帝同盟(一八七二)を組織し、フランスに備へてゐた。然るにベルリン會議以後、獨・露の關係は大いに疎隔したので、ビスマルクは巧にイタリヤを招き、遂に獨・墺・伊三國間に三國同盟(Triple Alliance)を結んだ。そこで暫く孤立してゐたフランスは、ロシヤと二國同盟(Dual Alliance)(一八九一頃)を結んでドイツに對抗した。これ等の兩同盟はいづれも防禦的で、爾後二十餘年間歐洲列强間の勢力均衡を保つ上に役立つた。



三國同盟と二國同盟

三國同盟條約の文書—三國の調印

*明治十五年、伊藤博文が歐洲文遣はされ、朝鮮の京城の變

㊁ イギリスと三國協商　イギリスは「光榮ある孤立」(Splendid Isolation)を誇り、單獨でこれ等の兩同盟に對抗してゐたが、しかし萬一に備へる爲、各國は軍備の充實と擴張とに努め、殊に前後二回の萬國平和會議(一八九九・一九〇七)が失敗に終つてからは、その傾向が著しくなつた。

萬國平和會議の失敗

第二回萬國平和會議のポスター

然るにドイツ皇帝ウィリヤム二世の指揮の下に、勇猛果敢に斷行された海・陸軍備の大擴張と國力の異常な發展とは、國際關係に多大の衝動を與へ、三國同盟の存續は却つてヨーロッパの均勢を破るやうになつた。英王エドワード七世(Edward VII.)はかかる國際關係の變動に對して憂慮する餘り、遂に「光榮ある孤立」の主義を棄てて、遠くは我が國と日英同盟を結び(一九〇二)、近くは佛・露兩國と所謂三國協商(Triple Entente)を約して(一九〇六—一九〇七)、ドイツに對抗すべき準備を整へた。

エドワード七世

日英同盟

三國協商

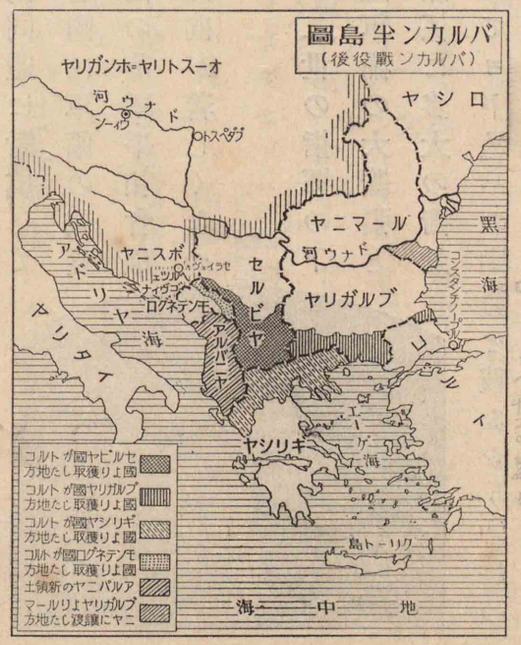
伊土戰役

バルカン戰役

㊁ 墺・伊兩國とバルカン半島

オーストリヤはその勢力をバルカン半島に扶植する爲に、ドイツの後援の下に、ロシヤの反對を押へて、ボスニヤ・ヘルツェゴヴィナ二州を併合した。(一九〇八 Bosnia Herzegovina) イタリヤはこれを見て大いに憤り、突然トルコに對してトリポリの讓渡を要求したが、容れられなかつたので宣戰した(一九一一—一九一二 伊土戰役)。さうしてイタリヤはトルコ軍を粉碎した後、トリポリを獲得して講和した。(一九一二)

バルカン半島内のブルガリヤ・セルビヤ・ギリシヤ・モンテネグロの四國はトルコの衰運に乘じ、各〻その領域を擴張しようと思ひ、先に暴動を起したマケドニヤ・アルバニヤを援けてトルコに宣戰した(一九一二—一九一三 バルカン戰役)。この役、



世界大戰の三遠因

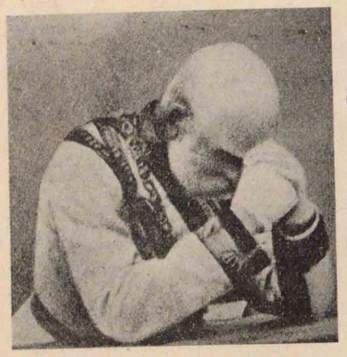
憂愁に沈む大戰當時のオーストリヤ皇帝

世界大戰の近因

四國の聯合軍は到る所に勝つたので、トルコは遂に屈してロンドン條約を結び、廣大な土地の割讓を約束して講和した。爾後汎スラヴ主義(諸國に散在せるスラヴ民族を統一し、ロシヤの指導の下に大帝國を創立しようとする主義 Pan Slavism)と汎ゲルマニヤ主義(ドイツ主宰の下に各地のゲルマニヤ民族を統括して大帝國創設しようとする主義 Pan Germanism)とが、スラヴ・ゲルマニヤ兩民族の雜居せるバルカン半島内で相對立抗爭し、不安陰慘な空氣が漸く濃厚となつて來た。

(b) 世界大戰

㊀ 世界大戰の原因　前に述べたやうに、(一)英・獨兩國の利害關係の衝突と、(二)バルカン半島に於ける汎スラヴ主義と汎ゲルマニヤ主義との衝突と、(三)プロシヤ=フランス戰役以來、獨・佛兩國間に釀されてゐた反目敵視の念とを遠因とし、オーストリヤの皇儲(クワウチヨ)夫妻がセルビヤで暗殺されたのを動機として本戰役は起つた。(一九一四、六月)



オーストリヤは皇儲の暗殺に憤激して、極めて強硬な最後通牒を送つたが、セルビヤがこれ

世界大戰の勃發

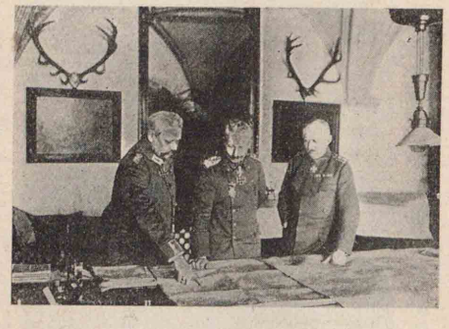
を容れなかつたのを理由として宣戰した。(一九一四、七月)ついでドイツはオーストリヤを援けて露・佛兩國に宣戰し、イギリスはドイツがベルギーの中立を侵したことを責めて奮起し、我が國は日英同盟の誼を重んじて宣戰し、(一九一四)イタリヤ・ルーマニヤ・ポルトガル・(一九一七)アメリカ合衆國・ブラジル・支那などの諸國もまた相前後して聯合軍に參加し、(一九一四)トルコ・(一九一五)ブルガリヤなどは同盟側に加はつて、ここに空前の世界大戰役となつた。

(二)戰況と講和　大戰は四年半に亙り、(一九一四—一九一八)獨・墺を中心として東・西兩國境方面・バルカン半島方面・北部イタリヤ方面に展開して勇猛に行はれたが、結局持久戰と化したので、獨・墺側は大いに窮し、西方戰場で行はれた最後の大攻擊が失敗に終つてから總崩れとなり、(一九一八)ブルガリヤ・トルコはまづ休戰し、ついで獨・墺兩國內には革命が勃發し、(一九一八)いづれも皇帝を廢して共和國を立てた。さうしてドイツ新政府は聯合國側の提示した休戰條約を承認して戰鬪を終結し、(一九一八、十一月)關係諸國との間にヴェルサイユで講和條約を結び、(一九一九、九月)オーストリヤ・(一九一九、六月)ブルガリヤ・(一九一九、十一月)ハンガリヤ・(一九二〇、六月)トルコ

マルヌ會戰
塹壕戰
東プロシヤの戰況
ワルソーの陷落
ドイツ大本營に於けるウィリヤム二世(中央)とヒンデンブルグ元帥(左)
セルビヤ全土の征服
ルーマニヤの大敗

の四國もそれ〴〵和議を締結した。

東・西兩方面の戰況　ドイツ軍はまづ優勢な大軍を以てベルギーを經て、パリーに肉薄しようとしたが、(一九一四、九月)マルヌ河畔(Marne)の戰に敗れ、爾後兩軍は塹壕をつくつて持久的に對陣することとなつた。

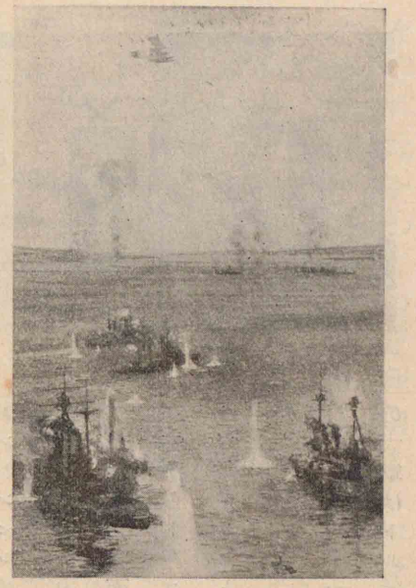


ドイツでは新司令官ヒンデンブルグ(Hindenburg)將軍が東プロシヤに侵入したロシヤ軍をタンネンベルグ(Tannenberg)で粉碎し、更にポーランドに入り、(一九一五、八月)首府ワルソーを陷れて東進した。

バルカン方面の戰況　英・佛の聯合艦隊は、ダーダネルス(Dardanelles)海峽からトルコを攻めたが失敗した。(一九一五、十一月)さうして獨・墺の大軍はブルガリヤと策應し、セルビヤを挾み擊つてその全土を略した。

その後、ルーマニヤがオーストリヤに宣戰したので、(一九一五)獨・墺の大軍はトルコ・ブルガリヤ軍と力を協せて、ルーマニヤの

ダーダネルス海峡の海戰
ドイツ海外植民地の喪失
ヴェルダン要塞戰
毒瓦斯戰



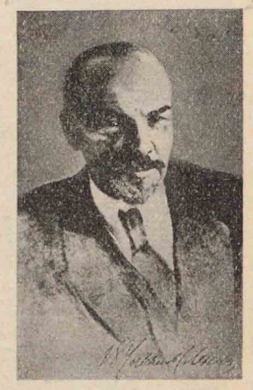
國に轉送した。加之ドイツの海外貿易を遮斷し、その海外植民地の全部を奪取する上にも多大の效果を齎した（卽ちアフリカにあるものは主としてイギリス、また太平洋にあるものは日・英兩國軍の爲に占領された）。

ヴェルダン要塞戰　獨帝は戰爭の前途を憂ひ、ヴェルダン要塞に强襲を加へて戰局の大勢を制しようとしたが、要塞司令官ペタン(Petain 一八五六生)將軍の沈勇と將卒の猛烈な反擊とによつて失敗した。

一九一六、十二月ブカレストBucharestを陷れ、その國土の大半を占領した。

イギリス海軍の威力とドイツ海外植民地の奪取　イギリスの優勢な海軍力は絶大な威力を發揮し、ドイツの艦隊を閉塞して、イギリスの沿岸襲擊を不可能ならしめ、英領植民地から多數の軍兵を戰場に輸送し、或は軍需品を聯合側の諸

ロマノフ朝の滅亡
レニン
ブレスト＝リトウスク條約
イタリヤ軍の進擊
聯合軍の總攻擊

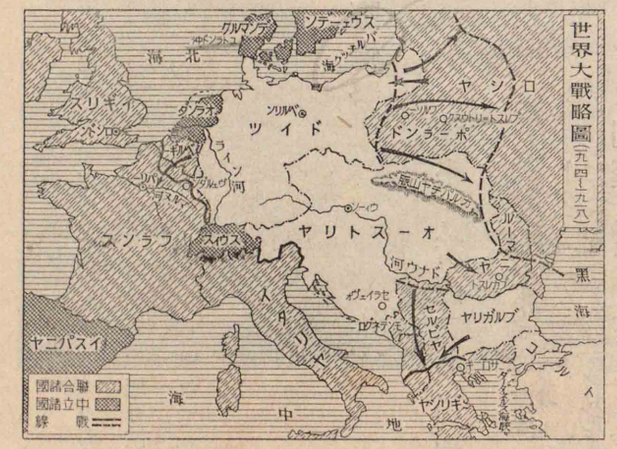


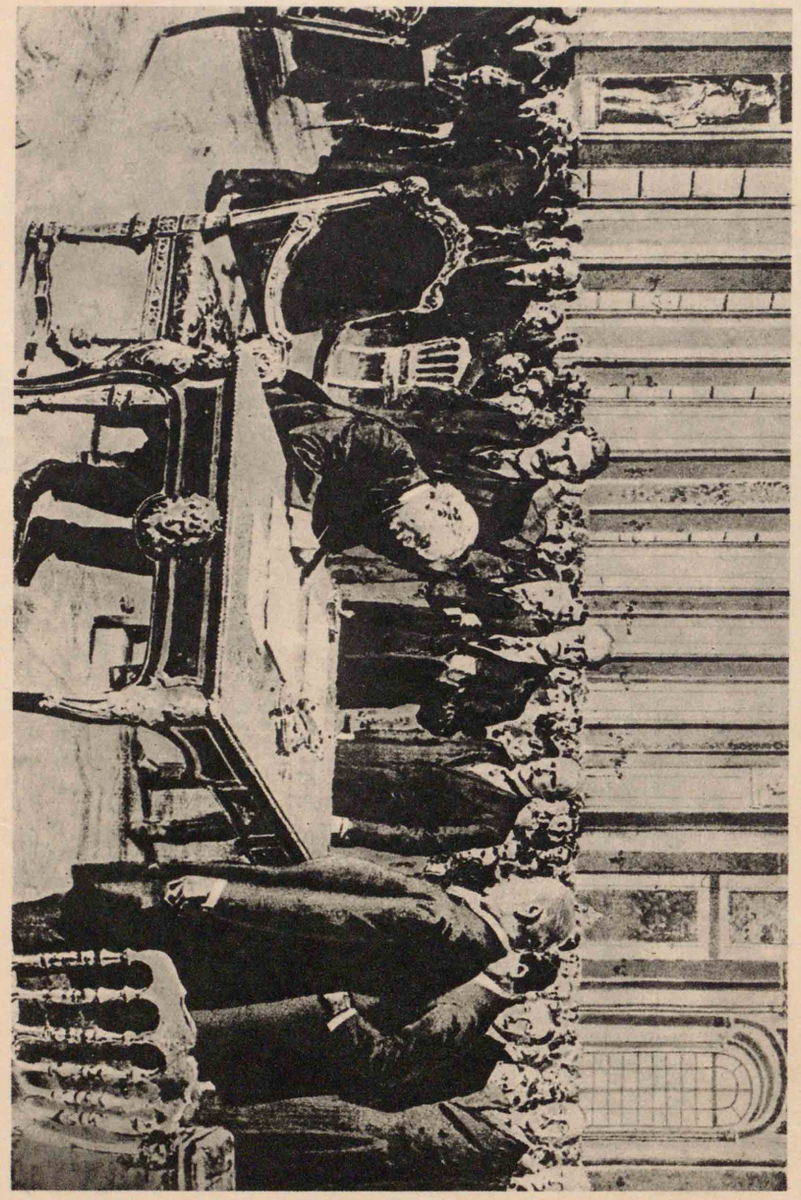
ヴィエト政府は單獨でドイツとブレスト＝リトウスクBrest Litovskで講和し、聯合側から脫退した。

イタリヤ方面の戰況　伊軍は北部イタリヤで墺軍と對峙してゐたが、獨軍が西部戰線で大攻擊戰を開始した機に乘じて墺軍を擊ち破り、遂に休戰條約を結ばせた。

西方に於ける聯合軍の大攻擊　ドイツは大々的に準備した後、西方戰場で最後の大攻擊を行つたが、聯合軍の總司令官フォッシュ(Foch 一八五一—一九二九)元帥の猛烈な反擊に遭つて、遂に總崩れになつて潰えた。聯合軍はその後を追擊しつつ攻勢に轉じ、次第

ロシヤの革命と單獨講和　ロシヤは宣戰後、大敗を重ねたので、勞働者農民などは憤起してこれを責め、軍隊と力を協せて革命を起し、一九一七、三月ニコラス二世を廢してロマノフ朝を倒した。ついでレニン(Lenin 一八七〇—一九二四)・トロツキー(Trotsky)等の建てたソ





景光の名署約條和講獨對るけ於にユイサルェヴ

に被征服地を奪回した。

ドイツ・オーストリヤの革命　獨軍の敗退は各方面に多大の影響を與へ、ブルガリヤ・トルコはまづ休戰し、セルビヤはその國土を復した。ついで獨墺兩國内に革命が起り、いづれも皇帝を廢して民主的の共和國を建て、ホンガリヤはオーストリヤから離れて獨立した。

ドイツ・オーストリヤ兩共和國の成立

第十六章　大戰後に於ける國際情勢

ドイツ

一　世界の改造　大戰後の世界は敗戰國の領土縮小と新國家の出現とによつて、戰前に比して非常に變化した。

ドイツはエルザス(アルサス)・ロートリンゲン(ローレン)をフランスに、西プロシヤ(West Prussia)以下二三の地方をポーランドに割讓し、ベルギーとデンマルクとにも各〻若干の土地を與へ、海外の領土と、租借地の全部とを失ひ、陸・海軍はその兵數を制限され、且つ巨額の償金を支辨することとなつた。

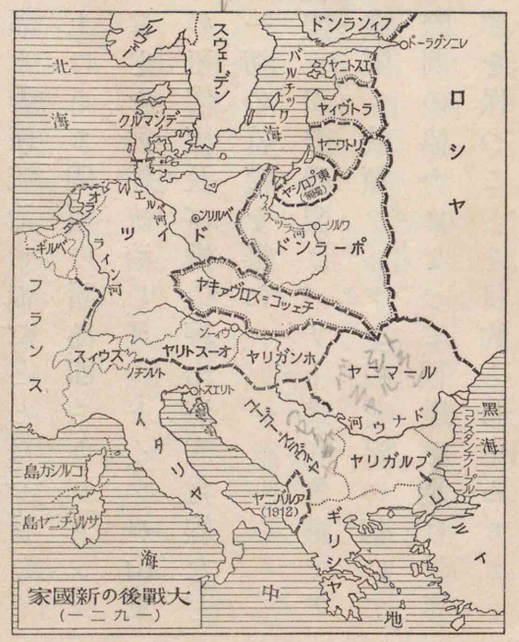
本圖は一九一九年六月二十八日ヴェルサイユ宮殿鏡の間に於て對獨講和條約に署名する光景を寫したものである。條約の正文は都合四通で、鏡の間の中央部に設けられた二箇の机の上に二通宛置かれてある。中央の椅子に着し極めて謹嚴な態度でペンを取つて條約文に署名しつつあるのは、英の首相ロイド＝ジョージで、順次署名する爲に机の前に列立せるは英の代表委員ボナー＝ロー・バルフォーア・ミルナー卿・ヒューズ及びボタ・スマツ兩將軍である
Lord Milner Hughes General Botha General Smuts Bonar Law Balfour Lloyd George

オーストリヤ
ホンガリヤ
イタリヤ
トルコ
新興の七國

オーストリヤは僅かに舊領の三分の一を領有する海口を持たない小共和國となり、ホンガリヤは分離獨立し、殘餘の地方は新興の諸國に分割された。

イタリヤは多年の宿望たるトレンチノ（Trentino）・トリエスト（Triest）以下の土地を回復し、トルコはコンスタンチノープル附近の一小地域と小アジヤ半島とを領して、その他の土地を失つた。

次に民族自決主義に基いて、新たにポーランド（舊ロシヤ・ドイツ・オーストリヤ領の一部を含む）・チエッコ＝スロヴァキヤ（Czechoslovakia）（舊オーストリヤ＝ホンガリヤの一部、即ちボヘミヤ・モラヴィヤ・シレシヤ及びスロヴァキヤを含む）・ユーゴー＝スラヴィヤ（Jugo-Slavia）（舊セルビヤ及びモンテネグロの全土、並びに舊オーストリヤ領の一部をも含む）・フィンランド（Finland）（舊ロシヤ領）・エストニヤ（Esthonia）（舊ロシヤ領）・ラトヴィヤ（Latvia）（舊ロシヤ領）・リトワニヤ（Lithuania）（舊ロシヤ領）などの諸國が創立された。



イギリスの委任統治地方

フランスの委任統治地方

我が國の委任統治と膠州灣租借權の獲得

ウィルソン

イギリスは名義上エジプトを保護國とし、パレスチナ・メソポタミヤ、アフリカにあつた獨領東アフリカの大部分（ケニヤ植民地）、カメルン及びトゴランドの一部を委任統治し、南アフリカ聯邦は獨領南西アフリカを、オーストラリヤ聯邦は獨領ニューギニー及び赤道以南の太平洋上に於ける獨領の諸島（サモア島を除く）を委任統治し、フランスはシリヤ及び獨領カメルン・トゴランドの大部を委任統治することとなつた。

我が國は赤道以北の太平洋上にある獨領の諸島、卽ちカロリン・マリヤナ（ラドロン）・マーシャル諸島などを委任統治し、且つドイツが山東半島に於て有してゐた膠州灣の租借權及び鐵道・鑛山・海底電線などに關する一切の特權を得た。

㈡國際聯盟　國際聯盟はパリー講和會議でアメリカ合衆國大統領ウィルソンの首唱に基いて（一九二一―一九二一）成立し、國際間の協力によつて、戰爭を避け世界の平和安寧を保つことを目的としてゐる。さう

フィウメの所屬問題

ケマル＝パシャ

ケマル＝パシャの奮起とローザンヌ條約

して英・佛・伊を始め、世界に於ける大小五十餘國はこれに加入してゐるが、アメリカ合衆國は最初から加盟してゐない。我が國は初め聯盟理事國として活動してゐたが、滿洲國承認問題に關し、聯盟と意見を異にしたので、遂に一九三三年脫退を通告した。

㈢條約實施上の紛爭　講和成立後、イタリヤはアドリヤ海に乘り出し、フィウメ（Fiume）を占領してユーゴースラヴィヤと紛擾を釀したが、兩國の協定に基いてイタリヤがこれを併せた。（一九二四）

トルコでは國民黨の領袖ケマル＝パシャ（Kemal Pasha）が講和條約の實行を拒み、アンゴラ（Angora）に據つて奮起し、ついで兵を出してギリシヤ軍を破つた（一九二二）後に休戰し、關係諸國とローザンヌ條約（一九二三、七月 Lausanne）を結んだ。この條約で、先の講和條約に修正を加へ、トルコはややその境域を擴張し、領土的にも民族的にも統一した新國家を建てることが出來た。

トルコ共和國の成立

ルール問題とドーズ案の成立

フランス・ベルギー聯合軍のルール撤退

ロカルノ會議

ドイツの賠償問題

トルコの政府は[illegible]容れ、帝政を廢して共和政體とした。ついでケマルが大統領に當選して、回教教主を廢し、鋭意政治の改善と國力の回復に努めてゐる。

㊃ドイツの賠償問題とロカルノ條約　ドイツは財政困難の爲に、賠償金（我が六百六十億圓餘）支拂の猶豫を懇請した。佛・白兩國はその不誠意を責め、一九二三、一月ドイツ工業の中心地であるルール地方をRuhrを軍事的に占領した。英・米兩國はこれを遺憾とし、佛・伊・白の諸國と一九二四ロンドンでドーズ案Dawes Planに基いた賠償金支拂法を協定し、ドイツを一九二五してこれを採用させた。そこで佛・白の聯合軍はルールを撤退して、これをドイツに還した。これからドイツは賠償金を拂つてゐたが、一九二九ヤング案Young Planの成立により、更にその賠償額は著しく輕減された。

ドイツは一九三三ローザンヌ賠償會議の結果、賠償金の代

ドイツの國際聯盟加入

ハーヂング

ワシントンの軍縮會議

*但しドイツは一九二六年ロカルノ條約を破棄したと宣言

*但しドイツは一九三三年脱退したと通告

りに「ヨーロッパ復興資金への獻金」の名義を以て總額三十億マルクを支拂ふこととなつた。然るに關係諸國が各自の債權國なるアメリカ合衆國と、その債務につき滿足な協定に到達しなかつたので、結局この協定は無效となつた。

なほ英・佛・白・伊・獨・ポーランドの諸國は一九二五ロカルノ（スウイス國にある）Locarnoで會議を開いて、互に國境の安全を保障し、一切の紛爭を平和的に解決することを約束した。さうしてドイツもまた列國の承認を得て國際聯盟に加入したので、本條約もその效力を發生することとなつた。

㊄ワシントン及びロンドン軍縮會議　大戰後、各國共に國民の負擔を輕くする爲に、軍備縮小熱が昂まつて來た。そこでアメリカ合衆國の大統領一九二一—一九二三ハーヂングHardingは日・英・佛等の諸國と交渉して、軍縮會議を一九二一、十一月ワシントンに開き、更に白・蘭・葡・支の四國をも加へて、太平洋及び極東問題を協議した。その結果英・米・日・佛・伊の五國は十ヶ年の間主力艦建造の比率を五、五、三、一・七五、一・七五

太平洋問題に關する四國協約

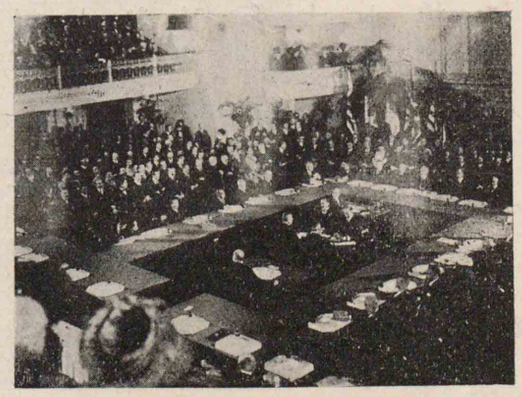
九ヶ國條約

ワシントン會議

ロンドン軍縮會議

に協定した（補助艦・巡洋艦・驅逐艦・潛水艦と陸軍兵力との制限については異論があり、遂に協定を見なかつた）。次に日・英・佛・米の四國は十ヶ年間四國協約を結んで、太平洋上の平和と現狀維持とを確保し、且つ太平洋上の島嶼である屬地及び領地に關する各自の權利を保つことを約し、同時に日英同盟の廢棄を公にした。（一九二一）さうして支那に對しては前記九國の間に條約を結んで、支那の主權獨立及び領土保全と門戸の開放（Open-door Policy）とを尊重することを約した。

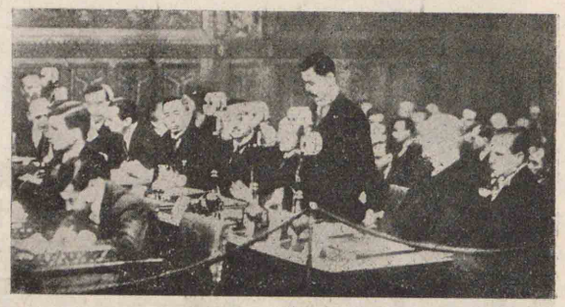
その後、日・英・米の三國はジュネーヴで第二回軍縮會議を催したが、不調に終つたので、更に日・英・米・佛・獨等の十五ヶ國間に不戰條約を締結して、世界の平和を促進することとなつた。（一九二八）その上ロンドンで日・英・米・佛・伊五ヶ國間に第三回の軍縮會議が開かれたが、結局補助艦の保有量制限に關して、日・英・米三國間に實質的の協定を見たに過ぎなかつた。（一九三〇、一月―四月）



ロンドン會議

起立してゐるのは我が首席全權若槻禮次郎である。

ドイツ再軍備の宣言



ジュネーヴ一般軍縮會議　その後ジュネーヴ一般軍縮會議が開かれ、ドイツの要求せる軍備平等權確保の主張について審議を重ねたが、議論が紛糾してまとまらなかつたので、ドイツは遂に軍縮會議と國際聯盟とを脫退した。（一九三三、十月）さうして精神的にヴェルサイユ條約によつて課せられた諸拘束を離脫し、陸・海軍の制限を破棄して自由に行動すべき意志を暗示した。

かやうにして軍縮會議は停頓の狀態に陷つたので、更にロンドンで日・英・米・佛四國の間に軍縮豫備會議が開かれたが、結局不成功に終つたので、我が國は我が國防の恒久的安全を確保する爲に、ワシントン條約の廢棄を正式に關係諸國に通告して、その拘束を離脫することとした。

かかる際にドイツが突如として再軍備を宣言し、陸・海・空軍の再建（一九三五）充實に着手したのと、ロンドンで開かれた軍縮會議が不調に終つて、

ジョージ六世とエリザベス皇后

我が國が脱退したのとで軍縮の實現は愈〻困難となつた。さうして列國は國際情勢の不安に對處する爲に、今や軍備の大擴張とその充實とに邁進することとなつた。

第十七章　列國の現勢

ジョージ五世とメリー皇后

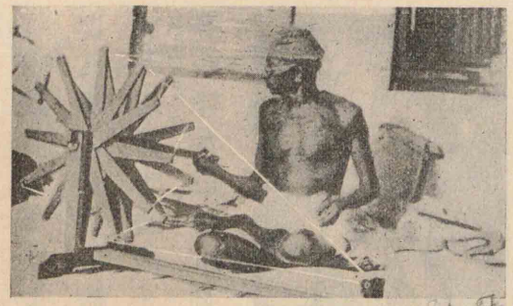
一　イギリス　エドワード七世の歿後に卽位したジョージ五世（George V.）は五大洲に跨つてゐる廣大な大帝國（面積約三千五百萬平方粁で、イギリス本國の百十九倍）の元首として君臨し、在位二十五年間個人の自由と議會政治とを尊重し、且つ領土の平和を念として勵精治を圖り、國運の發展に全力を傾倒し、偉大な功績を擧げた。次王エドワード八世（一九三六、一月―十二月）の後を繼承したジョージ六世（一九三六）もまた同一方針を踏襲し、鋭意大英帝國の尊嚴を保ちつつ、全領土の統治に邁進し

ジョージ六世はジョージ五世の第二皇子で、一八九五年十二月十四日誕生され、ヨーク公アルバート親王と稱した。さうして一九二三年四月七日ストラトモア伯爵の姫君エリザベスと結婚された。然るにジョージ五世の後を繼承された兄エドワード八世が、一身上の都合で、一九三六年十二月王位を辭退されたので、ヨーク公並にエリザベス夫人は、その後を繼承して國王ジョージ六世、皇后エリザベスと稱へられた。さうして一九三七年五月十二日ウェストミンスター寺院内で、いとも莊重嚴肅な古式によつて戴冠式が擧行されたのは我等の記憶に新たなところである。

(ourselves along)
de Valera

海外自治領の地位

印度反英運動の領袖ガンヂー



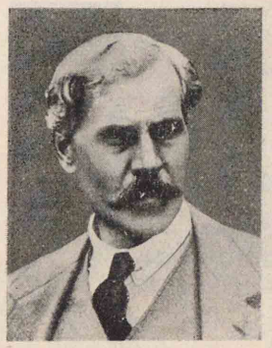
ガンヂー

てゐる。大戰後民族主義が盛になつた爲に、アイルランド（アルスター地方を除く）が一九二一アイルランド自由國として、イギリス帝國の自治領たること、エジプトが一九二三名義上の獨立國であることをも認めた。その上、自治領の發達と有色人種の覺醒とによつて、海外の領土は自主的に傾き、自治領は母國に忠誠を誓ひ、國王を敬愛するも、もはやその植民地ではなく、本國と平等の位置に立つこととなつた。中でも印度の各方面では完全な自治權を得ようとしてガンヂー（Gandhi）一派の者は猛烈な運動を開始したので、政府はロンドンで數次英印會議を開催してその方針を決定し、聯邦組織の新憲法を制定して徐々に國民多年の希望を達成せんとしてゐる。

ガンヂーは南阿戰役には約一千名の印度人を以て印度野戰病院隊を編成し、戰場を馳驅し、また世界大戰中は印度總督を助けて、壯丁の徵發、軍備の調達などに獻身的に努

力して多大の貢獻をした。大戰後英政府の印度に對する態度に不滿を抱き「印度人の印度」を唱へて印度の自治獨立の達成に邁進し、これが實現の一手段として消極的の抵抗 Passive Resistance 主義（斷食・店舗の閉鎖・英貨排斥等）を斷行し、政府の反省を促し、徐々にその目的の貫徹に努めてゐる。體軀は倭小であるが、意志の極めて鞏固な人格者であるので、今なほ「聖雄ガンヂー」と稱されて民衆景仰の標的となつてゐる。

マクドナルド



内政方面では、世界的の不況によつて發生した失業者と、物價の騰貴に基いた生活難の問題とに惱まされてゐたので、勞働黨領袖マクドナルド MacDonald は前後三回（一九二四―一九二九）勞働黨内閣と（一九三一―一九三五）協力内閣 National Coalition Cabinet とを組織してこれが救濟に努力した。即ち彼はまづ（一九三一、九月）金本位制を停止し、ついで保護貿易主義を採用して諸外國品に對し、輸入稅を徵收して相當な效果を收め、また失業者を激減することが出來た。しかしロンドンで開かれた世界經濟會議 World Economic Conference（一九三三、六月）と（一九三四）軍縮豫備會議とは共に失敗に終り、大英帝國の世界的優勢の地位は漸く動搖を始め、ヒッ

マクドナルド内閣の總辭職

トラーやムソリーニの突飛な外交政策を掣肘することが困難となつて來たので、彼はジョージ五世即位二十五年の祝典を無事に終了した機會に（一九三五、六月）總辭職を行ひ、保守黨の領袖ボールドウィン Baldwin（一九三五）とチェンバレン Chamberlain（一九三七、五月）とがこれに代つて相前後して内閣を組織した。さうして低金利政策と保護關稅の實施とによつて國内産業の發展を圖り、同時に大規模な再軍備計畫の完成を急ぎ、ヨーロッパ大陸に於ける國際情勢紛糾の擴大を防止し、世界平和の擁護促進に邁進してゐる。

フランスの議會政治

㈡ フランス　フランスは民主主義・共和政體創成の國であるから、飽くまで議會萬能の共和政治を固持して、專制獨裁政治を排斥してゐる。從つて議會では小黨分立して相爭ふこと多く、政局は屢〻安定を缺いてゐる。しかし國家非常時には、擧國一致内閣が出現して難局の打開に邁進してゐる。

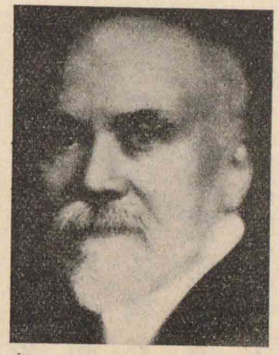
由來フランスは農業國で、土地は小農に分割保持され、社會組織は健全で、食糧は自給自足の狀態である。その上、大戰後交通機關の發達、

工場設備の改善、鐵・石炭その他の原料の豐富、優良な工藝學校の創設などにより、化學・織物・冶金工業は著しく發達して工業國の觀を呈するに至つた。

ポアンカレー

フランスの工業發達

かの英邁なポアンカレー(Poincaré)(一八六〇—一九三四)が舉國一致(一九二六)內閣を組織してから、內閣は數次交迭したが、その間一方には增稅と行政整理とを斷行して幣價の安定を圖り、他方には工業の發展を促進することによつて大戰で破壞された經濟組織を再建することに成功した。これからフランスは內には軍備を充實すると同時に、國際的にはイギリスと親しみ、イタリヤとは不卽不離の關係を保ちつつ、ソヴィエト=ロシヤ(ソヴィエト)・チェッコ=スロヴァキヤと同盟を結んでドイツに對抗し、オーストリヤの獨立を擁護してゐる。最近ドイツのヒットラー(Hitler)が突如(一九三五)再軍備を宣言してから、對獨不安の情は再び濃厚となり、その上、海外貿易の不振と金貨の流出とに促されて經濟界は再び動搖



經濟組織の再建

フランスの平價切下斷行

を來たした。そこで、ブルム(Blum)內閣はこれが對策に腐心した結果、遂に金本位を停止し、フランの平價切下を斷行(一九三六、九月)したので、所謂金「ブロック」は崩壞することとなつた。(一九三六—一九三七、六月)

(三)ドイツ

ヒンデンブルグ

帝政の崩壞後、聯邦內には多數の共和國が出來たが、やがてワイマール(Weimar)の議會で新憲法(一九一九、二月)が制定され、ドイツは大小十八州より成る民主的な共和聯邦國となつた。さうして社會黨の領袖エーベルト(Ebert)(一九一九—一九二五)が第一回の大統領となり、敗戰後に於ける再建事業に當つて多大の貢獻をしたが、不幸にも病歿(一九二五)したので、大戰以來國民崇敬の標的であつたヒンデンブルグ元帥が、第二回の大統領に選ばれた。(一九二五—一九三四)

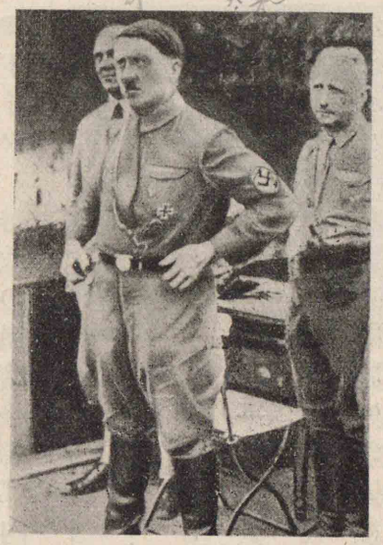
ヒンデンブルグの政治

彼は就任後ストレーゼマン(Stresemann)(一九二三—一九二九)を信任し、その穩健着實な外交工作によつてドーズ案とヤング案とを承認して償金の支拂を約束し、ついでロカルノ條約に調印し、更に國際聯盟に加入して、國際情勢を圓滑

にした。加之、金準備の新貨幣を發行して通貨の安定を圖り、經濟界の危機を打開し、財政の破綻をも防止することに成功し、國運の挽回にも貢獻した。

ヒットラーの政治

國粹社會黨の領袖ヒットラーが内閣を組織してから、夙に國民精神の作興を強調し、民族主義に基づく新ドイツ國家の建設を目標として邁進し、まづ憲法を停止して獨裁政治を行ひ、中央集權制を確立して地方行政及び警察制度に改良を加へ、新たに宣傳省を設けて輿論の啓發に努め、同時に共産黨・社會黨及びユダヤ人に彈壓を加へ、自黨以外の各政黨に解散を命じて一國一黨主義を貫徹した。ヒンデンブルグの歿後ヒットラー自ら大統領の職務を兼攝して指導者兼宰相と稱し、反對者を一掃したので、政府の基礎は



ヒットラー

安定を加へるに至つた。さうして突如再軍備を宣言して陸・海・空軍の再建充實を企て、ロカルノ條約を破棄して恣に大軍をライン非武裝地帶に入れ、要塞の構築を斷行し、更にドイツ國内を貫流する國際河川（ライン・ダニューブ・エルベ・オーデル各河川及びキール運河を含む）に關するヴェルサイユ條約の廢棄を通告し、その上各種工業の原料資源獲得の必要上、舊植民地の返還を唱へて國の内外に多大の衝動を與へてゐる。彼は共産主義撲滅の必要を痛感し、或は日獨防共協定を締結し、或はイスパニヤの反政府軍を援けて、その目的の達成に邁進してゐる。

再軍備の宣言（一九三五）

日獨防共協定調印（一九三六）

日獨防共協定の締結（一九三六、十一月）

日獨防共協定（一九三六、十二月）

日獨防共協定はこれによつて共産インターナショナル卽ちコミンテルンの赤化革命工作を防遏し、共産主義の運動を排擊し、以て東亞の安泰を保持すると同時に、世界の平

和を增進せんが爲、締結されたものである。

四　イタリヤ　土地は豐沃で、農產物を多量に產出するが、鐵・石炭・石油の缺乏と財政の困難とで、大戰後の產業は發達せず、職工は各所で同盟罷業を斷行して、勞働者の思想は次第に惡化し、社會革命は將に勃發せんとするに至つた。かかる時代にファシスト(Fascist)黨の領袖ムッソリーニ(Mussolini)が宰相となり、國王ヴィクトル・エマニュエル三世(Victor Emmanuel III.)に忠誠を誓ひ、その上で議會を威嚇して獨裁權を得た。やがて土木・產業・教育を始め、各方面に有能の人材を擢用して、自由にその才幹を發揮させ、徹底的に國政の整理と淨化とを斷行して、公益の增進を圖つた。彼はイタリヤ將來の發展は一に青年の活動に待つべきを確信し、特に少年の教育を奬勵し、同時に青年團を組織して嚴肅な訓練を施してゐる。

ムッソリーニの獨裁政治

ムッソリーニ

青年團の組織

ムッソリーニは夙に產業の發達に留意し、荒蕪

地の開墾、沼澤の埋立をなして耕地の擴大を圖り、小麥・棉・煙草などの栽培を盛にして農業を勵ますと同時に、レイヨン・絹織物工業・水力電氣事業を興したので、經濟界は漸次改善された。

イタリヤの產業

外交方面ではユーゴー=スラヴィヤと協定してフィウメを占領し、ソヴィエト=ロシヤを承認して自國に必要な物資の供給を仰ぎ、ローマ法王とラテラン講和(Lateran Accord)を結び、ヴァチカン市(Vatican City)の獨立を認めて、多年の懸案を解決した。最近ドイツのオーストリヤ方面進出と再軍備の斷行とに脅かされ、英・佛兩國と協約してこれに對抗し、ついでエチオピヤ(Ethiopia)國境紛爭を利用し、英・佛の仲裁を拒んで、急遽大軍を同國に派遣した。當時エチオピヤ皇帝ハイレ=シラッシー一世(Haile Silassie I.)を始め國民の鬪志頗る堅く、國際聯盟のイタリヤに對する制裁も相當に重かつたが、ムッソリーニは毫もこれを顧慮することなく、一氣に國都アディス=アベバ(Addis Abeba)

イタリヤの外交

エチオピヤ皇帝ハイレ=シラッシー一世

英伊地中海協定の締結

新經濟組織の採用

ベバを占領して、一九三六正式にエチオピヤの併合を宣言した。

最近イタリヤは鋭意軍備の充實に努めた爲に、その優勢な空軍と潜水艦とに對し、イギリスの海軍力ではこれを制壓することは不可能となつた。從つてイギリスは本國と印度・海峽植民地・オーストラリヤ・ニュージーランドなどとの海上連絡上必要な地中海の制海權に大なる脅威を感ずるに至つた。そこで兩國は地中海協定を締結して、地中海に於ける船舶の出入及び通航の自由を確保すること、地中海に於ける領土主權の現狀を變更しないこと、地中海に於ける相互の權益を尊重することなどを約束した。一九三七、一月 Anglo-Italian Mediterranean Declaration

㊄ソヴィエト・ロシヤ　勞農政府は私有財産を沒收し、また國家が土地・産業・宗教・教育などを管理することとし、政治上・社會上・經濟上に根本的の大改革を斷行した。しかし共産主義的施設の勵行と全世界の赤化運動とは共に失敗に終つたので、政府は漸次その態度を改め、新經濟政策を施して、或程度まで土地の私有と資本主義とを認めるやう

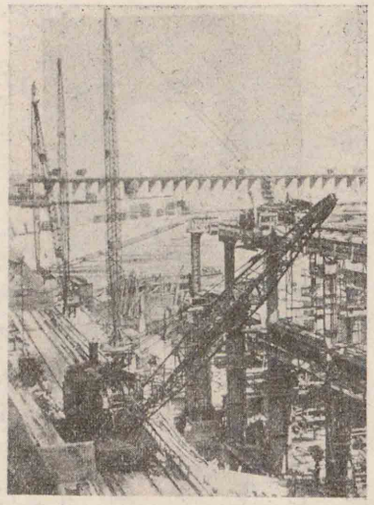
スターリンの政治

建設中のドニエプルのダム

第一次五ヶ年計畫

になつた。一九二三その後全ロシヤの大小諸邦を聯合してソヴィエト社會主義共和國聯邦 Union of Socialist Soviet Republics を組織した。

レニンの歿後、一九二四硬派のトロツキーと軟派のスターリン Stalin との間に猛烈な抗爭が行はれたが、結局スターリンが勝つてトロツキー派を放逐し、爾後益々自派の擴大强化に努め、世界赤化運動を一時中止し、退いて自國の安泰を實現する爲に廣汎な改革に着手した。卽ち彼は普通教育を奬勵し、學齡兒童の就學に努め、文藝・科學の發展を促し、更に國旗を制定し、曆法を改め、男女の同權と結婚の自由とを認め、新たに勞働法を制定して勞働者の權利を保證した。所謂第一次五ヶ年計畫 First Five Years' Plan 一九二八―一九三三なるものは、大規模の發電所を完成し、その電力を用ひて强制勞働を斷行し、以て全ロシヤの工業及び農業を電化し、ソヴィエト・ロシヤ



を自給自足の國とするにあつたので、更に第二次五ヶ年計畫（一九三二―一九三八）を作成し、極力戰爭を回避してその計畫の實現に邁進してゐる。

第二次五ヶ年計畫

かやうにして內政も次第に整頓し諸外國の信用も增進したので、政府はイギリス（一九二九）と國交を回復し、ポーランド（一九三二）・フランス兩國と不侵略條約を締結し、互に結束してドイツ（一九三三）の進出に備へ、更にアメリカ合衆國とも國交を再開して、通商貿易を營み、國際聯盟（一九三四）にも加入して常任理事國となり、國際的の地位は著しく向上することとなつた。

スターリン

かくしてスターリンは內治・外交兩方面に顯著な成績を擧げたが、その妥協的の政策行動に對し不滿を抱く反スターリン派は、國の內外になほ殘存するトロツキー一派の急進過激派と通謀して政府顚覆の陰謀を企ててゐるから、彼の政治的の基礎は必ずしも安定して

ゐない。

㈥アメリカ合衆國　大統領ウィルソン（ウィルソン）は國際聯盟を提唱したが、アメリカ合衆國はモンロー主義（ハーディング）を唱へて來た關係上これに加入しなかつた。そこで大統領ハーディングは獨・墺及びホンガリヤ國と別々に講和條約（一九二一）を結んで國交を回復した。さうしてワシントンで軍縮會議を催して多大の效果を齎した外、盛に汎米主義（Pan Americanism）を鼓吹して、中米の五共和國を指導することに努めた。

アメリカの高層建築

大統領クーリッヂ（一九二三―一九二九）（Coolidge）は外交方面ではメキシコとの國交を回復し、內政方面では保護關稅政策を實行して內地產業の發展を促し、ついで所得稅及び附加稅の稅率を低下して國民の負擔を輕減した。彼は意を敎育に注ぎ、國人をアメリカ化することに努め、新たに移民法を制定してアジヤからの移民を禁じ、東南ヨーロッパからの移民を制限し、素質の最も優良な西北

クーリッヂの治績

新移民法

ヨーロッパからの移民を歡迎することとした。

次の大統領フーヴァー（一九二九―一九三三 Hoover）は、就任後間もなく世界的の大不景氣に惱まされ、産業界は俄かに不振に陷り、失業者が續出した（一九三〇年三月には三百萬人を突破した）ので、これが救濟策として工業製品並びに農産物に對する關稅率を引上げた。やがてドイツが財政的危機に直面したので、これを救助する爲に所謂フーヴァー支拂猶豫（一九三一、六月 Hoover Moratrium）なるものを發表して、向後一年間（一九三一年七月より九三二年六月に至る）ドイツ國に戰債（メモラトリアム）その他の支拂猶豫を與へた。しかし國内の經濟的の不安を一掃するに至らなかつた。

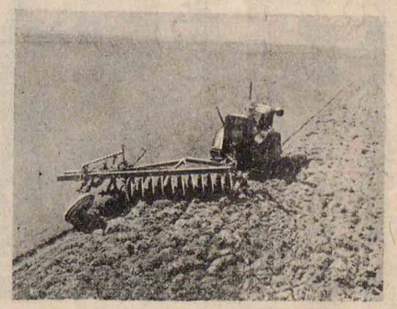
農業の機械化

フーヴァー支拂猶豫の發表

大統領ルーズヴェルト

ルーズヴェルトの政治

共和黨に打勝つて大統領の榮冠を得た民主黨のルーズヴェルト（一九三三 Roosevelt）は、難局打開の爲に從來の個人主義を棄てて集團主義を採り、全國的に統制經濟へ轉向せんとして、所謂ニューディール（一九三三 New Deal）と稱す



る新經濟政策を斷行した。卽ち彼は金本位制を停止し、弗の平價切下げを斷行して物價の昂騰を策すると同時に、各種の産業を興して失業者を救濟し、ついで勞働時間を短縮し、最低賃金の尺度を定め、鋭意國難の打開に邁進して相當の效果を擧げた。彼はソヴィエト・ロシヤを承認して兩國の親善關係を回復し、中米及び南米の諸國に對しては制覇的の干涉を避け、國際的善隣主義に基づき諸國間の共同の福祉を增進することに協力した。彼はフィリッピン（一九三四）獨立案を裁可し、キューバ（一九三四）條約を締結して、兩國が完全な獨立國たることをも承認した（フィリッピンは一九四四年から完全な獨立國となる）。

彼は自國の産業を保護すると同時に、中・南米の諸國、カナダを始めヨーロッパのフランス・スウィス・ベルギー・スウェーデン・オランダなどの諸國と互惠通商條約を締結し、自國よりこれ等の諸國への輸出を增進して多大の成功を齎してゐる。

かやうにして彼の任期は滿了したが、更に一九三六年の選擧に於

ルーズヴェルト大統領

て、壓倒的大多數を以て次期の大統領に當選したので、彼は畢生の勇氣を鼓して、中央行政機構に根本的の大改革を斷行し、先に計畫した新經濟政策（ニューディール）を實行して國運の打開に邁進してゐる。

㊐その他の諸國　以上列記した諸國の外になほ大小幾多の獨立國が存在してゐるが、その中で現に國際的紛爭の渦中にあるもの、若しくは將來紛擾を惹起すべき可能性を有する數國の現況を補足的に左に略記する。

フランコ將軍

イスパニヤ　國王アルフォンゾ十三世（Alfonso XIII.）は立憲政治を行つてゐたが、政界の腐敗と産業貿易の不振に禍され、アルカラ＝ザモラ（Alcala Zamora）は革命（一九三一、四月）を起したので、國王はフランスに蒙塵（モウヂン）した。そこでザモラは第二の共和政體を宣布し、民主共和主義の憲法を制定し（一九三一、十二月）、第一回の大統領に選擧された。然るに少數の大資本家及びこれに荷擔する軍閥と勞働階級との反目抗爭は激烈を極め、兩派の融和を圖るべき中産階級の勢力は極めて弱かつたので、議會に於ける左右兩翼の對立抗爭は益〻激しくなり、政局は爲に動搖するに至つた。就中

ヴェニゼロス

一九三六年二月の總選擧の結果、右翼派一四四人、中央黨六四人に對し、左翼派卽ち人民戰線派は實に二六六人の多數を占め、共和黨の首領アザーニヤ＝ヂャズ（Azana Diaz）が總理となつて左翼系の內閣を組織した。

爾來政府は極左分子と通謀して國粹黨の掃蕩、右翼團の壓迫に努めたので、右翼團の反政府運動は漸く熾烈となり、遂にフランコ（Franco）將軍の統率せるモロッコ駐屯軍の蹶起（一九三六、七月）によつて內亂勃發の火蓋は切られた。

この內亂に關聯して、人民戰線派のフランス・ソヴィエト＝ロシヤの兩國は政府軍を援け、ドイツ・イタリヤ兩國はファショ的の反政府軍を援けたので、イギリスを主宰とする不干涉實施國際委員會も何等有力な鎭定策を講ずることも出來ず、動亂は爲に國際化し、純然たる國內の紛爭に還元することは不可能の狀態で、イスパニヤ國民の悲慘な境遇に對しては、眞に同情に値（アタヒ）するものがある。

ギリシヤ　ギリシヤは一九二三年まで立憲王政であつたが、同年末に國王ジョージ二世が國外に退去を命ぜられ、翌年四月共和政體となり、やがて憲法が制定されてザイミス（Zaimis）が大統領となつた。この間、王黨と共和黨卽ちヴェニゼロス（Venizelos）黨との間に紛爭が繰り返された。然るにヴェニゼロス黨は

一九三三年の總選擧に失敗したので、不平の黨員等は海軍副提督ドミスチカス(Domistichis)等と共謀して政府の顚覆を企てて失敗した。

爾來王政再興の氣運は急速に進展し、やがて國民投票の結果絶對多數を以て王政の復古を可決したので、ロンドンの郊外に蒙塵中のジョージ二世は、民意を容れ、歸國の上、王位を繼承することとなつた。

オーストリヤ　サン＝ジェルマン條約成立の結果、オーストリヤ＝ホンガリヤ國は分裂し、ドイツ語を話す國民が團結してオーストリヤ共和國をはじめ、北方スラヴ族・南方スラヴ族及びマジャール族はいづれも分離して獨立國をつくつた。その結果、オーストリヤはウィーン市と八州（その面積三萬二千三百六十九方哩、人口六百七十六萬人―一九三四年の調査）とを領有する內陸的の小共和國となつた。

元來この國は天然の資源が極めて貧弱で、農產物の外には少量の鐵と鹽とを產出するのみであるから、產業の復興に必要な石炭・石油・銅を始め、化學藥品・羊毛類はすべて外國から輸入しなければならないがやうな國柄であるから固より自力更生は不可能であるので、一部人士の間にドイツ國に合併しようとする意見が唱へられてゐる。しかしフランス・チェッコ＝スロヴァキヤなどの諸國が强硬に反對するので、容易に實現するに至らない。

最近國內に於ける親獨派の運動が再び熾烈化したので、シュシュニック(Schuschnigg)首相は斷乎としてこれが彈壓に邁進してゐる。

第十八章　現代の國家とその文化

國際主義の勃興

一　現代の國家　世界大戰直後、世界の各方面に共和民主と平和協調主義とが唱へられ、帝國主義(Imperialism)は殆んどその影を潛めたが、國家非常時には獨裁政治が却つて難局を打開し得るといふ見地から、最近國家主義・獨裁主義(Dictatorship)の運動が頻りに行はれ、ファシズムとデモクラシーとが世界的に對立するやうになつた。

次に國際主義もまた大戰後に著しく擡頭し、國際間の協力によつて世界の秩序と正義と安全とを保護しようとした。かの國際聯盟や國際勞働會議(The International Labour Congress)の如きは、卽ちその主義に基いたものである。然るに最近には武力を背景とする實力外交が行はれ、ややもすれば國際道德を輕視するやうになつた。さうして經濟方面でも統制主義が自由通

女子參政權問題

商主義を排除せんとするに至つた。

婦人が男子と同樣に參政權を得るに至つたのも、また現代に於ける政治上の新現象である。卽ち大戰以後、參戰諸國の婦人の功勞に酬いる爲に、英・ソヴィエトロシヤ・獨・米の諸國は婦人に參政權を與へた。

現代の文化と科學の力

(二) 現代の文化　輓近に於ける科學の進步ほど、現代の文化に偉大な影響を與へたものはあるまい。きうして十九世紀の末から現代に至るまでの科學の進步と、その廣汎に亙る應用とによつて社會の狀態は一變されたし。しかし西洋物質文化の半面には、浮薄享樂的な氣分が含まれてゐるので、その弊害もまた決して少くない。かくて西洋の識者の間には大衆の教育を奬勵し、東洋の精神文化を加味して、その弊を除かうとする者が出るやうになつた。

日本文化の卓越

我等の祖先は我が國固有の舊文明を棄てることなく、更に儒教を中心とする支那の文明と、佛教を中心とする印度の文明とを攝取咀嚼し、その長を採り短を棄て、アジヤ文明を表現する日本文明を陶冶することに成功した。

現代の文藝

明治時代になつて、潮の如く、我が國に侵入して來た歐米の發達した文物は、やがて我が國固有の日本精神によつて同化された。かやうにして我等日本國民は世界の人類が數千年の努力によつて漸く作成した東西の二大文明を我が特有の文化精神の中に咀嚼融合して、更に偉大なる世界文明を表現する日本新文明を創造するに至るべきを確信して疑はない。

イプセン

(三) 現代の文藝　十九世紀の後半から科學萬能主義に對抗して物質主義を排斥する新理想主義が起り、現代の哲學・文學に於ける重要な一潮流をつくつてゐる。さうして史學もこの風潮から免れず、一般史の研究の外に、特殊史の研究は漸く詳密となると共に、文化史・史學理論に關する研究も熾烈となつた。

ウィンデルバンド(Windelband 一八四八—一九一五)・オイケン(Eucken 一八四六—一九二六)(共にドイツ人)・ベルグソン(Bergson 一八五九生)(フランス人)等は現代哲學の、イプセン(Ibsen 一八二八—一九〇六)(ノルウェー人)・ハウプトマン

モムゼン

立體派ピカソの半身像

ローダン

現代の建築

堅牢とを尚ぶ傾向を生じ、アメリカ合衆國の例に倣ひ、鐵筋コンクリート式の宏大雄壯なものが各地に建てられ、その面目を一新した。

現代の美術

※Cezanne（一八三九—一九〇六）

繪畫は十九世紀末の樣式を踏襲し、印象派にはルノアール（フランス人）Renoir（一八四一—一八一九）を出した。表現派には後期印象派（Post Impressionism）（フランスのセザンヌはこの派の代表的の畫家、※）・立體派（Cubism）・未來派（Futurism）（いづれも主觀を重んじ、從來の平面的な整頓した形相を一變して角形の連續した立體的のものの若しくば靜止の實體よりも運動を表現するものに轉向しようとする）などがある。さうして彫刻の方面ではローダン（フランス人）Rodin（一八四〇—一九一七）等が有名である。

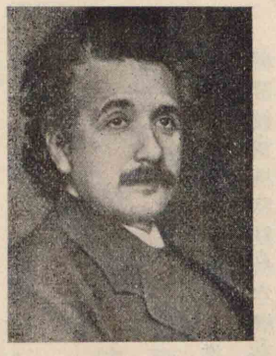
（Hauptmann　一八六二生）（ドイツ人）等は現代文學の、ランプレヒト（Lamprecht　一八五六—一九一七）・モムゼン（Mommsen　一八一七—一九〇三）（共にドイツ人）等は現代史學の、それ〴〵代表的の巨擘である。

現代の建築は物質文化の發展と富の增加とに伴なひ、從來の高尚優雅な趣味を棄て、實用と

相對性原理

アインシュタイン

アムンゼン



四　現代の科學　物理學の方面では、アインシュタイン（一八七九生）が相對性原理（Relativity）を發表し、ニュートンの引力說の誤謬を指摘して學界を驚かした。

地理學上では、南・北兩極探檢熱は本世紀の初から益〻盛となり、スコット・シャクルトン（共にイギリス人）Scott（一八六八—一九一二）Shakleton は相前後して南極探檢を企てた。やがてピーリー（アメリカ人）Peary（一八五六）はニューファウンドランドを經て遂に北極に到り、アムンゼン（ノルウェー人）Amundsen（一八七二—一九二八）は南極に達して、共に先着の名譽を博し、ついでスコットもまた翌年南極に達したが、歸路風雪に阻まれて壯烈な最期を遂げた。

五　科學の應用　科學の應用も益〻廣汎になつたので、現代文化の發展上に多大な貢獻をした。卽ちダイムラー（ドイツ人）Daimler（一八三四—一九〇〇）はガソリン・モーター（一八八五）を發明して、自動車の運轉を可能ならしめ、フォード（アメリカ人）Ford はこれを用ひて簡便な自動車を大量に製作し

フォード

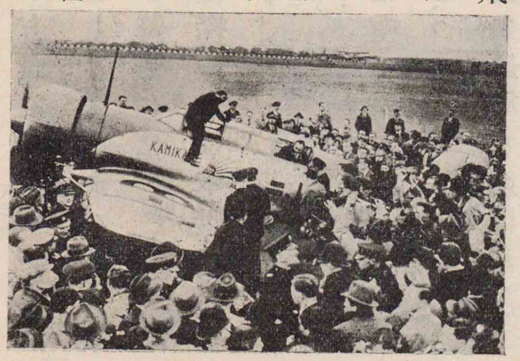
東京ロンドン間の飛行に新記錄を樹立した神風號

て、交通上に劃期的の發展を促進した。サントス・デュモン（フランス人）は始めて空中飛行に成功し、やがてライト兄弟（アメリカ人）は飛行機に改良を加へ、ツェッペリン（ドイツ人）は硬式飛行船を製造した。さうしてスミス（イギリス人）の操縦せる飛行機は遂に世界一周飛行に、リンドバーク（アメリカ人）は大西洋無着陸横斷飛行に、また飛行船ツェッペリン伯號は世界一周に各〻成功してから、航空事業は躍進した。

次にフェセンデン（アメリカ人）はラヂオを完成し、やがて發聲映畫が實演され、ついで英・米兩國間には無電放送局が設立され、無電放送が實施されるやうになつた。

兵器の進歩

兵器も大戰後著しく進歩し、裝甲自動車・裝甲列車・戰車・輕機關銃・重機關銃・航空機・高射砲・鐵兜・防彈衣・光學兵器などが造られ、やがては電氣應用の兵器なども用ひられるに至るであらう。



日清戰役後に於ける我が帝國の地位

北清事變後に於ける我が帝國の地位

第十九章　西洋史上より見たる我が國の使命と國民の覺悟

一　アジヤに於ける我が帝國の地位

我が國は明治維新以來、內政の更新と整頓とに全力を注いでゐたから、外に向つてその勢力を伸べる餘裕がなかつた。從つてアジヤ大陸の大半はヨーロッパの列强國によつて分奪されてもこれを阻止することは出來なかつた。偶〻日清戰役（一八九四―一八九五）で我が國の實力が認められ、東洋の局面を一變せしめてから、世界の列强は始めて我が國を畏敬するやうになつた。遼東半島の還付は眞に遺憾な事であつたが、これも露・佛・獨三大强國の聯合干涉の結果であることを思へば、世界に於ける我が國の地位は俄かに向上した證左とすることが出來よう。その後北清事變（一九〇〇）で我が軍規の嚴肅と偉勳とは常に列國軍を凌いでゐたので、我が國威は益〻輝き、遂にイギリ

スと對等の位置に立つて日英同盟を結ぶことが出來た。

㈡我が帝國の國際的地位の向上　ロシヤは北清事變に派遣した多數の軍隊を滿洲に駐屯させて、事實上これを占領し、平和克復後にもなほ撤兵しないで、益〻横暴を極めたから、我が國はその撤兵に關して數ヶ月の間交渉した後、その不誠意を責めて宣戰した。この役、我が國民は一層强烈な愛國の赤誠を捧げて、君國の大義に殉じ、奮鬪勇戰したので帝國の武威は中外に輝き、アメリカ合衆國の大統領ルーズヴェルトの斡旋で同國ポーツマス(Portsmouth)で講和條約を結んだ。これによつて、ロシヤの極東政策は根柢から覆され、アーリヤ人種のアジヤ侵略を完全に阻止し、東洋の局面はここに一變された。ついで我が國はイギリスと新同盟を結び、佛・露兩國と協商を約し、アメリカ合衆國とも覺書を交換して積極的に東亞及び太平洋上の平和保障に乗出し、やがて一九一〇年には韓國を併合し、アジヤ大陸の一角を占めて有色人の覺醒を促した。世界大戰の結果、獨・墺・露の三國が强國の列を離れたので、

日露戰役後に於ける我が帝國の地位

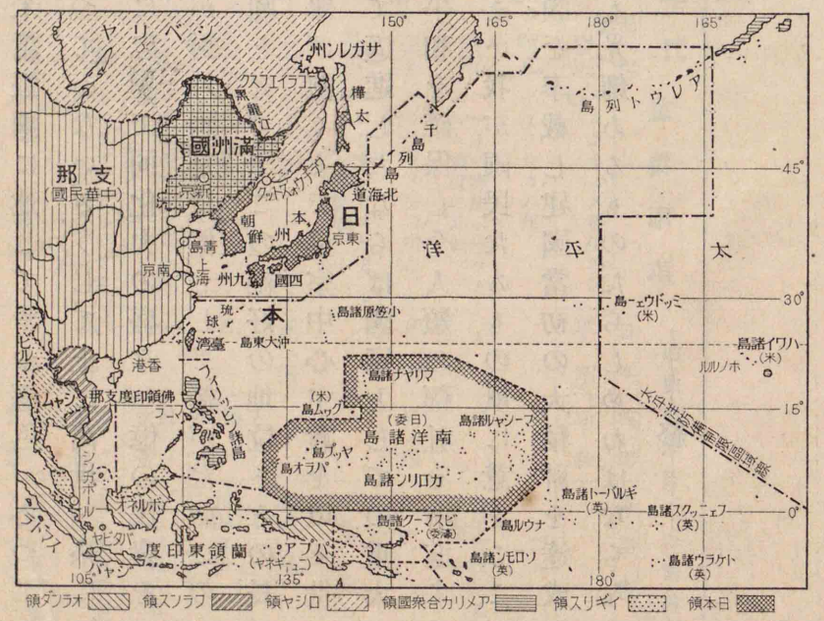
韓國の併合

爾來我が國は英・佛・伊・米の四國と共に世界五大强國の一として愈〻國際的に優越な地位を占め、世界の諸問題を討議することとなつた。さうして滿洲國獨立の承認に關し、不幸にも國際聯盟と意見を異にしたので、遂に聯盟脫退を宣言する至つたが、我が國の國際的地位には固より何等の變動もない。

太平洋を繞る現勢圖

我が國の國際聯盟脫退宣言

㈢我が國民の覺悟　熟ら我が國の現狀を考察するに、國土は狹小で原料資源は極めて貧弱であるが、太平洋上で絶好の地



位を占めてゐる。物質文明は歐米諸強國に比してやや遜色があつても、精神文化の方面では毫も劣つてゐない。さうして上に萬世一系にして天壤無窮の皇室を戴き、下に忠勇で同化力の盛な一億の民衆を控へ、世界永遠の平和を希ふ我が對外國是は儼として搖がない。この際に於てかかる多數の者が一團となつて、この絶好の地位とその長所とを利用し、君民一體の實を擧げ、飽くまで皇室中心主義を以て世界に臨み、正義皇道を目標として邁進したならば、國家としての重大な任務を果し、能く世界恒久の平和を確保し、全人類の福祉を增進することもさまで困難ではあるまい。我が國民たるもの夙に意をここに注ぎ、內省精察、以て列聖の宏謨（カウボ）を奉戴し、建國當初の大精神を達成し、我が國體をしていやが上にも光輝あるものたらしめねばならない。

——終——

中等西洋歷史年表

年代	重要事項	國史・東洋史との對照 日本	支那	重要事項
前八世紀以前				
西紀前三〇〇〇頃	エジプトの建國	神代		漢族黃河の流域に據る
二三〇〇頃	バビロニヤの興起		夏時代	
二一三〇頃	ヘブライ人のエジプト退去		商成湯時代	
七七六	第一オリンピヤ祭		周成王時代	
七五三	ローマの建國			
前六六〇頃	スパルタ、ペロポネスス半島の大部を征服			神武天皇御卽位
前二				
六〇六	アッシリヤの滅亡	神武	春秋	
五五〇	ペルシヤの建國	綏靖		
五〇九	ローマ共和政治の創立	懿德		
四八〇	テルモピレーの戰サラミスの海戰			翌年孔子歿

年代	重要事項	國史・東洋史との對照 日本	支那	重要事項
世紀以前				
西紀前四三一	ペロポネスス戰役の開始	孝昭	春秋	
四二九	ペリクレスの死			
四〇四	アテネの降服（ペロポネスス戰役の終結）			翌年韓魏趙興起戰國の世
三六七	リキニウス法の發布	孝安	戰國	
三三四	アレクサンドル大王のペルシヤ征服			
二二一		孝靈		秦の一統
二〇二	ザマの戰	孝元	漢高祖	項羽自殺
一六八	ローマのマケドニヤ征服		漢文帝	前年匈奴入寇
一四六	カルタゴ・ギリシヤ共にローマに併合	開化	漢景帝	前八年吳楚七國の亂
六〇	第一回の三頭政治	崇神	漢宣帝	鄭吉が西域都護となつた

紀			
前一世紀	四四	ケーザルの暗殺	崇神 漢元帝
	前二七	オクタヴィヤヌスが元老院からアウグスツスの稱號を受けた（ローマ帝國の創始）	垂仁 漢成帝 新羅王子天日槍の歸化（？）
	四	キリストの誕生	漢哀帝 後十一年王莽の簒立
一・二・三・四・五世紀	後三二	キリストの磔刑	後漢光武帝
	一六六	ローマ皇帝安敦支那（アントニヌス）と交通	成務 東漢桓帝 後十八年黃巾賊蜂起
	二八〇		三國 晉の一統
	三三三	コンスタンチヌス大帝の天下一統	仁德 東晉明帝
	三三五	ニケーヤ宗教會議	
	三三〇	コンスタンチノープル奠都	東晉成帝
	三七五	ゲルマニヤ民族移動の開始	前三年佛教高句麗に傳入
	三九五	ローマ帝國東西に兩分	
	四一五	西ゴート王國の創立	前三年允恭天皇御卽位

紀			
六・七・八世紀	四九	ヴァンダル王國の創立	仁德 東晉成帝 南北朝對立
	四七六	西ローマ帝國の滅亡	雄略 宋廢帝 後三年宋の滅亡
	五七一	マホメットの誕生	欽明 南北朝陳宣帝 後十八年隋の統一
	六二二	マホメット、メヂナに逃走（マホメット教國の紀元元年）	推古 唐高祖 後十二年景教唐に傳入
	七二六	偶像禮拜禁止令の發布	聖武 唐玄宗 前九年吉備眞備唐に留學
	七三二	ツールの戰（サラセン敗退）	前四年渤海我が國に來朝
	七五六	サラセン帝國の分裂	孝謙 安祿山の叛亂
九・十世紀	八〇〇	チャールス大帝が西ローマ皇帝となつた	桓武 唐德宗 後四年最澄・空海の入唐
	八四三	ヴェルダン條約	仁明 唐武宗 前十年清原夏野等令義解を上る
	八六二	ロシヤの建國	清和 唐懿宗 後二年南詔の唐入寇
	八七〇	メルセン條約	
	九六二	オット一世が神聖ローマ皇帝となつた	村上 宋太祖 前二年宋の太祖後周を滅して自立
一十	一〇六六	ノルマンヂー公ウイリヤムのイングランド征服	後冷泉 宋英宗 後三年王安石新法の制定

紀			
・十二世紀	一〇七六	グレゴリー七世ヘンリー四世を破門す	白河 宋神宗 王安石免職
	一〇九六	等一回十字軍の發端	堀河 宋哲宗 後十九年女眞が國號を金と改めた
十三・十四世紀	一二八九	第三回十字軍	後鳥羽 南宋孝宗 賴朝奥羽を平定す
	一二一五	イングランド大憲章の發布	順德 南宋寧宗 前九年鐵木眞が成吉思汗と號した。後六年承久の變
	一二六五	イングランド國會（下院）の創設	龜山 南宋度宗 後三年蒙古の使我が國に來朝
	一三三九	英・佛兩國の間に百年戰役開始	後村上 元順宗 前三年湊川の戰後十六年朱元璋の擧兵
	一三五六	ドイツ金印勅書の發布	後二年尊氏死去後十二年元滅亡
十五世紀	一四〇二	アンゴラの戰（チムール、トルコ皇帝バヂャシッドを擊破）	後小松 明惠宗 義滿明使を引見す。明の成祖卽位
	一四五三	東ローマ帝國の滅亡	後花園 明景宗 後十四年應仁の亂
	一四九二	コロンブスのアメリカ發見	後土御門 明孝宗 前十二年欽察汗國の滅亡
	一四九八	ヴアスコ＝ダ＝ガマのインド、カリカット安着	明孝宗 後二年後土御門天皇崩御
十	一五一七	ルーテル宗教改革の發端	後柏原 明武宗 後九年モゴル帝國インドに建設
	一五一九	マヂェランの世界周航（一五一九—二二）	北條早雲歿

紀			
六世紀	一五四〇	ヤソ會（ジエスイット教團）の組織成立	後奈良 明世宗 後二年ザヴイエル、ゴアに來着、後三年ポルトガル人我が國に來着
	一五五五	アウグスブルグの宗教和議	翌年シビル汗興起。後六年天主教僧京都に布教
	一五七九	ユトレヒト同盟	正親町 明神宗 家康と勝賴と相爭ふ
	一五八一	オランダの建國	信長信忠入京
	一五八八	イングランド軍無敵艦隊を擊破	後陽成 明神宗 後四年秀吉の朝鮮役。前八年利瑪竇支那に來着
	一五九八	ナント勅令の發布	秀吉薨去。前二年オランダ人東洋に來航
十七世紀	一六〇〇	英國東インド商會の創立	關ヶ原の戰
	一六〇三	イングランド女王エリザベスの崩御	家康征夷大將軍に任ず
	一六一八	三十年戰役の開始	後水尾
	一六四八	ウエストファリヤ條約の締結（三十年戰役の終結）	後光明 清世祖 前十一年島原の亂。前三年李自成縊死 前二年家康薨去翌年オランダ人バタヴィヤ府建設
	一六四九	共和政治成立	前三年鄭芝龍清に降服
	一六五一	英、航海條例發布	將軍家光薨。由井正雪叛す

西洋	日本	清	事項
一六八八	東山	清聖祖	一六八八 インゲランドの名譽革命 翌年ネルチンスク條約の締結
一七〇〇			一七〇〇 北方戰役の開始
一七〇一			一七〇一 プロシヤ王國の建設
一七〇三			一七〇三 露都ペテルスブルグの建設
一七〇七			一七〇七 大ブリテン王國の成立
一七一三	中御門		一七一三 ユトレヒト（イスパニヤ繼承戰役の終結）條約の締結
一七四〇	櫻町	清高宗	一七四〇 オーストリヤ繼承戰役開始
一七四八	桃園		一七四八 アーヘン（オーストリヤ繼承戰役の終結）講和
一七五六			一七五六 七年戰役の開始
一七六三	後櫻町		一七六三 フベルツスブルグ（七年戰役の終結）條約の締結
一七七六	後桃園		一七七六 アメリカ合衆國の獨立宣言書公布
一七八三	光格		一七八三 英國、合衆國の獨立を承認（ヴェルサイユ和議）
一七八七			一七八七 合衆國憲法の制定

翌年ネルチンスク條約の締結

富士山噴火、寶永山出現

後七年西藏の降服

前年、吉宗、青木昆陽を召す

前四年クライヴインドに來着

後二年竹内式部捕縛

前三年清國天山南路の併有

後四年鄭昭が暹羅王となる

後三年暹羅、清に朝貢

松平定信老中となる

西洋	日本	清	事項
一七八九	光格	清高宗	一七八九 フランス革命、人權の宣言發表。ワシントン第一回の大統領就任 翌年異學禁令の發布
一七九二			一七九二 佛國王政の廢止、共和政體の創立、第一回對佛大同盟
一七九三			一七九三 恐嚇時代開始。ポーランド第二回の分割
一七九五			一七九五 佛都督政府成立。ポーランドの分割（第三回）の滅亡
一七九八		清仁宗	一七九八 ナポレオンのエジプト征伐
一七九九			一七九九 佛執政政府成立。第二回對佛大同盟
一八〇二			一八〇二 アミヤン條約（英・佛間）。ナポレオン終身の統領
一八〇四			一八〇四 ナポレオン一世の卽位
一八〇五			一八〇五 トラファルガルの大海戰。第三回對佛大同盟
一八〇六			一八〇六 神聖ローマ帝國の解散 大陸封鎖令の發布
一八〇七			一八〇七 フルトン汽船を造る
一八一二			一八一二 ナポレオン一世のロシヤ遠征
一八一三			一八一三 第四回對佛大同盟。ライプチヒの大戰

阮福映の安南一統

露使が長崎に來て通商を請うた

露人が蝦夷に寇し前年モゴ前年モゴ帝國が英の保護に歸した

露人蝦夷に來寇

露人蝦夷に來寇

露艦が蝦夷に來た。前二年ピルマ、清に朝貢

近藤重藏が擇捉島に標柱を立てた

白蓮教徒の亂

露艦高田屋嘉兵衛を拉致

天理教徒の亂

西洋	日本	清	事項
一八一四	光格	清仁宗	一八一四 パリー陷落。ナポレオン一世の辭位。スチヴンソン汽車を造る ワーテルローの大戰。第二回パリー條約、ウイン會議の終了。神聖同盟
一八一五			一八一五 米大統領モンローの敎書公布（モンロー主義）
一八二三	仁孝	清宣宗	一八二三 トルコ、ギリシヤの獨立を承認。舊敎徒釋放法案イギリスの議會通過
一八二九			一八二九 フランス七月革命の勃發、フランス、アルジエリヤ領有。英國リヴアープール・マンチエスター間の鐵道開通
一八三〇			一八三〇 ベルギー獨立の承認
一八三二			一八三二 イギリス選擧法改正案の通過
一八三七			一八三七 英國女王ヴィクトリヤ卽位
一八四二			一八四二 イギリス、アフガニスタンから撤退
一八四六			一八四六 英國の穀物條例の廢止
一八四八	孝明		一八四八 フランス二月革命の勃發
一八四九			一八四九 英國航海條例廢止

獨人シーボルト長崎に來着。英人ビルマを征服

杉田玄白蘭學事始を著作

松平定信歿

この年改元（天保）

大阪川口の浚渫天保山築造

賴山陽歿。清國鴉片の密輸入を嚴禁す

大鹽平八郎の亂

南京條約成立

米艦浦賀に來り交易を求む

後二年長髮賊の亂

蘭人始めて牛痘を傳ふ

西洋	日本	清	事項
一八五二	孝明	清文宗	一八五二 ナポレオン三世の卽位（帝政再興） 翌年米の水師提督ペリー浦賀に來着
一八五四			一八五四 クリミヤ戰役開始 安政の開國。後四年愛琿條約の締結
一八五五			一八五五 セバストポール要塞陷落。パリーで世界大博覽會開催 江戸大地震（安政二年）
一八五八			一八五八 英國政府インドを直轄す 安政の大獄。英佛軍大沽砲臺を占領す
一八五九			一八五九 チューリッヒ條約（墺・伊間） 吉田松陰・賴三樹等死刑。翌年天津條約締結
一八六一			一八六一 イタリヤ王國の創建。合衆國の南北戰役開始。ロシヤ農奴解放 前年櫻田門の變。前二年和宮降嫁
一八六四		清穆宗	一八六四 萬國赤十字社創設 蛤御門の變。長髮賊の首魁洪秀全服毒自殺
一八六五			一八六五 南北戰役終る 假條約勅許
一八六六			一八六六 普墺戰役。北ドイツ聯邦の成立 孝明天皇崩御。將軍家茂薨去
一八六七	明治		一八六七 墺匈國成立。佛兵メキシコ撤退 王政復古の大號令。佛國カンボヂヤを保護國とす
一八六九			一八六九 スエズ運河開通 前年東京奠都。版籍奉還
一八七〇			一八七〇 普佛戰役。イタリヤ王國統一の完成 新律綱領頒布

紀	世	十	九	二

西暦	明治	清德宗		
一八七一	パリー開城。ヴェルサイユ條約締結。ドイツ統一の完成。伊太利ローマに遷都	大使の歐米諸國派遣。香港・上海間の海底電線布設		
一八七六	ベル電話機發明	帶刀禁止。佐賀熊本の變		
一八七七	露土戰役。ヴィクトリヤ女王インド女帝となる	西南の役		
一八七八	ベルリン會議開催	翌年アフガニスタンが英の保護國となる		
一八八三	普墺伊三國同盟成立	前年濟物浦條約の締結		
一八八八	獨帝ウィリヤム二世の卽位	翌年憲法發布		
一八九一	露佛二國同盟成立	前年教育勅語發布。後三年東學黨蜂起		
一八九八	米西戰爭。米國のハワイ併合。ファショダ事件。キューバ夫妻ラヂウム發見	露英獨三國清國の港灣租借。前年日清戰役勃發		
一八九九	トランスヴァール戰役。第一回萬國平和會議開催	佛國廣州灣租借。翌年北清事變勃發（義和團の暴動）		
一九〇一	英王エドワード七世の卽位。オーストラリヤ聯邦成立。ヂュモン空中飛行に成功	日本赤十字社條例公布。端郡王以下處刑（義和團）		
一九〇二	トランスヴァール戰役終る。日英同盟成立	滿洲還附條約成立		
一九〇四	英佛協商成立。日露戰役	對露宣戰布告		

西暦	明治	清德宗		
一九〇五	露國憲法發布。獨佛協商成立。アインシタイン相對性原理發表	奉天日本海の大戰。日露講和成立		
一九〇六	ツェッペリン飛行船製作	凱旋大觀兵式擧行		
一九〇七	三國協商成立。第二回萬國平和會議開催	日獨・日露兩協約成立。韓國皇帝讓位		
一九〇八	トルコ革命の勃發。ベルギー、コンゴー自由國併合	桂内閣成立。西太后・德宗殂落		
一九〇九	ブルガリヤ王國の創建。ピーリー北極に到達	清宣統帝		
一九一〇	英王ジョージ五世卽位。南アフリカ聯邦の組織	日韓併合條約成立。日露協約成立		
一九一一	ポルトガル共和國宣言。伊土戰役。モロッコ條約。アムンセン南極に到達	日英新同盟成立		
一九一二	バルカン戰役。ローザンヌ條約、露蒙條約	明治天皇崩御。清朝滅亡		
一九一四	世界大戰勃發。マルヌの戰。パナマ運河開通	支那共和國袁世凱（大總統）	日獨宣戰。我が軍の膠州灣占領	
一九一五	ワルソー陷落。ブルガリヤの宣戰		卽位禮及び大嘗會	
一九一六	ヴェルダンの要塞戰。ソンムの會戰。埃帝フランシス＝ジョセフ崩御	袁世凱黎元洪	日露新協約成立。袁世凱病歿	
一九一七	チャールス一世卽位（墺）。露帝ニコラス二世及び幽閉（露）。合衆國の聯合國革命。軍參加	黎元洪馮國璋	支那對獨墺宣戰。張勳復辟運動の失敗	

紀	世	十	二

西暦	大正	徐世昌		
一九一八	プレストリトウスク條約（獨・露間）。西部戰線獨軍大攻勢の阻止。勃埃土三國の休戰。獨埃兩國の革命勃發。獨帝ウィリヤム二世の逃亡	我が國シベリヤ出兵。寺内閣總辭職。原内閣成立	
一九一九	パリー媾和豫備會議の開催。對獨・對埃・對勃講和條約締結。ドイツ新憲法制定	東宮殿下御成年式擧行	
一九二〇	トリヤノン條約（對ホンガリヤ）、對土セーヴル條約締結。チェコ＝スロヴァキヤ及びオーストリヤ兩國新憲法制定。國際聯盟の成立	尼港在住邦人及び軍隊三百名虐殺さる	
一九二一	ユーゴー＝スラヴィヤ新憲法制定。希土開戰。ワシントン第一軍縮會議の開催。日英米佛四國協約成立。ロシヤ新經濟政策採用。アイルランド自由國成立	東宮殿下英佛伊白など御巡訪御見學の後御歸朝。原首相暗殺さる。東宮殿下攝政御就任	
一九二二	イギリス、エジプトの獨立を認む。伊國ムッソリーニ宰相となる。ローザンヌ條約調印（希土問題）。日英同盟廢棄	英國皇太子の來朝。山東條約批准交換。我が派遣軍シベリヤ及び北滿洲撤兵	
一九二三	佛白軍ルール地方占領。ブルガリヤ革命勃發。佛國ワシントン軍縮條約批准。トルコ共和國の宣言。イスパニヤ革命勃發	黎元洪曹錕	石井ランシング協約廢棄。山本内閣成立。關東大震災。清浦内閣成立

紀	世	十	二

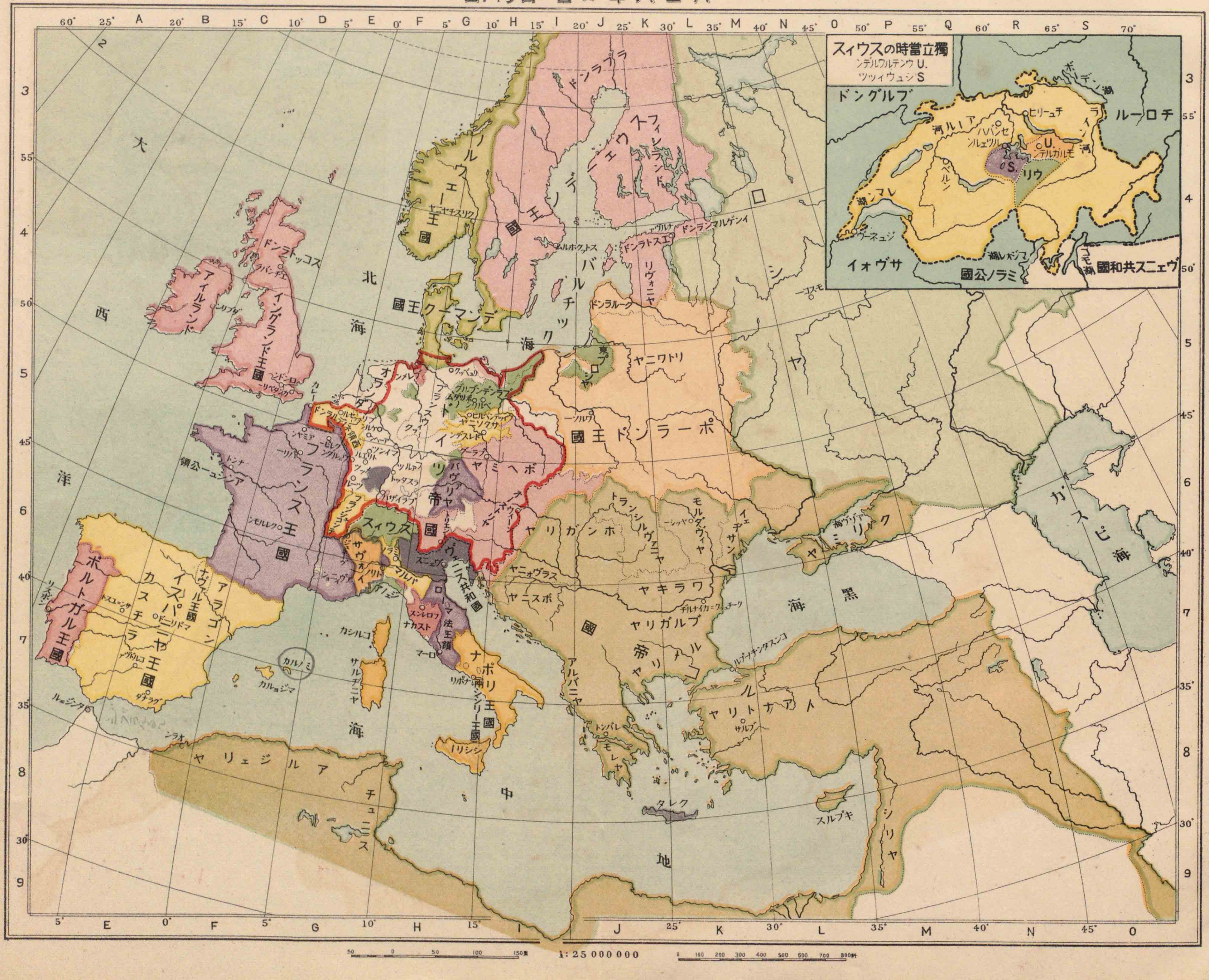
西暦	大正	今上	曹錕	黎元洪	
一九二四	英國マクドナルド内閣（勞働黨内閣）成立。ソ聯首班レニン死去。伊國フィウメ併合。ドイツ案成立。ギリシヤ王政仆れ共和政體成立				東宮殿下良子女王殿下御成婚。イギリス獨領ガンダの領袖。加藤（高）内閣成立
一九二五	日露協定成立。ヒンデンブルグ元帥のドイツ共和國大統領就任。ロカルノ安全保障條約成立		段祺瑞（執政）		孫文死去。段祺瑞が臨時執政。廣東國民政府成立。我が國が普通選擧法の公布
一九二六	イギリス勞働大爭議。佛國ポアンカレー擧國一致内閣成立。ドイツ國際聯盟加入。發聲映畫實寫。伊のムッソリーニ獨裁權獲得				加藤首相薨去。若槻内閣成立。北京政變の勃發。大正天皇崩御
一九二七	ジュネーヴ第二軍縮會議の開催。米墨國交回復。リンドバーグ大西洋無着陸横斷飛行に成功。英米兩國間に無電放送實施		張作霖（大元帥）		若槻内閣辭職、田中内閣成立。我が國動亂。中華民國支那出兵
一九二八	トルコのアンゴラ政府ッグ離の宣言。ケロッグ不戰條約調印。ソ聯第一次五ヶ年計畫實施		張作霖（鎮司令）		張作霖死去。南京國民政府成立。今上陛下御卽位の大禮御擧行
一九二九	イタリヤ政府とローマ法王廳との新協定成立。賠償專門會議ヤングプラン承認。ツェッペリン伯號世界一周成功		蔣介石		田中内閣辭職、濱口内閣成立
一九三〇	獨國ヤング案を承認。ロンドン軍縮會議の開催				日支關稅協定成立。支那混亂

二十世紀

年	事	今上	蔣介石	事
一九三二	イスパニヤに革命再發共和國が成立した。ヴァイのモラトリウム案成立。			若槻内閣成立及び辭職。犬養内閣成立。金輸出再禁止。滿洲事變。
一九三三	ローザンヌ賠償會議開催。ソ聯ポーランド及びフランスと不侵略條約締結			上海事變。滿洲國獨立宣言。齋藤內閣成立
一九三三	獨ヒットラー政治斷行。米ルーズヴェルト總理獨裁新經濟統制。大島濟行政策。叛亂斷行。ソ聯に就任。ソ會議開催。第二次五ケ年計畫			我が國際聯盟離脫。河北脫占據。戰支停。協定成立。太平洋熱河皇帝御降誕
一九三四	ドイツ再軍備宣言。ドイツ再軍縮會議開催。ヒトラー一世崩御。ルーズベルト大統領ヴェルサイユ條約切下げ。ソ聯國際聯盟加入斷行。統領の價値			滿洲帝國成立
一九三五	ギリシヤ古伊太利兩國交戰。ロカノ條約破棄。ドイツ再軍備宣言。ヒトラー帝位。ヒトラー世襲制。ヒトラー國民投票。ヒトラー五年祝典。ヒトラー英國海軍協定。ヒトラー廿五年記念。ヒトラー內閣組織。ヒトラー內閣成立。ヒトラー內閣組織。ヒトラー內閣成立。ヒトラー內閣組織。ヒトラー內閣成立

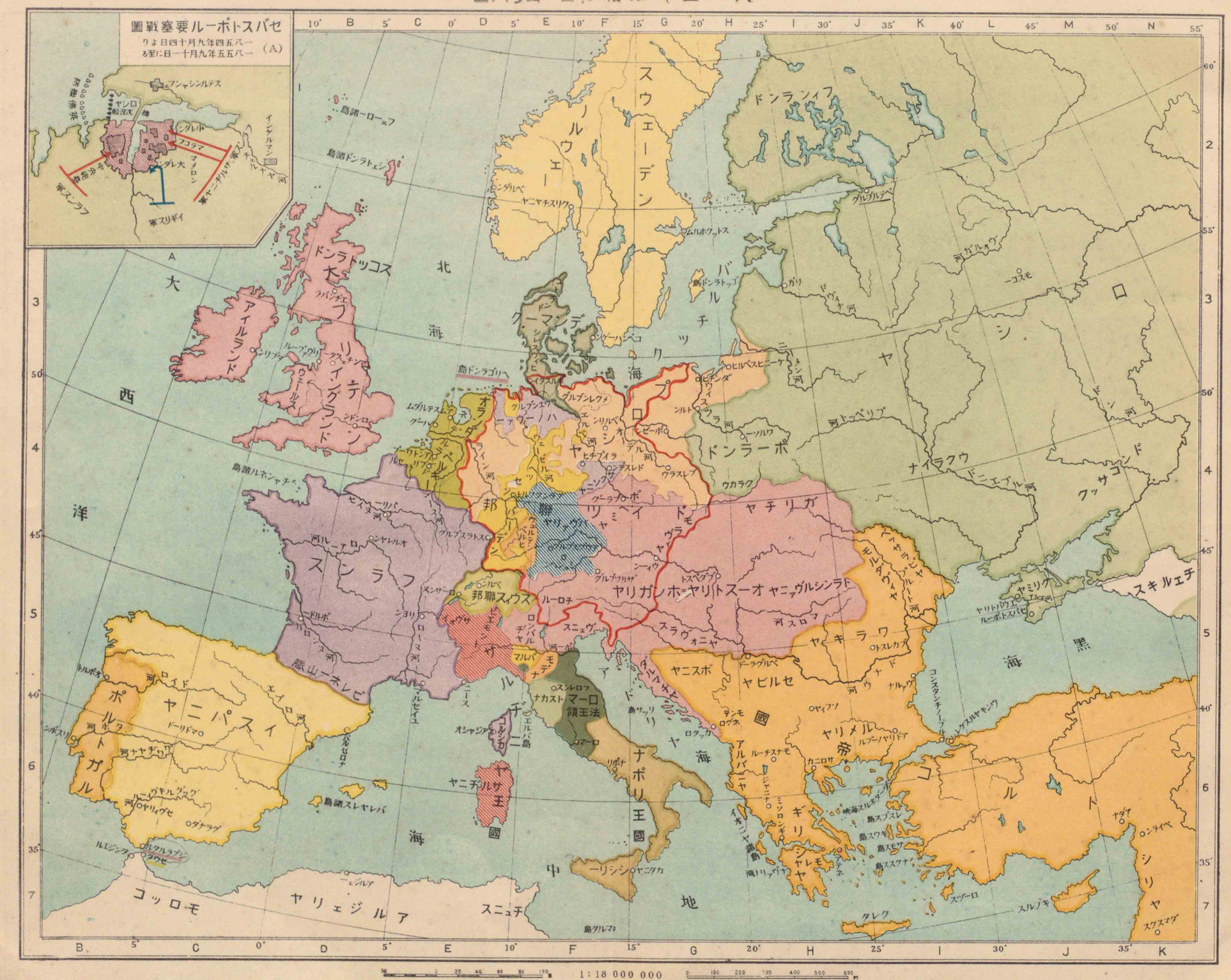
一六四八年のヨーロッパ圖

一六四八年のヨーロッパ圖



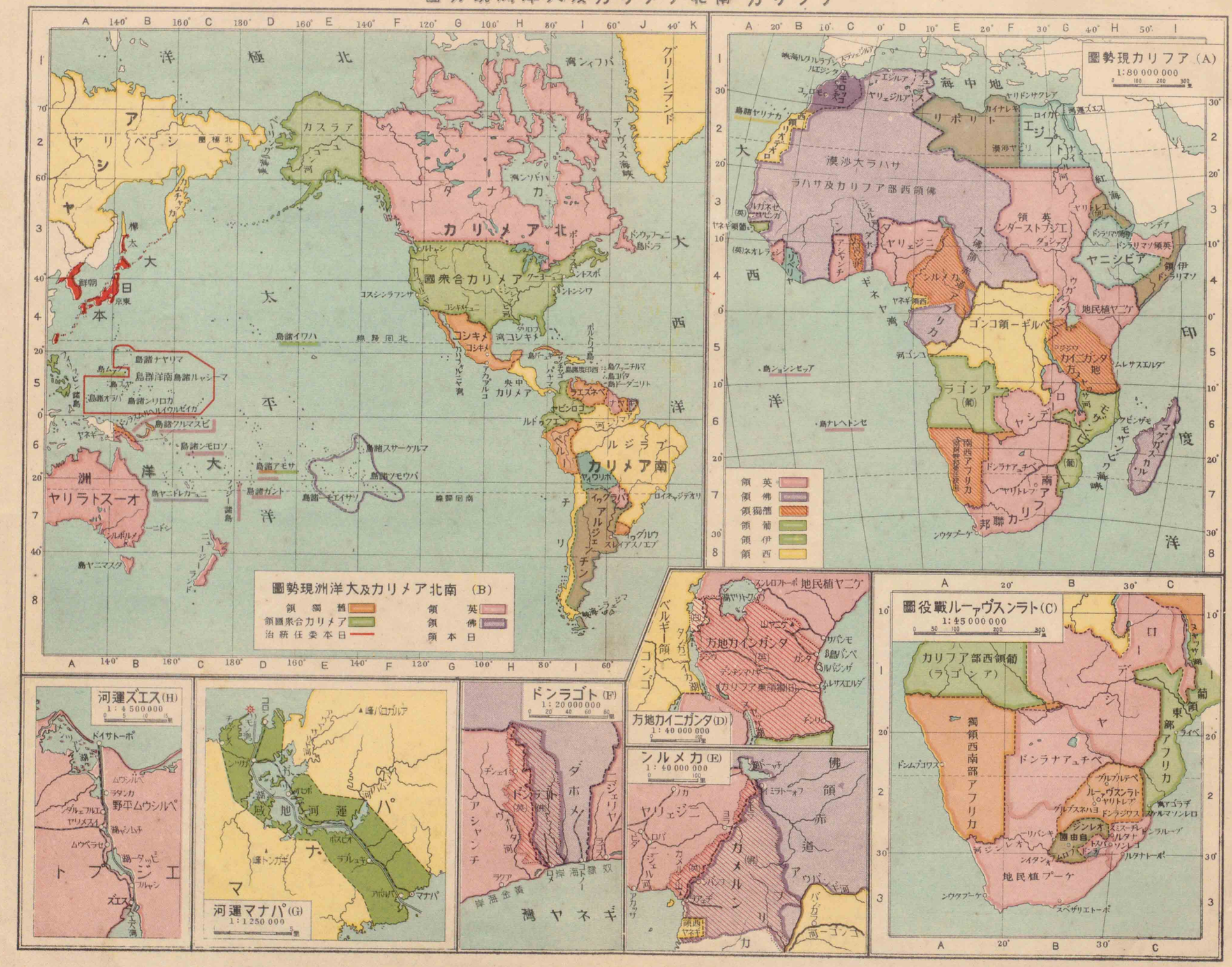
一八一五年以後のヨーロッパ圖

一八一五年以後のヨーロッパ圖


セバスタポール要塞戰圖
(A) 一八五四年九月十四日より一八五五年九月十一日に至る
大西洋
北海
バルチック海
黑海
地中海
ノルウェー
スウェーデン
ドンランド
ドンラッコス
アイルランド
グレートブリテン
ドンラーポ
ヤチリガ
ヤリガレポ
ヤリトスーオ
ヤニヴルシンラド
ヤニスポ
ヤビルセ
ヤリメル帝國
ヤキラワ
ヤニパスイ
ポルトガル
スンラフ
邦聯スイウス
ルーマニア
ヤニチルサ王國
ナポリ王國
教皇領
ヤリシシ
ヤニタカ
ヤリジェリア
コッロモ
スニュチ
スキルエチ
ヤミリク
ヤリトパウエ
ルーポトスパロ
ヤリメル帝國
コルド
ヤリシヤ
ヤリシヤ海
ヤリシヤ海
ヤリシヤ海

アフリカ南北アメリカ及大洋洲現勢圖

アフリカ南北アメリカ及大洋洲現勢圖


(B) 南北アメリカ及大洋洲現勢圖
領獨墨
領國衆合カリメア
治統任委本日
領英
領佛
領本日
(A) アフリカ現勢圖
1:80 000 000
領英
領佛
領獨墨
領葡
領伊
領西
北極洋
大西洋
太平洋
印度洋
地中海
紅海
ヤリベシヤ
カムチヤカ
カスラア
カナダ
北アメリカ
國衆合カリメア
グリーンランド
ヤリラトスーオ
ルジラブ南アメリカ
ヤリビア
ヤリエジプト
ヤリエジニア
ヤリエジルア
ヤリエジプト
ヤリトレア
ヤリトレア
ヤニシビア
ヤリトレア
ヤリトレア
ヤリトレ

世界大戰以後のヨーロッパ

北海
バルチック海
黑海
ヤニトスエ
ヤンブトラ
ヤニワトリ
ヤシロ東
ドンラーポ
ヤチワガ
ヤキラワ
ヤニマールビヤ
ヤリガルブ
ヤリガンホ
ヤリトスーオ
ヤィヴラスーゴーユ
ヤキ
ヤミ
ヤリファヴバ
ヤニアヴルシンラド
ヤニスボ
ヤビルセ
ヤリ
ヤ
ヤミリク
ヤ
ヤ
ヤ

世界大戰以後のヨーロッパ

北海
ノルウェー
スウェーデン
ボトニヤ湾
ドンラ
ヤエストエ
ヤウトラ
ヤニワトリ
ヤシロプ東
ドンラーポ
ヤチリガ
ヤリガンホ
ヤニマールビヤ
ヤキラワ
ヤリガルブ
ヤイヴラスーゴーユ
ヤビルセ
ヤニスボ
ヤリトスーオ
スウィス
ヤミキアウロスコッチ
ヤミ
ヤイラクウ
ヤミリク
ヤリア
黑海
地中海
ヤレモ
トーリク
スルプキ
リポリト
ヤリェジルア
チュニス
ヤリダア
ヤリドンサクレア
ヤリ
ヤニコ
ヤニ
ヤ
ヤ
ヤ

現代ヨーロッパ・アジア圖

ドンラン・リグ
(クルマンヂ)
ドーバルケヴス
(ノルウェー)
ドンラフセジツンラフ
岬ノルドカップ
岬ノルドカップ
岬ノルドカップ

現代ヨーロッパ・アジア圖

昭和十二年七月十日印刷
昭和十二年七月十三日發行
昭和十三年一月十日訂正再版印刷
昭和十三年一月十五日訂正再版發行

中等西洋歷史（中學校用）

定價金壹圓參拾四錢

著作權所有

著者　瀨川秀雄

發行兼印刷者　東京市神田區神保町一丁目三番地
合資會社　冨山房

代表社員　東京市小石川區久堅町百〇八番地
坂本嘉治馬

印刷所　東京市神田區神保町一丁目三番地
共同印刷株式會社

發行所　東京市神田區神保町一丁目三番地
合資會社　冨山房
電話神田二、一七一——二、一七八番
振替口座東京五〇一番

荻村製

広島大学図書
2000081602